

918.6
1989k

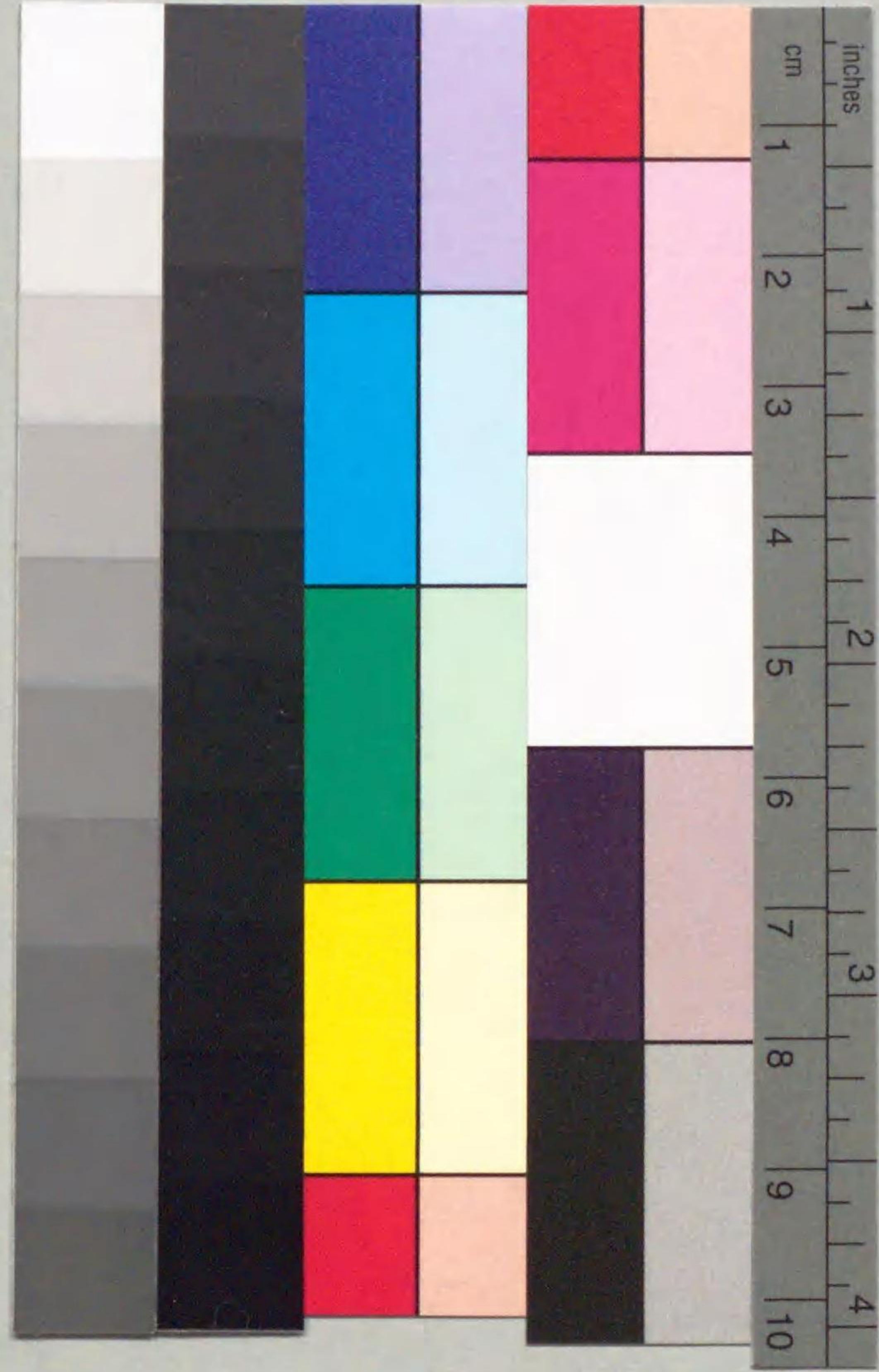


00252019

918.6
I989k

事故本
欠ページ
P.529-534
同本あり
798-167
1991.6.28.

口
複
写





後

花

金

十

01009

918.6 I 9892

目次

紅	玉	(大正二年七月)	一
海神別荘		(大正二年十二月)	六
戀女房		(大正二年十二月)	七
湯島の境内		(大正三年十月)	二三
錦染瀧白糸		(大正五年二月)	三五
日本橋		(大正六年五月)	三七
天守物語		(大正六年九月)	四九
山吹		(大正十二年六月)	五〇



Handwritten vertical text in black ink, possibly a signature or date.



252019

戦國茶漬 (大正十五年一月).....	五七
多神教 (昭和二年三月).....	五七
お忍び (昭和十一年一月).....	六三
かきぬき.....	六五

紅玉

時

現代、初冬。

場所。

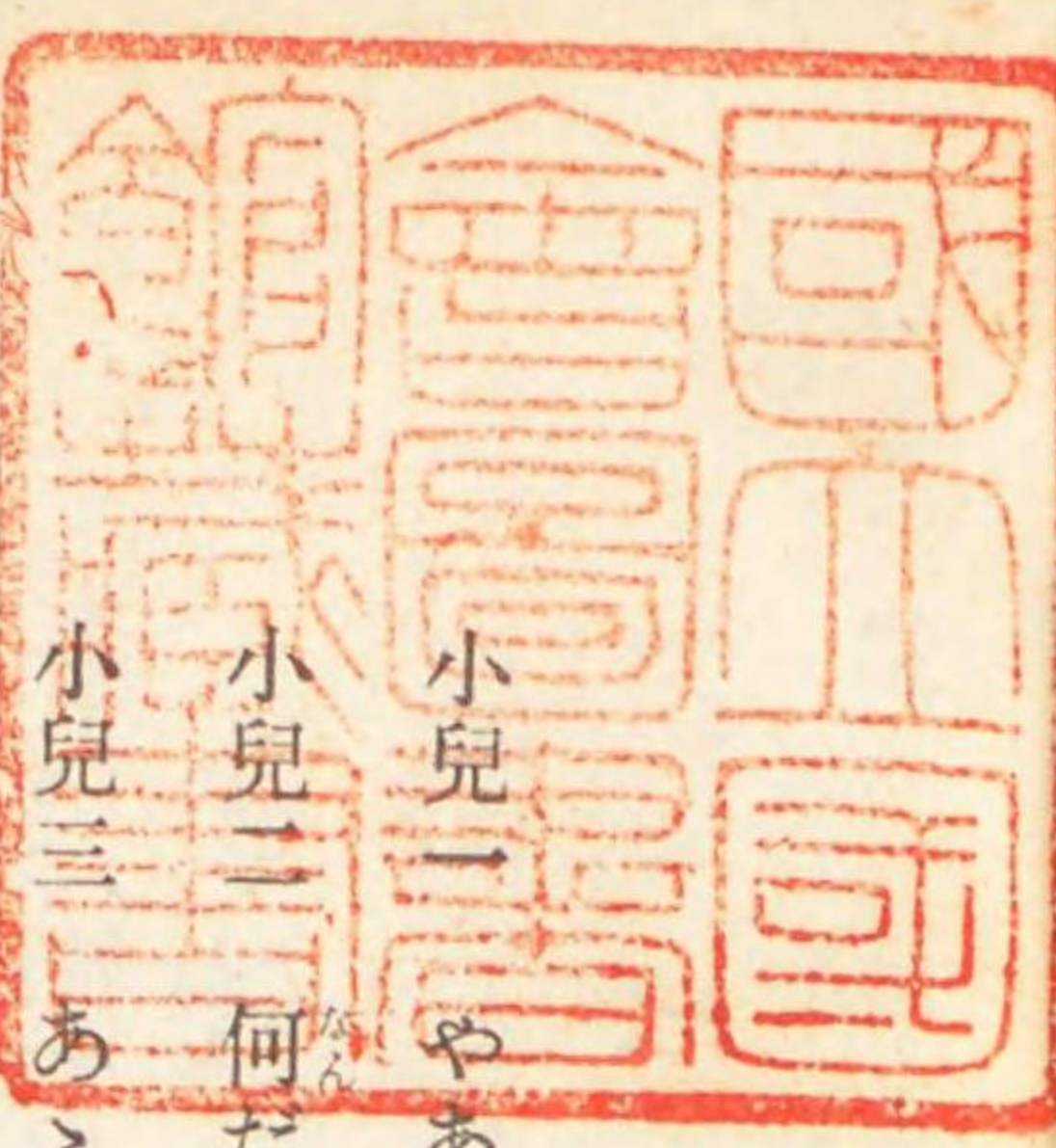
府下郊外の原野。

人物。

畫工。侍女。(烏の假裝したる)

貴夫人。老紳士。少紳士。小兒五人。

——別に、三羽の烏。(侍女と同じ扮裝)



小兒一 やあ、停車場の方の、遠くの方から、あんなものが遣つて來たぜ。

小兒二 何だい。

小兒三 あ、大なるものを背負つて、蹠跟々々來るねえ。

小兒四 影法師まで、ぶら／＼して居るよ。

小兒五 重いんだらうか。

小兒一 何だ、引越かなあ。

小兒二 構ふもんか、何だつて。

小兒三 御覽よ、脊よりか高い、障子見たやうなものを背負つてるから、
だ。 凧が歩行いて來るやう

小兒四 糸をつけて揚げる眞似エして遣らう。

小兒五 遣れ／＼、おもしろい。

玉 紅
凧を持つたのは凧を上げ、獨樂を持ちたるは獨樂を廻す。手にもなき一人、一方に向ひ、
凧の糸を手繰る眞似して笑ふ。

畫工 (杵張のまゝ、絹地の畫を、やけに紐からげにして、薄汚れたる背廣の背に負ひ、初冬、枯野の夕日影にて、あか／＼と且つ寂しき顔。酔へる足どりにて登場) ……落第々々、大落第。(ぶらつく體を杖に突掛くる狀、疲切つたる樵夫の如し。しばらくして、叫ぶ) 畜生、狀を見やがれ。

聲に驚き、且つ活ける玩具の、手許に近づきたるを見て、絲を手繰りたる小兒、衝と開いて素知らぬ顔す。

畫工、其の事には心付かず、立停まりて嬉戲する小兒等を眊す。

よく遊んでるな、あゝ、羨しい。何うだ。皆、面白いか。

小兒等、彼の様子を見て忍笑す。中に、絲を手繰りたる一人。

小兒三 あゝ、面白かつたの。

畫工 (管をまく口吻) 何、面白かつた。面白かつたは不可んな。今の若さに。…小兒をつかまへて、今の若さも變だ。(笑ふ) はゝ、面白かつたは心細い。過去つた事のやうで情ない。面白いと云へ。面白がれ、面白がれ。尙ほ其の上に面白く成れ。むゝ、何うだ。

小兒三 だつて、兄さん怒るだらう。

畫工 (解し得ず) 俺が怒る、何を…何を俺が怒るんだ。生命がけで、描いて文部省の展覽會

で、平つくばつて、可いか、洋服の膝を膨らまして膝行つてな、いゝ圖ぢやないぜ、審査所のお玄關で頓首再拜と仕つた奴を、紙鐵砲で、ボンと撥ねられて、ぎやふんとまるつた。それでさへ怒り得ないで、悄悄と杖に縋つて背負つて歸る男ぢやないか。景氣よく馬肉で呷つた酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい處へ、げつそり空腹と來て、蕎麥ともいかない。停車場前で饅飴で飲んだ、臟腑が宛然蚯蚓のやうな、しっこしのない江戸兒擬が、何うして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、だらしやない。

他の小兒はきよろ／＼見て居る。

小兒三 何だか知らないけれどね、今、向うから來る兄さんに、絲目をつけて手繰つて居たんだぜ。

畫工 何だ、絲を着けて…手繰つたか。いや、怒りやしない。何の眞似だい。

小兒一 兄さんがね、然うやつてね、ぶら／＼來た處がね。

小兒二 遠くから、まるで以て、凧の形に見えたんだもの。

畫工 はゝあ、凧か。(背負つてる繪を見る) むゝ、其處で、(仕形しつゝ)と遣つて面白がつて居たんだな。處で、俺が恠う近く來たから、怒られやしないかと思つて、其の惡戯を止めたんだ。だから、面白かつたと云ふのか。…かつたは寂しい、つまらない。壯に面白がれ、もつと面

白がれ。さあ、糸を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧に成つて、上つて遣らう。上つて、高い空から、上野の展覧會を見て遣る。京、大阪を見よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの兒來て煽れ、それ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。(笑ふ)は、は、面白。

小兒等しばらく逡巡す。畫工の機嫌よげなるを見るより、一人は、畫工の背を抱いて、凧を煽る眞似す。一人は駈出して距離を取る。其の一人。

小兒三 やあ、大凧だい、一人ぢや重い。

小兒四 うん、手傳つて遣ら。(と獨樂を懷にして、立並ぶ)——風吹け、や、吹け。山の風吹いて來い。——(同音に囃す。)

畫工 (あふりたる兒の手を離るゝと同時に、大手を開いて) 恚う成りや凧繪だ、提灯屋だ。そりや、しやくるぞ、水汲むぞ、べつかつこだ。

小兒等の糸を引いて駈るがまゝに、ふらくと舞臺を飛廻り、やがて、樹根に撞と成りて、切なき呼吸つく。

暮色到る。

小兒三 凧は切れたつた。

小兒一 暗く成つた。——丁ど可い。

小兒二 又、……あの事をしよう。

其の他 遣らうよ、遣らうよ。——(一同、手はつながず、少しづつ、間をおき、ぐるりと輪に成りて唄ふ。)

青山、葉山、羽黒の権現さん

あとさき言はずに、中はくぼんだ、おかまの神さん

唄ひつゝ、廻りつゝ、繰返す。

畫工 (茫然として黙想したるが、吐息して立つて此を視む。) おい、おい、其は何の唄だ。

小兒一 あゝ、何の唄だか知らないけれどね、恚うやつて唄つて居ると、誰か一人踊出すんだよ。

畫工 踊る? 誰が踊る。

小兒二 誰が踊るつて、此のね、環の中へ入つて踞んでるものが踊るんだつて。

畫工 誰も、入つては居らんぢやないか。

小兒三 でもね、氣味が悪いんだもの。

畫工 氣味が悪いと?

玉 紅
小兒四 あゝ、あの、其がね、踊らうと思つて踊るんぢやないんだよ。ひとりでにね、踊るの。

踊るまいと思つても。だもの、氣味が悪いんだ。

畫工 遣つて見よう、俺を入れろ。

一同 やあ、兄さん、入るかい。

畫工 俺が入る、待て、(畫を取つて大樹の幹によせかく) さあ、可いか。

小兒三 目を塞いで居るんだぜ。

畫工 可、此の世間を、酔つて踊りや本望だ。

青山、葉山、羽黒の權現さん

小兒等唄ひながら畫工の身の周圍を廻る。環の脈を打つて伸び且つ縮むに連れて、畫工、殆んど、無意識なるが如く、片手又片足を異様に動かす。唄ふ聲、愈々冴えて、次第に暗く成る。

時に、樹の蔭より、顔黒く、嘴黒く、烏の頭して眞黒なるマント様の衣を裾まで被りたる異體のもの一個顯れ出で、小兒と小兒の間に交りて齊しく廻る。

地に踞りたる畫工、此の時、中腰に身を起して、半身を左右に振つて踊る眞似す。

續いて、初の黒きものと同じ姿したる三個、人の形の烏、樹蔭より顯れ、同じく小兒等の間に交つて、畫工の周圍を繞る。

小兒等は絶えず唄ふ。いづれも其の怪き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の烏出でて輪に加はる頃より、畫工全く立上り、我を忘れたる狀して踊り出す。初手の烏もともに、就中、

後なる三羽の烏は、足も地に着かざるまで跳梁す。彼等の踊狂ふ時、小兒等は唄を留む。

一同 (手に手に石を二ツ取り、カチ／＼と打鳴らして) 魔が來た、でん／＼。影がさいた、もんもん。(四五度口々に寂しく囁す) 眞個に來た。そりや來た。

小兒のうち一人、誰とも知らず恚く叫ぶとともに、ばら／＼と、左右に分れて逃げ入る。

木の葉落つ。

木の葉落つる中に、一人の畫工と四個の黒き姿と頻に踊る。畫工は靴を穿いたり。後の三羽の烏皆爪尖まで黒し。初の烏ひとり、裾をこぼる、裊紅に、足白し。

畫工 (疲果てたる狀、挫と仰様に倒る) 水だ、水をくれい。

いづれも踊り留む。後の烏三羽、身を開いて一方に翼を交はしたる如く、腕を組合せつ、立ちて視む。

初の烏 (うら若き女の聲にて) 寝たよ。まあ……だらしない事。人間、恚うは成りたくないものだわね。——其のうち目が覺めたら行くだらう——別にお座敷の邪魔にも成るまいから。

……どれ、(樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立てに交叉したる三脚の竹を取出して据ゑ、次に、其上に圓き板を置き、卓子の如くす。)

後の鳥、此の時、三羽とも無言にて近づき、手傳ふ狀にて、二脚のズック製、おなじ組立ての床几を卓子の差向ひに置く。

初の鳥、又、旅行用手提げの中より、葡萄酒の瓶を取出だし卓子の上に置く。後の鳥等、青き酒、赤き酒の瓶、續いてコップを取出だして並べ揃ふ。

やがて、初の鳥、一挺の蠟燭を取つて、此に火を點す。舞臺明るなる。

初の鳥 (思ひ着きたる體にて、一ツの瓶の酒を玉盞に酌ぎ、燭に翳す。) お、綺麗だ。燭が映つて、透徹つて、いつかの、あの時、夕日の色に輝いて、丁ど東の空に立つた虹の、其の虹の目のやうだと云つて、薄雲に翳して御覽なすつた、奥様の白い手の細い指には重さうな、指環の球に似てること。

三羽の鳥、打傾いて聞きつゝあり。

あ、玉が溶けたと思ふ酒を飲んだら、どんな味がするだらうねえ。(鳥の頭を頂きたる、咽喉の黒き布をあけて、少き女の面を顯し、酒を飲まんとして猶豫ふ) あれ、こゝは私には口だけ

れど、鳥にすると丁ど咽喉だ。可厭だよ。咽喉だと血が流れるやうでねえ。こんな事をして居るんだから、氣に成る。よさう。まあ、獨言を云つて、誰かと話をして居るやうだよ……

(四邊を眊す) 然う、思つた同士、人前で内證で心を通はす時は、一ツに向つた卓子が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽な、しかし脈を打つて、血の通ふ、其の符牒で、黙つて居て、暗號が出来ると、何時も奥様がおつしやるもんだから。——卓子さん(卓をたゝく)

殊にお前さんは三ツ脚で、狐狗狸さん、其のまゝだもの。生きてるも同じだと思ふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うつかりして、少々大事なことを饒舌つたんだから、お前さん聞いたばかりにして置いておくれ。誰にも言つては不可いよ。一寸、注いだ酒を何うしよう。ああ、いゝ事がある。(酔倒れたる畫工に近づく。後の鳥一ツ、同じく近寄りて、畫工の項を抱いて仰向けにす。)

酔ばらひさん、さあ、冷水。

畫工 (飲みながら、現にて) あ、日が出た、が、俺は暗夜だ。(其まゝ寝返る。)

初の鳥 日が出たつて——赤い酒から、私の此の鳥を透かして、まあ。——晝に描いた太陽の夢を見たんだらう。何だか謎のやうな事を言つてるわね。——さあ、お寢室ごしらへをして置きませう。(もとに立戻りて、又薄の中より、此のたびは一領の天幕を引出し、卓子を蔽うて

建廻はす。三羽の鳥、左右より此を手傳ふ。天幕の裡は、見ぶつ席より見えざるあつらへ。
お樂みだわね。(天幕を背後にして正面に立つ。三羽の鳥、其の兩方にイむ。)

もう、すつかり日が暮れた。(時に、はじめてフト自分の他に、鳥の姿ありて立てるに心付く。されどおのが目を怪む風情。少しづつ、あちこち歩行く。歩行くに連れて、鳥の形動き絡ふを見て、次第に疑惑を増し、手を舉ぐれば、鳥等も同じく舉げ、袖を振動かせば、齊しく振動かし、足を爪立つれば爪立ち、踞れば踞むを透し視めて、今はしも激しく恐怖し、慌しく駈出す。)帽子を目深に、オーバコートの鼠色なるを被、太き洋杖を持てる老紳士、憂鬱なる重き態度にて登場。

初はじめの鳥ハタと行當る。驚いて身を開く。紳士其の袖を捉ふ。初はじめの鳥、遁れんとして威す眞似して、かあく、と鳥の聲をなす。泣くが如き女の聲なり。

紳士 こりや、地獄の門を背負つて、空を飛ぶ眞似をするか。(掴ひしぐが如くにして突離す。初はじめの鳥、挫くだと地に坐す。三羽の鳥は故とらしく吃驚の身振をなす。)地を這ふ鳥は、鳴く聲が違ふぢやらう。うむ、何うぢや。地を這ふ鳥は何と鳴くか。

初はじめの鳥 御免なさいまし、何うぞ、御免なさいまし。

紳士 は、あ、御免なさいましと鳴くか。(繰返して)御免なさいましと鳴くぢやな。

初はじめの鳥 はい。

紳士 うむ、(重く頷く)聞えた。とに角、汝の聲は聞えた。——こりや、俺の聲が分るか。

初はじめの鳥 え、。

紳士 俺の聲が分るかと云ふんぢや。こりや、面を上げろ。——何うだ。

初はじめの鳥 御前様、あれ……

紳士 (杖を以つて 其の裾を壓ふ)ばさく騒ぐな。槍で脇腹を突かれる外に、樹の上へ得上る身體でもないに、羽ばたきをするな、女郎、手を支いて、静として口をきけ。

初はじめの鳥 眞に申譯のごさいません、飛んだ失禮をいたしました。……先達つて、奥様がお好みのお催しで、お邸に園遊會の假装がございました時、私がいたしました。あの、此のこしらへが、餘りよく似合つたと、皆様が然うおつしやいましたものでございますから、つい、心得違ひな事をはじめました。あの……後で、御前様が御旅行を遊ばしましたお留守中は、お邸にも御用が少うございますものですから、自分の買もの、用達したの、何のと申して、奥様にお暇を頂いては、こんな處へ出て参りまして、偶に通りますものを驚かしますのが面白くて成りませんので、つい、あの、癖になりました、今晚も……旦那様に申譯のごさいません失禮をいたしました。何うぞ、御免遊ばして下さいまし。

紳士 言ふ事は其だけか。

初の鳥 はい？（聞返す。）

紳士 俺に云ふ事は、それだけか、女郎。

初の鳥 あの、（口籠る）今夜は何ういたしました事でございますか、私の形……あの、影法師が、此の、野中の宵闇に判然と見えますのでございます。其さへ氣味が悪うございますのに、氣をつけて見ますと、二つも三つも、私と一所に動きますのでございますもの。三方に分れてイむ、三羽の鳥、また打領く。

もう可恐く成りまして、夢中で駈出しましたものですから、御前様に、つい——あの、そして……御前様は、何時御旅行さきから。

紳士 俺の旅行か。ふ、ん。（自ら嘲ける口吻）汝たちは、俺が旅行をしたと思ふか。

初の鳥 はい、一昨日から、北海道の方へ。

紳士 俺の北海道は、すぐに俺の邸の周圍ぢや。

初の鳥 はあ、（驚く。）

紳士 俺の旅行は、冥土の旅の如きものぢや。昔から、事が、恚う云ふ事が起つて、其が破滅に近づくと時は、誰もするわ。平凡な手段ぢや。通例過ぎる遣方ぢやが、爲んと云ふ事には行かない。

かつた。今云うた冥土の旅を、可厭ぢやと思つても、誰もしないわけには行かぬやうなものぢや。又、汝等とても、恚う云ふ事件の最後の際には、其の家の主人か、良人か、可えか、俺がぢや、或手段として旅行するに極つとる事を知つて居る。汝は知らいでも、伶俐な彼は知つて居る。汝とても、少しは分つて居らう。分つて居て、其の主人が旅行と云ふ隙間を狙ふ。故と安心して大膽な不埒を働く。うむ、耳を蔽うて鐸を盗むと云ふのぢや。いづれ音の立ち、聲の響くのは覺悟ぢやらう。何も彼も隠さずに言つて了へ。何時の事か。一體、何時頃の事か。これ。

侍女 何時頃とおつしやつて、あの、影法師の事でございませうか。其は唯今……

紳士 黙れ。影法師が何か知らんが、汝等三人の黒い心が、形にあらはれて、俺の邸の内外を横行しはじめた時だ。

侍女 御免遊ばして、御前様、私は何にも存じません。

紳士 用意は出来とる。女郎、俺の衣兜には短銃があるぞ。

侍女 え、。

紳士 さあ、言へ。

侍女 御前様、お許し下さいまし。春の、暮方の事でございます。美しい虹が立ちまして、盛り

の藤の花と、つゝじと一所に、お庭の池に影の映りましたのが、薄紫の頭で、胸に炎の翫みま
した、眞紅なつゝじの羽の交つた、其の虹の尾を曳きました大きな鳥が、お二階を覗いて居り
ますやうに見えたのでございます。其の日は、御前様のお留守、奥様が欄干越に、其の景色を
お視めなさいまして、——あゝ、綺麗な、此の白い雲と、蒼空の中に漲つた大鳥を御覽——お
傍に居りました私に然うおつしやいまして——此の鳥は、頭は私の簪に、尾を私の帯に成る
ために來たんだよ。角の九つある、龍が、頭を兜に、尾を草摺に敷いて、敵に向ふ大將軍を飾
つたやうに。……けれども、虹には目がないから、私の姿が見つからないので、頭を水に浸し
て、うなだれ悄れて居る。どれ、目を遣らう——と仰有いますと、右の中指に嵌めておいで遊
ばした、指環の紅い玉でございませう。開いては虹に見えぬし、伏せては奥様の目に見えません。
ですから、其の指環をお抜きなさいまして。

紳士 うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女 そして、雪のやうなお手の指を環に遊ばして、高い處で、青葉の上で、虹の膚へ嵌めるや
うになさいますと、其の指に空の色が透通りまして、紅い玉は、颯と夕日に映つて、まつたく
虹の瞳に成つて、そして晁々と輝きました。其の時でございます。お庭も池も、眞暗に成つた
と思ひます。虹も消えました。黒いものが、ばつと來て、目潰しを打ちますやうに、翼を擴げ

たと思ひますと、其の指環を、奥様の手から攫ひまして、鳥が飛びましたのでございます。露
に光る木の實だ、と紅い玉を、間違へたのでございませう。築山の松の梢を飛びまして、遠く
も参りませんで、塀の上に、此の、野の末の處へ入ります、眞赤な、まん圓な、大きな太陽様
の前に黒く留まつたのが見えたのでございます。私は跣足で庭へ駈下りました。駈けつけて聲
を出しますと、鳥は其のまゝ、塀の外へ又飛びましたのでございます。丁ど其處が、裏木戸の處
でございます。あの木戸は、私が御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開け遊ばし
た事と云つては一度もなかつたのでございます。

紳士 うむ、あれは開けるべき木戸ではないのぢや。俺が覺えてからも、止むを得ん凶事で二度
だけは開けなければ成らんぢやつた。が、其とても凶事を追出いたばかりぢや。外から入つて
來た不祥はなかつた。——其が其の時、汝の手で開いたのか。

侍女 え、錠の鍵は、がつちりさゝつて居りましたけれど、赤錆に錆切りまして、壓しますと
開きました。くされて落ちたのでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立つて居たので
ございませう。其の男が、鳥の嘴から落しました奥様の其の指環を、掌に載せまして、凝と見
て居ましたのでございます。

侍女 え、。

紳士 相手は其奴ぢやな。

侍女 あの、私がわけを言つて、其の指環を返しますやうに申しますと、申戯らしく、否、此は、人間の手を放れたもの、烏の嘴から受取つたのだから返されぬ。尤も、烏になれば、何時なりとも返して上げよう——と然う申して笑ふんでございます。それでも、何うしても返しません。そして——確に預る、決して迂散なものでない——と云つて、丁と、衣兜から名刺を出してくれました。奥様は、面白いね——とおつしやいました。それから日を極めまして、同じ暮方の頃、其の男を木戸の外まで呼びましたのでございます。其の間に、此の、あの、烏の装束をお誂へ遊ばしました。そして私がそれを着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございしましたが、なぶつて遣らう、とおつしやつて、奥様が御自分に烏の装束をおめし遊ばして、塀の外へ——でも、ひよつと、野原に遊んで居る小兒などが怪しい姿を見て、騒いで悪いと云ふお心付きから、四阿へお呼び入れに成りました。

紳士 奴は、あの木戸から入つたな。あの、木戸から。

侍女 男が吃驚するのを御覽、と私にお囁きなさいました。奥様が、烏は脚では受取らない、とおつしやつて、男が掌にのせました指環を、此處をお開きなさいまして、(咽喉のあく處を示す)口でおくはへ遊ばしたのでございます。

紳士 口でな、最う其の時から。毒蛇め。上願下願へ拳を引掛け、透通る齒と紅さいた唇を、めりめりと引裂く、賣婦。(足を舉げて、枯草を踏蹂る。)

畫工 うゝむ、(二聲ばかり、夢に魔されたるものの如し。)

紳士 (はじめて心付く) 女郎、此方へ来い。(杖を以て一方を指す。)

侍女 (震へながら) はい。

紳士 頭を着ける、被れ。俺の前を烏のやうに躍つて行け、——飛べ。邸を横行する黒いもの、形を確と見覺えて置かねばならん。躍れ。衣兜には短銃があるぞ。

侍女、烏の如く其の黒き袖を動かす。をの、き震ふと同じ状なり。紳士、あとに續いて入る。

三羽の烏 (聲を揃へて叫ぶ) おいらのせるぢやないぞ。

一の烏 (笑ふ) は、は、は、其處で何と言はう。

二の烏 せう事はあるまい。矢張り、あとは、烏の所爲だと言はねば成るまい。

三の烏 すると、人間のした事を、俺たちが引被るのだな。

玉 紅
二の烏 かぶらうとも、背負はうとも。かぶつた處で、背負つた處で、人間のした事は、人間同士が勝手に夥間うちで帳面づらを合せて行く、勘定の遣り取りする。俺たちが構ふ事は少しも

ない。

三の鳥 成程な、罪も報も人間同士が背負ひつこ、被りつこをするわけだ。一體、此のたびの事の發源は、其處な、おどのが悪戯からはじまつた次第だが、さて、憊うなれば高い處で見物で事が済む。嘴を引傾げて、ことんくと案じて見れば、われらは、これ、餘り性の善い夥間でないな。

一の鳥 いや、悪い事は少しもない。人間から言はせれば、善いとも悪いとも言はうがまゝだ。俺は唯屋の棟で、例の夕飯を稼いで居たのだ。處で艶麗な、奥方とか、それ、人間界で言ふものが、虹の目だ、虹の目だ、と云ふものを（嘴を指す）此の黒い、鼻の先へひけらかした。此の節、肉どころか、血どころか、贅澤な目玉などはつひに賞翫した驗がない。鳳凰の髓、麒麟の腮さへ、世にも稀な珍味と聞く。虹の目玉だ、やあ、八千年生延びろ、と逆落しの廂はづれ、鶉越を遣つたがよ、生命がけの仕事と思へ。鳶なら油揚げも攫はうが、人間の手に持つたま、を引手繰る段は、お互に得手でない。首尾よく、かちりと銜へてな、スポンと中庭を抜けたは可かつたが、虹の目玉と云ふ件の代ものは何うだ、齒も立たぬ。や、堅いの候の。先祖以來、田螺を突つくに鍊へた口も、さて、がつくりと參つたわ。お庇で舌の根が弛んだ。癩だがよ、振散して素飛ばしたまでの事だ。な、其が源で、人間が何をせうと、彼をせうと、薩張俺が知つた事ではあるまい。

二の鳥 道理かな、説法かな。お釋迦様より間違ひのない事を云ふわ。いや、又おどの指環を銜へたのが悪ければ、晴上つた雨も悪し、ほかくとした陽氣も悪し、虹も悪い、と云はねば成らぬ。雨や陽氣がよくないからとて、何うするものだ。得ての、空に美しい虹の立つ時は、地にも綺麗な花が咲くよ。芍薬か、牡丹か、菊か、猿が折つて蓑にさす、お花畑のそれだなし不思議な花よ。名も知れぬ花よ。雑と虹のやうな花よ。人間の家の中に、然うした花の咲くのは壁にうどんげの開くとおなじだ。俺たちが見れば、薄暗い人間界に、眩い虹のやうな、其の花のバツと咲いた處は鮮麗だ。な、家を忘れ、身を忘れ、生命を忘れて咲く怪しい花ほど、美しい眺望はない。分けて今度の花は、おどのが蒔いた紅い玉から咲いたもの、吉野紙の霞で包んで、露をかためた硝子の器の中へ密と藏つても置かうものを。人間の黒い手は、此を見るが最後掴み散らす。當人は、黄色い手袋、白い腕飾と思ふさうだ。お互に見れば眞黒よ。人間が見て、俺たちを黒いと云ふと同一かい、別して今來た親仁などは、鐵棒同然、腕に、火の舌を擲めて吹いて、右の不思議な花を微塵にせうと苛つて居るわ。野暮めがな。はて、見て居れば綺麗なものを、仇花なりとも美しく咲かして置けば可い事よ。

三の鳥 なぞとな、お二めが、體の可い事を吐す癖に、朝鳥の、朝櫻、朝露の、朝風で、朝飯を

急ぐ和郎だ。何だ、仇花なりとも、美しく咲かして置けば可い事だ。からくからと笑はせるな。お互に此處に何して居る。其の虹の散るのを待つて、やがて食はう、突かう、嘗めう、しやぶらうと、毎夜、毎夜、此の間、……咽喉、嘴を、カチ／＼と嚙鳴らいて居るのでないかい。

二の鳥 然ればこそ待つて居る。櫻の枝を踏めばと云つて、蟲の數ほど花片も露もこぼさぬ俺たちだ。此のたびの不思議な其の大輪の虹の臺、紅玉の蕊に咲いた花にも、俺たちが、何と、手を着けるか。雛芥子が散つて實に成るまで、風が誘ふを視めて居るのだ。色には、戀には、情には、其の咲く花の二人を除けて、他の人間は大概風だ。中にも、ぬしと云ふものはな、主人と云ふものはな、淵に棲むぬし、峰にすむ主人と同じで、此が暴風雨よ、旋風だ。一溜りもな、く吹散らす。あ、無慙な。

一の鳥 と云ふ嘴を、こつ／＼鳴らいて、内々其の吹き散るのを待つのは誰だ。

二の鳥 は、は、は、俺達だ、は、は、は、先づ口だけは體の可い事を言うて、其の實はお互に餌食を待つのだ。又、此の花は、紅玉の蕊から虹に咲いたものだが、散る時は、肉に成り、血に成り、五色の腸と成る。やがて見ろ、脂の乗つた鮫鱈のひも、と云ふ珍味を、つるりだ。

三の鳥 何時の事だ、あ、聞いただけでも堪らぬわ。(ばたくと羽を煽つ。)

二の鳥 急くな、どつち道俺たちのものだ。餌食が其の柔かな白々とした手足を解いて、木の根

の塗膳、錦手の木の葉の小皿盛と成るまでは、精々、咲いた花の首尾を守護して、夢中に躍跳ねるまで、樂ませて置かねば成らん。網で捕つたと、釣つたとは、鯛の味が違ふと言はぬか。あれ等を苦ませては成らぬ、悲ませては成らぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の鳥 む、其處で、椅子やら、卓子やら、天幕の上げさげまで手傳ふかい。

三の鳥 彼れほどのものを、(天幕を指す)持運びから、始末まで、俺たちが、此の黒い翼で人間の目から蔽うて手傳ふとは悟り得ず、薄の中に隠したつもりの、彼奴等の甘さが堪らん。が、俺たちの爲す處は、退いて見ると、如法これ下女下男の所爲だ。天が下に何と鳥ともあらうものが、大分權式を落すわけだな。

二の鳥 獅子、虎、豹、地を走る獸、空を飛ぶ仲間では、鷲、鷹、みさごぐらるなものか、餌食を掴んで容色の可いのは。……熊なんぞが、あの形で、推の實を拜んだ形な。鶴とは申せど、尻を振つて泥鰌を迫懸ける容體などは、餘り喝采とは參らぬ圖だ。誰も誰も、食ふためには、品も威も下げると思へ。然までにして、手に入れる餌食だ。突くと成れば會釋はない。骨までしやぶるわ。餌食の無慙さ、いや、又其の骨の肉汁の旨さはよ。(身震ひする。)

一の鳥 (聞く半ばより、じろく／＼と酔臥したる畫工を見て居り) おふた、お二どの。

二の鳥 あい。

三の鳥 あい、と吐す、魔ものめが、ふてくしい。

二の鳥 望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。

一の鳥 いや、串戯は措け。俺は先刻から思ふ事だ、待設けの珍味も可いが、こゝに目の前に轉がつた餌食は何うだ。

三の鳥 其の事よ、血の酒に酔ふ前に、腹へ底を入れて置く相談には成るまいかな。何分にも空腹だ。

二の鳥 御同然に夜食前よ。俺も一先に心付いては居るが、其の人間は未だ食頃には成らぬと思ふ。念のために、面を見ろ。

三羽の鳥 ばさ／＼と寄り、頭を、手を、足を、ふん／＼と嗅ぐ。

一の鳥 堪らぬ香だ。

三の鳥 あゝ、旨さうな。

二の鳥 いや、まだ然うは成るまいか。此の齒をくひしばつた處を見い。總じて寝て居ても口を結んだ奴は、蓋をした貝だと思へ。うかつに嘴を入れると最後、大事な舌を挟まれる。やがて意地汚の野良犬が来て舐めよう。這奴四足めに瀬踏をさせて、可いと成つて、其の後で取蒐らう。食ものが、悪いかして。脂のない人間だ。

一の鳥 此の際、乾ものでも構はぬよ。

二の鳥 生命がけて乾ものを食つて、一分が立つと思ふか、高時繪のお香を待て。

三の鳥 や、待つと云へば、例の通り、ほんのりと薫つて来た。

一の鳥 おゝ、人臭いぞ。そりや、女のにほひだ。

二の鳥 はて、下司な奴、同じ事を不思議な花が薫ると言へ。

三の鳥 おゝ、蘭奢待、蘭奢待。

一の鳥 鈴ヶ森でも、此の薫は、百年目に二三度だつたな。

二の鳥 化鳥が、古い事を云ふ。

三の鳥 なぞと少い氣で居ると見える、はゝはゝ。

一の鳥 いや、恚うして暗やみで笑つた處は、我ながら不氣味だな。

三の鳥 人が聞いたら何と言はう。

二の鳥 烏鳴だ、と吐す奴よ。

一の鳥 何にも知らずか。

三の鳥 不便な奴等。

二の鳥 (手を取合うて) おゝ、見える、見える。それ侍女の氣で迎へて遣れ。(みづから天幕の

中より、燭したる蠟燭を取出だし、野中に黒く立ちて、高く手に翳す。一の鳥、三の鳥は、二の鳥の裾に踞む。

薄の彼方、舞臺深く、天幕の奥斜めに、男女の姿立顯る。一は少紳士、一は貴夫人、容姿美しく輝くばかり。

二の鳥 戀も風、無常も風、情も露、生命も露、別るゝも薄、招くも薄、泣くも蟲、歌ふも蟲、跡は野原だ、勝手に成れ。(怪しき聲にて呪す。一と三の鳥、同時に跪いて天を拜す。風一陣、灯消ゆ。舞臺一時暗黒。)

はじめ、月なし、此の時薄月出づ。舞臺明く成りて、貴夫人も少紳士も、三羽の鳥も皆見えす。天幕あるのみ。

畫工、猛然として覺む。

魔はれたる如く四邊を向はし、慌しく畫の包をひらく、衣兜のマッチを探り、枯草に火を點す。

野火、炎々。絹地に三羽の鳥あらはる。

凝視。

彼處に敵あるが如く、腕を舉げて睥睨す。

畫工 俺の畫を見る。——待て、しかし、繪か、其とも實際の奴等か。

——幕——

海神別莊

僧都 お腰元衆。
 侍女一 (薄色の洋装したるが扉より出づ) はい、はい。これは御僧。
 僧都 や、目覚しく、美しい、異つた扮装でおいでなさる。
 侍女一 御挨拶でございます。美しいか何うかは存じませんが、異つた支度には違ひないのでございます。若様、豫てのお望みが叶ひまして、今夜お興入のございます。若奥様が、島田のお髪、お振袖と承りましたから、私どもは、餘計其のお姿のお目立ち遊ばすやうに、皆して、恚やうに申合せましたのでございます。
 僧都 はあ、扱てもお似合ひなされたが、何處の浦の風俗ぢやらうな。
 侍女一 度々海の上へお出でなさいますもの、よく御存じでおあんなさいませうのに。
 僧都 いや、荒海を切つて影を顯すのは暴風雨の折から。如法大抵暗夜ぢやに因つて、見えるのは墓の船に、死骸の蠢く裸體ばかり。色ある女性の衣などは睫毛にも掛りませぬ。さりとも小僧のみぎりはの、蒼い炎の息を吹いても、素奴色の白いはないか、袖の紅いはないか、と胴の

時。

現代。

場所。

海底の琅玕殿。

人物。

公子。 沖の僧都。(年老いたる海坊主) 美女。 博士。

女房。 侍女。(七人) 黒潮騎士。(多數)

森嚴藍碧なる琅玕殿裡。 黒影あり。 — 沖の僧都。

間、狭間、帆柱の根、錨綱の下までも、あなぐり探いたものなれども、孫子は措け、僧都に於ては、久しく心にも掛けませいで、一向に不案内ぢや。

侍女一 (笑ふ) お精進でおいで遊ばします。もし、これは、櫻貝、蘇芳貝、いろくの貝を蕊にして、花の波が白く咲きます、其の渚を、青い山、緑の小松に包まれて、大陸の婦たちが、夏の頃、百合、桔梗、月見草、夕顔の雪の装などして、旭の光、月影に、遙に(高濶なる碧瑠璃の天井を、髪艶やかに打仰ぐ)姿を映します。あ、風情な。美しいと視めましたものでございませうから、私ども皆が、今夜は此の服装に揃へました。

僧都 一段とお見事ぢや。が、朝ほど御機嫌伺ひに出ました節は、御殿、お腰元衆、いづれも不斷の服装でおいでなされた。其の節は、今宵、あの美女が此へ興入の儀はまだ極らなんだ。地體人間は決斷が遅いに因つてな。…其ぢやに、豫てのお心掛か。彌疾く装が間に合つたものなう。

侍女一 まあ、貴老は。私たち此の玉のやうな皆の膚は、白い尾花の穂を散らした、山々の秋の錦が水に映ると同じに、恚うと思へば、つい其れなりに、思ふまゝ、身の装の出来ませう體で居りますものを。貴老はお忘れなさいましたか。

貴老は。…貴老だとして違ひはしません。緋の法衣を召さうと思へば、お思ひなさいませ、と右左、峯に、一本燃立つやうな。

僧都 まあ、ま、分つた。(腰を屈めつゝ、壓ふるが如く掌を擧げて制す) 何とも相濟まぬ儀ぢや。海の住居の難有さに馴れて、陰日向、雲の往來に、潮の色の變ると同様。如意自在心のまゝ、立處に身の装の成る事を忘れて居ました。

なれども、僧都が身は、恚うした墨染の暗夜こそ可けれ、愁緋の法衣など絡はうなら、づぶ濡の提灯ぢや、戸惑をした鰯の魚ぢやなどと申さう。壓も石も利く事ではない。(細く丈長き鐵の錨を倒にして携へたる杖を、軽く突直す。)

いや、又忘れては成らぬ。忘れぬ前に申上げたい儀で罷出た。若様へお取次を頼みましょ。

侍女一 畏りました。唯今。…あの、丁ど可い折に存じます。

右の方鬨を排して行く。

僧都 (謹みたる體にて室内を昫す。) はあ、争はれぬ。法衣の袖に春がそよぐ。

(錨の杖を抱きてイむ。)

公子 (衝と押す、鬨を排きて、性急に登場す。面玉の如く藹丈けたり。黒髪を背に捌く。青地錦の直垂、黄金づくりの劍を佩く。上段、一階高き床の端に、端然として立つ。)

珊瑚一株、丈八尺。(此の分、手にて仕方す) 周圍三抱の分にござりまして。え、月の眞珠、花の眞珠、雪の眞珠、いづれも一寸の珠三十三粒、八分の珠百五粒、紅寶玉三十顆、大さ鶴の卵、粒を揃へて、此は碧瑪瑙の盆に裝り、綠寶玉、三百顆、孔雀の尾の渦卷の數に合せ、紫の瑠璃の臺、五色に透いて輝きまする鱈の皮三十六枚、沙金の包七十袋。量目約百萬兩、閻浮檀金十斤也。緞子、縮緬、綾、錦、牡丹、芍藥、菊の花、黄金色の莖、銀覆輪の、月草、露草。

侍女一 もしく、唯今の其は、あの、残らず、其のお娘御の身の代とかにお遣はしの分なのでございますか。

僧都 残らず身の代と?...:はあ、如何さまな。(心付く)不重寶。これはく海松ふさの袖に記して覺えのま、潮に乗つて、颯と讀流しました。はて、何から申した事やら、品目の多い處へ、數々ゆるに。え、く、眞鯛大小八千枚。

侍女一 鯛、鮪ともに二萬疋。鯉、眞那鯉各一萬本。

侍女二 (僧都の前にあり) 大比目魚五千枚。鱧、魴、鮪、あいなめ、目ばる、藻魚の類合せて七百籠。

侍女三 (公子の背後にあり) 若布の其の幅六丈、長さ十五尋のもの百枚一卷九千連。

侍女四 (同じく公子の背後に) 鮫鱧五十袋、虎河豚一頭、大の鮪一番。まあ... (笑ふ。侍女皆笑ふ。)

僧都 (額の汗を拭く) それく然やう、然やう。

公子 (微笑しつゝ) 笑ふな、老人は眞面目で居る。

侍女五 (最も少し。齊しく公子の背後に附添ふ。派手に美しき聲す) 月の灘の桃色の枝珊瑚樹、對の一株、丈八尺、周圍三抱の分。一寸の玉三十三粒... 雪の眞珠、花の眞珠。

侍女一 月の眞珠。

僧都 少時。までぢやく、までにござる。... 桃色の枝珊瑚樹、丈八尺、周圍三抱の分までにござつた。(公子に) 鶴の卵ほどの紅寶玉、孔雀の渦卷の綠寶玉、青瑪瑙の盆、紫の瑠璃の臺。此の分は、天なる(仰いで禮拜す) 月宮殿に眞のものにござりました。

公子 私も然うらしく思つて聞いた。僧都、それから後に言はれた、其の莖、露草などは、金銀寶玉の類は云ふまでもない、魚類ほどにも、人間が珍重しないものと聞く。が、同じく、あの方へ遣はしたもののか。

僧都 綾、錦、牡丹、芍藥、繧れも散りもいたしませぬを、老人の申條、はや、又海松のやうに亂れました。え、く、其の莖、露草は、若様、此の度の御旅行につき、白雪の龍馬にめされ、

渚を掛けて浦づたひ、朝夕の、茜、紫、雲の上を山の峰へお潜びにてお出ましの節、珍しくお手に入りましたを、御姉君、乙姫様へ御進物の分でござりました。

侍女一 姫様は、閻浮檀金の一輪挿に、眞珠の露でお活け遊ばし、お手許をお離しなさいませぬさうにございます。

公子 (頷く) そんなら可——僧都。

僧都 御意。娘の親へ遣はしましたは、眞鯛より數へまして、珊瑚一對……までに止まりました。

侍女二 海では何ほどの事でもございせんが、受取ります陸の人には、鯛も比目魚も千と萬、少ない數ではございますまいに、僅な日の間に、ようお手廻し、お遣はしに成りましてございます。

僧都 然れば其の事。一國、一島、津や浦の果から果を一網にもせい、人間夥間が、大海原から取られます獲ものと云ふは、貝に溜つた雫ほどに聊少なものでござつての、お腰元衆など思つても見られまい、鉤の尖に蟲を附けて雑魚一筋を釣ると云ふ仙人業をしますよ。此の度の娘の父は、然までもなけれども、小船一つで網を打つが、海月ほどにしよぼりと擴げて、泡にも足らぬ小魚を掬ふ。入ものが小さき故に、其が希望を満しますに、手間の入ること、何とも

まだるい。鯛を育てて鯨にするより齒痒い段の行止り。(公子に向ふ) 若様は御性急ぢや。早く彼が願を満たいて、誓の美女を取れ、と御意ある。よつて、黒潮、赤潮の御手兵を些とばかり動かしましたわ。赤潮の劍は、炎の稻妻、黒潮の黒い旗は、黒雲の峰を築いて、沖から撞と浴びせたほどに、一浦の津波と成つて、田畑も家も山へ流いた。片隅の美女の家へ、門背戸かけて、壘天井、一齊に、屋根の上の丘の腹まで運込みました儀でござつたよ。

侍女三 まあ、お勇ましいい。

公子 (少し俯向く) 勇ましいではない。家畑を押流して、浦のもの等は迷惑をしはしないか。

僧都 否、否、黒潮と赤潮が、密と爪弾きましたばかり。人命を斷つほどではござりませなんだ。尤も迷惑を爲ば、いたせ、娘の親が人間同士の間でさへ、自分ばかりは、思ひ懸けない海の幸を、黄金の山ほど掴みましたに因つて、他の人々の難澁如きは聊か氣にも留めませぬに、海のお世子であらせられます若様。人間界の迷惑など、お心に掛けさせますには毛頭當りませぬ儀でございます。

公子 (頷く) そんなら可——僧都。

僧都 は、。(更めて手を支く。)

公子 彼の親は、此方から遣はした、娘の身の代とか云ふものに満足をしたであらうか。

僧都 御意、満足いたしましたればこそ、當御殿、お求めに従ひ、美女を沈めました儀にござり

ます。尤も、眞鯛、鯉、眞那鯉、其の金銀の魚類のみでは、満足をさせませんが、續いて、三抱へ一對の枝珊瑚を、夜の渚に差置きますると、山の端出づる月の光に、眞紫に輝きまするを夢のやうに抱きました時、彼の父親は白砂に領伏し、波の裾を吸ひました。あはれ龍神、一命も捧げ奉ると、御恩のほどを難有がりましたのでござります。

公子 (微笑す) 親仁の命などは御免だな。そんな魂を引取ると、海月が殖えて、迷惑をするよ。

侍女五 あんな事をおつしやいます。

公子 けれども僧都、そんな事で満足した、人間の慾は浅いものだね。

僧都 まだ、彼は深い方でござります。一人娘の身に代へて、海の寶を望みましたは、慾念の逞い故でござりまして。……たかくは人間同士、夥間うちで、白い柔な膩身を、炎の燃立つ絹に包んで蒸しながら賣り渡すのが、峠の關所かと心得ます。

公子 馬鹿だな。(珊瑚の椅子をすつと立つ) 戀しい女よ。望めば生命でも遣らうものを。……は、は、は。

微笑す。

侍女四 お思はれ遊ばした娘御は、天地かけて、波かけて、お仕合せでおいで遊ばします。

侍女一 早くお着き遊ばせば可うございます。私どももお待遠に存じ上げます。

公子 道中の様子を見よう、旅の様子を見よう。(園の外に向つて呼ぶ) おい、居間の鏡を寄越せ。(園開く。侍女六、七、二人、赤地の錦の蔽を掛けたる大なる姿見を捧げ出づ。)

僧都も御覽。

僧都 失禮ながら。(膝行して進む。侍女等、姿見を卓子の上に据ゑ、錦の蔽を展く。侍女等、卓子の端の一方に集る。)

公子 (姿見の面を指し、僧都を見返る) 彼だ、彼だ。あの一點の光が其だ。お前たちも見ないか。

舞臺轉ず。少時暗黒、寂寞として波濤の音聞ゆ。やがて一個、花白く葉の青き蓮華燈籠、漂々として波に漾へるが如く顯る。續いて花の赤き同じ燈籠、中空の如き高處に出づ。又出づ、や、低し。尙ほ見ゆ、少しく高し。其の數五個に成る時、累々たる波の舞臺を露す。美女。毛卷島田に結ふ。白の振袖、綾の帶、紅の長襦袢、胸に水晶の數珠をかけ、襟に兩袖を占めて、波の上に、雪の如き龍馬に乗せらる。凡そ手綱の丈を隔てて、一人下髪の女房、旅扮裝、素足、小桂に棲端折りて、片手に市女笠を携へ、片手に蓮華燈籠を提ぐ。第一點の燈の影は

此なり。黒潮騎士、美女の白龍馬を犇々と圍んで兩側二列を造る。凡十人。皆崑崙奴の形相。手に手に、すく／＼と槍を立つ。穂先白く晃々として、氷柱倒に黒髪を縫ふ。或ものは燈籠を槍に結ぶ、灯の-highきは此なり。或ものは手にし、或ものは腰にす。

女房 貴女、お草臥でございませう。一息、お休息なさいませうか。

美女 (夢見るやうに其の瞳を睜く) あゝ、(歎息す) もし、誰方ですか。……私の身體は足を空に、(馬の背に裳を搔緊む) 倒に落ちて落ちて、波に沈んで居るのでせうか。

女房 否、お美しいお髪一筋、風にも波にもお纏はなさいませぬ。何でお身體が倒などと、そんな事がございませう。

美女 何時か、何時ですか、昨夜か、今夜か、前の世ですか。私が一人、楫も櫓もない、舟に、筵に乗せられて、波に流されました時、父親の約束で、海の中へ捕られて行く、私へ供養のためたと云つて、船の左右へ、前後に、波のまに／＼散つて浮く……蓮華燈籠が流れました。

女房 水に目のお馴れなさいませぬ、貴女には道しるべ、また土産にもと存じまして、此が、(手に翳す) 其の燈籠でございませぬ。

美女 まあ、灯も消えずに……

女房 燃えた火の消えますのは、油の盡きる、風の吹く、陸ばかりの事でございませぬ。一度此の國へ受取りますと、こゝには風が吹きません。たゞ花の香の、ほんのりと通ふばかりでございませぬ。紙の細工も珠に替つて、葉の青いのは、翡翠の琅玕、花片の紅白は、眞玉、白珠、紅寶玉。燃ゆる灯も、また、きながら消えない星でございませぬ。御覽遊ばせ、貴女。お召ものが濡れましたか。お髪も亂れはしますまい。何で、お身體が倒でございませう。

美女 最後に一目、故郷の浦の近い峰に、月を見たと思ひました。其切、底へ引くやうに船が沈んで、私は波に落ちたのです。唯幻に、其の燈籠の様な蒼い影を見て、胸を離れて遠くへ行くと、自分の身の魂か、導く鬼火かと思ひましたが、ふと見ますと、前途にも、あれ／＼、遙の下と思ふ處に、月が一輪、おなじ光で見えますもの。

女房 あゝ、(望む) あの光は。否。月影ではございませぬ。

美女 でも、貴方、雲が見えます、雪のやうな、空が見えます、瑠璃色の。そして、眞白な絹絲のやうな光が射します。

女房 其の雲は波、空は水。一輪の月と見えますのは、此から貴女がお出遊ばす、海の御殿でございませぬ。あれへ、お迎へ申すのです。

美女 そして、參つて、私の身體は、何う成るのでございませうねえ。

女房 ほ、(笑ふ) 何事も申しませう。唯お嬉しい事なのです。おめでたう存じます。

美女 あの、捨小舟に流されて、海の鬢に取られて行く、あの、(昀す)これが、嬉しい事なのでせうか。めでたい事なのでせうかねえ。

女房 (再び笑ふ) お國では如何でございませうか。私たちが故郷では、最う此の上ない嬉しい、めでたい事なのでございませうもの。

美女 彼處まで、道程は？

女房 お國でたとへは煩かしい。……お、五十三次と承ります、東海道を十度づ、三百度、往還りを繰返して、三千度いたしますほどでございませう。

美女 え、そんなに。

女房 めした龍馬は風よりも早し、お道筋は黄金の欄干、白銀の波のお廊下、たゞ花の香りの中を、やがてお着きなさいませう。

美女 潮風、磯の香、海松、海藻の、咽喉を刺す硫黄の臭気と思ひのほか、眞個に、清しい、い薫、(柔に袖を動かす)……ですが、時々、悚然する、腥い香のしますのは？……

女房 人間の魂が、貴女を慕ふのでございませう。海月が寄るのでございませう。

美女 人の魂が、海月と云つて？

女房 海に参ります醜い人間の魂は、皆海月に成つて、ふはくさまようて歩行きますのでございませう。

黒潮騎士 (口々に) 煩い。叱々。——(と、ものなき龍馬の周囲を呵す。)

美女 まあ、情ない、お恥しい。(袖を以て面を蔽ふ。)

女房 否、貴女は、あの御殿の若様の、新夫人でいらつしやいます、もはや人間ではありません。美女 え、(袖を落す。——舞臺轉ず。眞暗に成る。)

女房 (聲のみして) 急ぎませう。美しい方を見ると、黒鰐、赤鮫が襲ひます。騎馬が前後を守護しました。お憂慮はありませんが、いざ参ると、斬合ひ攻合ふ、修羅の巻をお目に懸けねば成りませぬ。——騎馬の方々、急いで下さい。

燈籠一つ行き、續いて一つ行く。漂蕩する趣して、高く低く奥の方深く行く。舞臺燦然として明るし、前の琅玕殿顯る。

公子、椅子の位置を卓子に正しく直して掛けて、姿見の傍にあり。向つて右の上座。左の方に赤き枝珊瑚の椅子、人なくしてたゞ据ゑらる。其の椅子を斜に下りて、沖の僧都、此の度は腰掛けてあり。黒き珊瑚、小形なる椅子を用ゐる。おなじ小形の椅子に、向つて正面に一人、略唐代の儒の服装したる、髻黒き一人あり。博士なり。

侍女七人、花の如く其の間を装ひ立つ。

公子 博士、お呼立をしました。

博士 (敬禮す。)

公子 此を御覽なさい。(妾見の面を示す。)

千仞の唾を累ねた、漆のやうな波の間を、幽に蒼い灯に照らされて、白馬の背に手綱したは、此の度迎へ取るおもひものなんです。陸に獅子、虎の狙ふと同一に、入道鰐、坊主鮫の一群が、美女と見れば、途中に襲撃つて、黒髪を吸ひ、白き乳を裂き、美しい血を吞まうとするから、守備のために、旅行さきで、手にあり合せただけ、少數の黒潮騎士を附添はせた。渠等は白刃を揃へて居る。

博士 至極のお計ひに心得まするが。

公子 處が、敵に備ふる此處の守備を出拂はしたから不用心ぢや、危険であらう、と僧都が言はれる。……其は恐れん、私が居れば仔細ない。けれども、又、僧都の言はれるには、白衣に緋の襲した女子を馬に乗せて、黒髪を槍尖で縫つたのは、彼の國で引廻しとか稱へた罪人の姿に似て居る、私の手許に迎入るゝものを、不祥ぢや、忌はしいと言ふのです。

事實不祥なれば、途中の保護は他に幾干も手段があります。其は構はないが、私は聊かも不祥

と思はん、忌はしいと思はない。

此を見ないか。私の領分に入つた女の顔は、白い玉が月の光に包まれたと同一に、愈々清い。眉は美しく、瞳は澄み、唇の紅は冴えて、聊かも變れない。憂へて居らん。清らかな衣を着、新に梳つて、花に露の點滴る装して、馬に騎した姿は、かの國の花野の丈を、錦の山の懷に抽く……歩行より、車より、駕籠に乗つたより、一層鮮麗なものだと思ふ。其上、選抜した慥悍な黒潮騎士の精銳等に、長槍を以て四邊を拂はせて通るのです。得意思ふべしではないのですか。

僧都 (頬に頭を傾く。)

公子 引廻しと聞けば、恥を見せるのでせう、苦痛を與へるのであらう。槍で圍み、旗を立て、淡く清く装つた得意の人を馬に乗せて市を練つて、やがて刑場に送つて殺した處で、殺されるものは平凡に疾病で死するより愉快でせう。——其が何の刑罰に成るのですか。陸と海と、國が違ひ、人情が違つても、まさか、そんな刑罰はあるまいと想ふ。僧都は、うる覚えながら確に記憶に残ると言はれる。……貴下をお呼立した次第です。一寸お驗べを願ひませうか。

博士 仰聞けの記憶は私にもありますで。しかし、念のために驗べまするで。え、陸上一切の刑法の記録でありませうか、それとも。

公子 面倒です、あとは何うでも可い。たゞ女子を馬に乗せ、槍を立てて引廻したと云ふ、そんな事があつたかと云ふ、それだけです。

博士 正史でなく、小説、浄瑠璃の中を見ませうで。時の人情と風俗とは、史書よりも寧ろ此の方が適當でありますので。(金光燦爛たる洋綴の書を展く。)

公子 (卓子に腰を掛く) 大相氣の利いた書物ですね。

博士 此は、佛國の大帝奈翁が、西暦千八百八年、西班牙遠征の途に上りました時、豫て世界有数の讀書家。必要によつて當時の圖書館長バルビールに命じて製らせました、函入新装の、一千卷、一架の内容は、宗教四十卷、敘事詩四十卷、戯曲四十卷、其の他の詩篇六十卷、歴史六十卷、小説百卷、と申しまするデュオデシモ形と申す有名な版本の事を……お聞及びなさいまして、御姉君、乙姫様が御工夫を遊ばしました。蓮の絲、一筋を、凡そ枚數千頁に薄く織擴げて、一萬枚が一折、一百二十折を合せて一冊に綴ぢましたものであります、此の國の微妙なる光に展きますると、森羅萬象、人類をはじめ、動植物、礦物、一切の元素が、一々づゝ微細なる活字と成つて、然も、各々五色の輝を放ち、名詞、代名詞、動詞、助動詞、主客、句讀、いづれも個々別々、七彩に照つて、恣く開きました眞白な枚の上へ、自然と、染め出さるゝのであります。

公子 姉上が、其を。—— 嗚、御祕藏のものでせう。

博士 御祕藏ながら、若様の御書物藏へも、整然と姫様がお備へつけでありますので。

公子 では、私の所有ですか。

博士 若様は此の冊子と同じものを、瑪瑙に青貝の蔭繪の書棚、五百架、御所有で居らせられまする次第であります。

公子 姉があつて幸福です。どれ、(取つて披く) 此は……唯白紙だね。

博士 は、恐れながら、それ〴〵の豫備の知識がありませんでは、自然の其の色彩ある活字は、ペエジの上には寫り兼ねるのでございます。

公子 恥入るね。

博士 いや、若様は御勇武で居らせられます。入道鰐、黒鮫の襲ひまする節は、御訓練の黒

潮、赤潮騎士、御手の劍でなうては御退けに成りまする次第には參らぬのであります。雖然、

姉姫様の御心づくし、節々は御閲讀の儀をお勧め申まするので。

僧都 もろともに、お勧め申上げますでござります。

公子 (頷く) まあ、今の引廻しの事を見て下さい。

博士 確に。(書を披く) 手近に浄瑠璃にありました。あ、此にあります。……若様、此は大日

本浪華の町人、大經師以春の年若き女房、名だたる美女のおさん。手代茂右衛門と不義顯れ、即ち引廻し磔に成りまする處を、記したのでありまして。

公子 お読み。

博士 (朗讀す) —— 紅蓮の井戸堀、焦熱の、地獄のかま塗よしなやと、急がぬ道をいつのまに、越ゆる我身の死出の山、死出の田長の田がりよし、野邊より先を見渡せば、過ぎし冬至の冬枯の、木の間木の間にちらりと、ぬき身の槍の恐しや、——

公子 (姿見を覗きつ、且つ聴きつ、) あ、幾干か似て居る。

博士 —— また冷返る夕嵐、雪の松原、此の世から、恠る苦患にわう亡日、島田亂れてはらくはら、顔にはいつもはんげしやう、縛られし手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞ指の爪とりよし、袖に氷を結びけり。……

侍女等、傾聴す。

公子 唯、い、姿です、美しい形です。世間は其で其の女の罪を責めたと思ふのだらうか。

博士 先、ト見えまするので。

僧都 然やうでございます。

公子 馬に騎つた女は、殺されても戀が叶ひ、思ひが届いて、嗚本望であらうがね。

僧都 —— 袖に氷を結びけり。涙などと、歎き悲しんだやうにござります。

公子 其は、其の引廻しを見る、見物の心ではないのか。私には分らん。(頭を掉る。)

博士 —— まだ他に例があるのですか。

博士 (朗讀す) …… 世の哀とぞなりにける。今日は神田のくづれ橋に恥をさらし、又は四谷、芝、淺草、日本橋に人ごぞりて、見るに惜まぬはなし。是を思ふに、かりにも人は悪き事をせまじきものなり。天是を許し給はぬなり。……

公子 (眉を顰む。—— 侍女等齊しく不審の面色す。)

博士 …… 此女思込みし事なれば、身の襄る、事なくて、毎日ありし昔の如く、黒髪を結はせて美はしき風情。……

公子 (色解く。侍女等、眉をひらく。)

博士 中略をいたします。…… 聞く人一しほいたはしく、其姿を見おくりけるに、限ある命のうち、入相の鐘つく比、品かはりたる道芝の邊にして、其身は憂き煙となりぬ。人皆いづれの道にも煙はのがれず、殊に不便は是にぞありける。—— 此で、鈴ヶ森で火刑に處せられまするまでを、確か江戸中棄札に槍を立てて引廻した筈と心得まするので。

公子 分りました。其はお七と云ふ娘でせう。私は大すきな女なんです。御覽なさい。何處に當

人が歎き悲みなぞしたのですか。人に惜まれ可哀がられて、女それ自身は大満足で、自若として火に焼かれた。得意想ふべしではないのですか。何故其が刑罰なんだね。もし刑罰とすれば、恵の杖、情の鞭だ。實際其の罪を罰しようとするには、其のまゝ無事に置いて、平凡に愚圖愚圖に生存らへさせて、皺だらけの婆にして、其の娘を終らせるが可いと、私は思ふ。……分けて、現在、殊に其のお七の如きは、姉上が海へお引取りに成つた。刑場の鈴ヶ森は自然海に近かつた。姉上は御覽に成つた。鐵の鎖は手足を繋いだ、燃草は夕霜を置殘して其の肩を包んだ。煙は雪の振袖をふすべた。炎は緋鹿子を燃え抜いた。緋の牡丹が崩れるより、虹が燃えるより美しかつた。戀の火の白熱は、凝つて白玉と成る、其の膚を、氷つた雛芥子の花に包んだ。姉の手の甘露が沖を曇らして注いだのだつた。其のまゝ、海の底へお引取りに成つて、現に、姉上の宮殿に、今も十七で、紅の珊瑚の中に、結綿の花を咲かせて居るのではないか。男は死ななかつた。存命へて坊主に成つて老い朽ちた。娘のために、姉上は其さへお引取りに成つた。けれども、其の魂は、途中で牡の海月に成つた。——時々未練に娘を覗いて、赤潮に追拂はれて、醜く、ふらくと生白く漾うて失する。あはれなものだ。娘は幸福ではないのですか。火も水も、火は虹と成り、水は瀧と成つて、彼の生命を飾つたのです。拔身の槍の刑罰が馬の左右に、其の響を輝かすと同一に。——博士如何ですか、僧都。

博士 しかし、しかし若様、私は慎重にお答へをいたします。身は此の職にありながら、事實、人間界の心も情も、まだ聊かも分らぬのでありまして。若様、唯今の仰せは、其は、すべて海の中のみ留まりまするが。

公子 (穩和に頷く) 姉上も、以前お分りに成らぬと言はれた。其の上、貴下がお分りにならないければ此は誰にも分らないのです。私にも分らない。しかし事情も違ふ。彼を迎へる、道中の此の(又姿見を指す)馬上の姿は、別に不祥ではあるまいと思ふ。

僧都 唯今、仰せ聞けられ承りまする内に、條理は辨へず、僧都にも分らぬことのみではござりませんが、唯、黒潮の拔身で圍みました段は、別に忌はしい事ではござりませんやうに、老人にも、其の合點参りましたござります。

公子 可、しかし僧都、こゝに蓮華燈籠の意味も分つた。が、一つ見馴れないものが見えるぞ。女が、黒髪と、あの雪の襟との間に——胸に珠を掛けた、彼は何かね。

僧都 はあ。(卓子に伸上る)は、いかさま、いや、若様。あれは水晶の數珠にござります。海に沈みまする覺悟につき、冥土に參る心得のため、檀那寺の和尚が授けましたのでござります。

公子 冥土とは?……其こそ不埒だ。そして仇光りがする、あれは……水晶か。

博士 水晶とは申す條、近頃は専ら硝子を用るますので。

公子 (一笑す) 私の戀人ともあらうものが、無ければ可い。が、硝子とは何事ですか。金剛石、また眞珠の揃うたのが可い。……博士、贈つて然るべき頸飾をお検べ下さい。

博士 畏りました。

公子 そして指環の珠の色も怪しい、お前たち何う見たか。

侍女一 近頃は、かんでらの灯の露店に、紅寶玉、綠寶玉と申して、貝を齧くと承ります。

公子 お前たちの化粧の泡が、波に流れて渚に散つた、あの貝が寶石か。

侍女二 錦襪の服を着けて、青い頭巾を被りました、立派な玉商人の賣りますものも、擬が多いさうにございます。

公子 博士、次手に指環を贈らう。僧都、すぐに出向うて、遠路であるが、途中、早速、硝子と其の擬ひ珠を取棄てさして下さい。お老寄に、御苦勞ながら。

僧都 (苦笑す) 若様には、新夫人の、まだ、海にお馴れなさらず、御到着の遅いばかり氣になされて、老人が、こゝに形を消せば、瞬く間もなう、お姿見の中の御馬の前に映ります神通を、お忘れなされて、老寄に苦勞などと、心外な御意を蒙りまするわ。

公子 は、は、(無邪氣に笑ふ) 失禮をしました。(博士、僧都、一揖して廻廊より退場す。侍女等慇懃に見送る。)

少し窮屈であつたけな。

侍女等親しげに皆其の前後に齊眉き寄る、性急な私だ。——女を待つ間の心遣にしたい。誰か、あの國の歌を知つて居らんか。

侍女三 存じて居ります。浪花津に咲くや此花冬籠、今を春へと咲くや此花。

侍女四 若様、私も存じて居ります。淺香山を。

公子 いや、そんなのではない。(博士がおきたる書を披きつ、) 女の國の東海道、道中の唄だ。何とか云ふのだつた。此の書はいくらか覺えがなないと、文字が見えないのださうだ。(呟く) 姉上は貴重な、しかし、少しあてつこすりの書をお拵へに成つたよ。あ、何とか云つた、東海道。

侍女五 五十三次でございます、私が少し存じて居ります。

公子 歌うて見ないか。

侍女五 はい。(朗かに優しくあはれに唄ふ。)

都路は五十路あまりの三つの宿、……

公子 お、其だ、字書のやうに、江戸紫で、都路と標目が出た。(展く) あとを、

侍女五 ……時得て咲くや江戸の花、浪靜なる品川や、やがて越來る川崎の、軒端ならぶる神奈

侍女一 あゝ、黒鮫が三百ばかり。

公子 入道鮫が、何、(窓に衝と寄る。)

侍女等、口々に、あれ、あれ、鮫が、鮫が、入道鮫が、と立亂れ騒ぎ狂ふ。

侍女五 きやつ。(叫ぶ。隙なし。其の姿、窓の外へ裳を引いて颯と消ゆ) あゝ、れえ。

侍女一 漸と一人天龍川まで参りました。

公子 あゝ、またるつこい。賽を二つ一所に振らうか。(手にしながら姿見に見入る。侍女等、等々其方を凝視す。)

(侍女七人、いそぐと、續いて廻廊のはづれに集り、貴女は一。私は二。恚う口々に楽しんで取定め、勇みて賽を待つ。)

可いか、(片手に書を持ち、片手に賽を投ぐ) —— 一は三、かな川へ。(侍女一人進む) 二は一、品川まで。(侍女一人また進む) 三は五だ、戸塚へ行け。

(恚くして順々に繰返し次第に進む。第五の侍女、年最も少きが一人衆を離れて賽の目に乗り、正面突當りなる窓際に進み、他と、間隔る。公子。これより前、姿見を見詰めて、賽の目と宿の敷を算へ淀む。……此の時、うかとしたる體に書を落す。)

まだ、誰も上らないか。

侍女一 漸と一人天龍川まで参りました。

公子 あゝ、またるつこい。賽を二つ一所に振らうか。(手にしながら姿見に見入る。侍女等、等々其方を凝視す。)

侍女五 きやつ。(叫ぶ。隙なし。其の姿、窓の外へ裳を引いて颯と消ゆ) あゝ、れえ。

侍女一 漸と一人天龍川まで参りました。

公子 あゝ、またるつこい。賽を二つ一所に振らうか。(手にしながら姿見に見入る。侍女等、等々其方を凝視す。)

川は、早や程ヶ谷に程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ。紫匂ふ藤澤の、野面に續く平塚も、もとのあはれは大磯か。蛙鳴くなる小田原は。……(極悪げに) ……もうあとは忘れました。

公子 可、こゝに縁の活字が、白い雲の枚に出た。——箱根を越えて伊豆の海、三島の里の神垣や——さあ、忘れた所は教へて遣らう。此の歌で、五十三次の宿を覚えて、お前たち、あの道中雙六と云ふものを遊んで見ないか。上りは京都だ。姉の御殿に近い。誰か一人上つて、雙六の濟む時分、丁度、此の女は(姿見を見つ)着くであらう。一番上りのものには、瑪瑙の莢に、紅寶玉の實を装つた、あの造りものの吉祥果を遣る。繪は直ぐに間に合ぬ。此の室を五十三に割つて雙六の目に合せて、一人づゝ身體を進めるが可からう。……賽が要る、持つて來い。

(侍女六七、うつむいてともに微笑す) —— 何うした。

侍女六 姿見をお取寄せ遊ばしました時。

侍女七 二人して盤の雙六をして居りましたので、賽は持つて居りますのでございます。

公子 おもしろい。向うの廻廊の端へ集まれ。そして順に成つて始めるが可い。

侍女七 床へ振りませうでございますか。

公子 心あつて招かないのに來た、賽にも魂がある、寄越せ。(受取る)卓子の上へ私が投げよう。お前たち一から七まで、目に從うて順に動くが可い。さあ、集れ。

侍女二 取巻いて、群りかゝつて。

侍女三 あれ、入道が口に銜へた。

公子 外道、外道、其の女を返せ、外道。(叱咤しつゝ、窓より出でんとす。)

侍女等 緋り留む。

侍女四 軽々しい、若様。

公子 放せ。あれ見い。外道の口の間から、女の髪が溢れて落ちる。やあ、胸へ、乳へ、牙が喰入る。え、油断した。……骨も筋も断れような。あゝ、手を悶える、裳を煽る。

侍女六 否、若様、私たち御殿の女は、身は綿よりも柔かです。

侍女七 蓮の糸を束ねましたやうですから、鰐の牙が、脊筋と鳩尾へ噛合ひましても、薄紙一重

透きます内は、血にも肉にも障りません。

侍女三 入道も、一類も、色を漁るのでございます。生命は頃刻助りませう。

侍女四 其の中に、其の中に。まあ、お静まり遊ばして。

公子 いや、俺の力は弱いもののためだ。生命に掛けて取返す。——鎧を寄越せ。

侍女二人 衝と出で、引返して、二人して、一領の鎧を捧げ、背後より颯と肩に投掛く。

公子、上へ引いて、頸よりつらなりたる兜を頂く。角ある毒龍、凄じき頭と成る。其の頭を

頂く時に、侍女等、鎧の裾を捌く。外套の如く背より垂れて、紫の鱗、金色の斑點連り輝く。公子、又袖を取つて肩よりして自ら喉に結ぶ、此の結びめ、左右一雙の毒龍の爪なり。迅速に一縮す。立直るや否や、劍を抜いて、頭上に翳し、ハタと窓外を睨む。

侍女六人、齊しく其の左右に折敷き、手に手に匕首を抜連れて、晃々と敵に構ふ。

外道、退くな。(凝と視て、劍の刃を下に引く) 虜を離した。受取れ。

侍女一 鎧をめしたばつかりで、御威徳を恐れて引きました。

侍女二 長う太く、數百の鮫のかさなつて、蜈蚣のやうに見えたのが、あゝ、ちり／＼に、ちり

ちりに。

侍女三 めだかのやうに遁げて行きます。

公子 おゝ、丁度黒潮等が歸つて來た、歸つた。

侍女四 眞個に、おつかひ歸りの姉さんが、とりこを抱取つて下すつた。

公子 介抱してやれ。お前たちは出迎へ。

侍女三人 づゝ、一方は闔のうちへ。一方は廻廊に退場。

公子、眞中に、すつくと立ち、靜かに劍を納めて、右手なる白珊瑚の椅子に凭る。騎士五人

廻廊まで登場。

騎士一同（槍を伏せて、踞り、同音に呼ぶ）若様。

公子 お、歸つたか。

騎士一 以ての外な、今ほどは。

公子 何でもない、私は無事だ、皆御苦勞だつたな。

騎士一同 はッ。

公子 途中まで出向つたらう、僧都は何うしたか。

騎士一 あとの我ら夥間を率ゐて、入道鮫を追掛けて参りました。

公子 よい相手だ、戦闘は觀ものであらう。——皆は休むが可い。

騎士 槍は鞘に納めますまい、此のま、御門を堅めまするわ。

公子 然までにせずとも大事ない、休め。

騎士等、禮拜して退場。侍女一、登場。

侍女一 御安心遊ばし、疵を受けましたほどでもございません。唯、酷く驚きまして。

公子 可愛相に、よく介抱して遣れ。

侍女一 二人が附添つて居ります、（廻廊を見込む）あ、最う御廊下まで。（公子のさしづにより、姿見に錦の蔽を掛け、闖に入る。）

美女 先達の女房に、片手、手を曳かれて登場。姿を肅に、深く差俯向き、面影や、やつれたれども、然まで悪怖れざる態度、徐に廻廊を進みて、床を上段に昇る。昇る時も、裾捌き静なり。

侍女三人、燈籠二個づ、二人、一つを一人、五个を提げて附添ひ出で、一人々々、廻廊の廂に架け、其のま、引返す。燈籠を侍女等の差置き果つるまでに、女房は、美女を其の上段、紅き枝珊瑚の椅子まで導く順にてありたし。女房、謹んで公子に禮して、美女に椅子を教ふ。

女房 お掛け遊ばし。

美女、据置かる、狀に椅子に掛く。女房は其の裳に跪居る。

美女、うつむきたるま、少時、皆無言。やがて顔を上げて、正しく公子と見向ふ。瞳を据ゑて瞬きせず。——間。

公子 よく見えた。（無造作に、座を立つて、卓子の周圍に近づき、手を取らんと衝と腕を伸ばす。

美女、崩るゝが如くに椅子をはづれ、床に伏す。）

女房 何うなさいました、貴女、何うなさいました。

美女（聲細く、然れども判然）はい、……覺悟しては來ましたけれど、餘りと云へば、可恐うございますもの。

女房 (心付く) お、若様。其の鎧をお解き遊ばせ。お驚きなさいますのも御尤でございます。公子 解いても可い、(結び目に手を掛け、思慮す)が、解かんでも可からう。……最初に見た目は何處までも附絡ふ。(美女に)貴女、おい、貴女、此を恐れては不可ん、私は此あるがために、強い。此あるがために力があり威がある。今も既に此に因つて、めしつかふ女の、入道鮫に噛まれたのを助けたのです。

美女 (や、面を上ぐ) お召使が鮫の口に、矢張り、そんな可恐い處なんでございませうか。

公子 は、は、(笑ふ)貴女、敵のない國が、世界の何處にあるんですか。仇は至る處に満ちて居る——唯一人の娘を捧ぐ、……海の幸を賜はれ——貴女の親は、既に貴女の仇なのではないか。唯其敵に勝てば可いのだ。私は、此の強さ、力、威あるがために勝つ。鬨に唯二人ある時でも私は此を脱ぐまいと思ふ。私の心は貴女を愛して、私の鎧は、敵から、仇から、世界から貴女を守護する。弱いものの爲に強いです。毒龍の鱗は絡ひ、爪は抱き、角は枕しても聊も貴女の身は傷けない。ともに此の鎧に包まる、内は、貴女は海の女王なんだ。放縱に大膽に、不羈、専横に、心のまゝにして差支へない。鱗に、爪に、角に、一絲掛けない白身を抱かれ包まれて、渡津海の廣さを散歩しても、敢て世に憚る事はない。誰の目にも觸れない。人は指をせん。時として見るものは、沖の其の影を、眞珠の光と見る。指すものは、喜見城の幻景に迷

ふのです。

女の身として、優しいもの、媚あるもの、従ふものに慕はれて、其が何の本懐です。私は鱗を以て、角を以て、爪を以て愛するんだ。……鎧は脱ぐまい、と思ふ。(従容として椅子に戻る。)

美女 (起直り、會釋す)……父へ、海の幸をお授け下さいました、津波のお強さ、船を覆して、

此處へ、遠い海の中をお連れなすつた、お力。道すがらは又お使者で、金剛石の此の襟飾、寶玉の此の指環、(嬉しげに見ゆ)貴女の御威徳はよく分りましたのでございます。

公子 津波位、家來どもが些細な事を。さあ、其處へお掛け。

女房、介抱して、美女、椅子に直る。

頸飾なんぞ、珠なんぞ。貴女の腰掛けて居る、其は珊瑚だ。

美女 まあ、父に下さいました枝よりは、幾倍とも。

公子 あれは草です。較ぶれば此處のは大樹だ。椅子の丈は陸の山よりも高い。然うして居る貴女の姿は、夕日影の峰に、雪の消残つたやうであらう。少しく離れた私の兜の龍頭は、城の天守の棟に飾つた黄金の鯨ほどに見えようと思ふ。

美女 あの、人の目に、それが、貴方？

公子 譬喩です、人間の目には何にも見えん。

美女 あゝ、見えはいたしますまい。お恥かしい、人間の小さな心には、此處に、見ますれば私
が裳を曳きます床も、琅玕の一枚石。慙うした御殿のある事は、夢にも知らないのをごさ
すもの、情なう存じます。

公子 否、そんなに謙遜をするには當らん。陸には名山、佳水がある。峻嶽、大河がある。

美女 でも、こんな御殿はないのです。

公子 あるのを知らないのです。海底の琅玕の宮殿に、寶藏の珠玉金銀が、虹に透いて見えるの
に、更科の秋の月、錦を染めた木曾の山々は劣りはしない。……峰には、其の錦葉を織る龍田
姫がおいでなんだ。人間は知らんのか、知つても知らないふりをするのだらう。知らない振を
して見ないんだらう。——陸は尊い、景色は得難い。今も、道中雙六をして遊ぶのに、五十三
次の一枚繪さへ手許にはなかつたのだ。繪も貴い。

美女 あんな事をおつしやつて、繪には活きたものは住んで居りませんではありませんか。

公子 いや、住居をして居る。色彩は皆生きて動く。けれども、人は知らないのだ。人は見ない
のだ。見ても見ない振をして居るんだから、決して人間の凡てを貴いとは言はない、美しいとは
言はない。唯陸は貴い。けれども、我が海は、此の水は、一畝りの波を起して、其の陸を浸す
事が出来るんだ。たゞ貴く、美しいものは亡びない。……中にも貴女は美しい。だから、陸の一

浦を亡ぼして、こゝへ迎へ取つたのです。亡ぼす力のあるものが、亡びないものを迎へ入れて、
且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜ばねば不可い、嬉しがらなければならぬ、悲しん
では成りません。

女房 貴女、おつしやる通りでございます。途中でも私が、お喜ばしい、おめでたい儀と申しま
した。決してお歎きなさいます事はありません。

美女 否、歎きはいたしません。悲しみはいたしません。唯歎きますもの、悲しみますものに、
私の、此の容子を見せて遣りたいと思ふのです。

女房 人間の目には見えません。

美女 故郷の人たちには。

公子 見えるものか。

美女 (やゝ意氣ぐむ) あの、私の親には。

公子 貴女は見えると思ふのか。

美女 慙うして、生きて居りますもの。

公子 (屹としたる音調) 無論、生きて居る。しかし、船から沈む時、此處へ來るに何う云ふ決
心を爲たのですか。

美女 それは死ぬ事と思ひました。故郷の人も皆然う思つて、分けて親は歎き悲しみました。

公子 貴女の親は悲しむ事は少しもなからう。はじめから其のつもりで、約束の財を得た。然も満足だと云つた。其の代りに娘を波に沈めるのに、少しも歎くことはないではないか。

美女 けれども、父娘の情愛でございます。

公子 勝手な情愛だね。人間の、そんな情愛は私には分らん。(頭を掉る)が、まあ、情愛として置く、其で。

美女 父は涙にくれました。小船が波に放たれます時、渚の砂に、父の倒伏しました處は、あの、

丁ど夕月に紫の枝珊瑚を抱きました處なのです。そして、後の歎は、前の喜びにくらべまして、

幾十層倍だつたでございませう。

公子 ぢや、其の枝珊瑚を波に返して、約束を戻せば可かつた。

美女 否、ですが、最う、海の幸も、枝珊瑚も、金銀に代り、家藏に代つて居たのでございます。

公子 可、其の金銀を散らし、施し、棄て、藏を毀ち、家を焼いて、もとの破蓑一領、網一具の

漁民と成つて、娘の命乞をすれば可かつた。

美女 それでも、約束の女を寄越せと、海坊主のやうな黒い人が、夜ごとく天井を覗き、屏風

を見越し、壁襖に立つて、責めはたり、催促をなさいます。今更、家藏に替へましたッて、と

然う思つたのでございます。

公子 貴女の父は、もとの貧民になり下るから娘を許して下さい、と、其の海坊主に掛合つて見

たのですか。見はしなからう。そして、貴女を船に送出す時、磯に倒れて悲しまうが、新しい

白壁、艶ある菱を、山際の月に照らさして、夥多の奴婢に取巻かせて、近頃呼入れた、若い妾

に介抱されて居たではないのか。何故、其が情愛なんです。

美女 はい。……(恥ぢて首低る。)

公子 貴女を責めるのではない。よし其が人間の情愛なれば情愛で可い、私とは何の係はりもない

から。些とも構はん。が、私の愛する、この宮殿にある貴女が、そんな故郷を思つて、歎いて

は不可ん。悲しんでは不可んと云ふのです。

美女 貴方。(向直る。聲に力を帯ぶ)私は始めから、決して歎いては居ないのです。父は悲しみ

ました。浦人は可哀がりました。ですが私は——約束に應じて寶を與へ、其の約束を責めて女

を取る、——それが夢なれば、船に乗つても沈みはしまい。もし事實として、浪に引入るゝも

のがあれば、其は生あるもの、形あるもの、云ふまでもありません、心あり魂あり、聲あるも

のに違ひない。其上、威があり力があり、榮と光とあるものに違ひないと思ひました。です

から、人は然うして歎いても、私は小船で流されますのを、然まで、慌騒きも、泣悲しみも、

落着過ぎもしなかつたんです。もしか、船が沈まなければ無事なんです。生命はあるんですもの。覆す手があれば、それは生きて居る手なんです。其の手に縋つて、海の中に活きられると思つたのです。

公子 (聞きつゝ、莞爾とす) やあ、(女房に) ……此の女は豪いぞ！ はじめから歎いて居らん、慰め賺す要はない。私はしをらしい。あはれな花を手活にしてながめようと思つた。違ふ！ 此は楽しく歌ふ鳥だ、面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ。

手を舉ぐ。忽ち闔開けて、三人の侍女、二罎の酒と、白金の皿に一對の玉盞を捧げて出づ。女房 盞を取つて、公子と美女の前に置く。侍女退場す。女房酒を兩方に注ぐ。

女房 めし上りまし。

美女 (辭宜す) 私は、些とも。

公子 (品よく盞を含みながら) 貴女、少しも辛うない。

女房 貴女の薄紅なは桃の露、あちらは菊花の雫です。お國では御存じありませんか。海には最上の飲料です。お氣が清しくなります、召あがれ。

美女 あの、桃の露、(見物席の方へ、半ば片袖を蔽うて、うつむき飲む) は。(と小き呼吸す) 何と云ふ涼しい、爽やいだ——蘇生つたやうな氣がします。

公子 蘇生つたのではないでせう。更に新しい生命を得たんだ。

美女 嬉しい、嬉しい、嬉しい、貴方。私が慫うして生きて居ますのを、見せて遣りたく存じます。

公子 別に見せる要はありますまい。

美女 でも、人は私が死んだと思つて居ります。

公子 勝手に思はせて置いて可いではないか。

美女 ですけども、ですけども。

公子 其の情愛、とかで、貴女の親に見せたいのか。

美女 え、父をはじめ、浦のもの、それから皆に知らせなければ残念です。

公子 (卓子に胸を凭出す) 歸りたいか、故郷へ。

美女 否、此の宮殿、此の寶玉、此の指環、此の酒、此の榮華、私は故郷へなぞ歸りたくはないのです。

公子 では、何が知らせたいのです。

美女 だつて、貴方、人に知られないで生きて居るのは、生きて居るのぢやないんですもの。

公子 (色はじめて鬱す) む。

美女 (微酔の臉花やかに) 誰も知らない命は、生命ではありません。此の寶玉も、此の指環も、

人が見ないでは、些とも價値がないのです。

公子 それは不可ん。(卓子を軽く打つて立つ) 貴女は榮耀が見せびらかしたいんだな。そりや不可ん。人は自己、自分で満足させねばならん。人に價値をつけさせて、其に従ふべきものぢやない。(近寄る) 人は自分で活ければ可い、生命を保てば可い。然も愛するものとともに活ければ、少しも不足はなからうと思ふ。寶玉とても其の通り、手箱に此を藏すれば、寶玉其のものだけの價値を保つ。人に與ふる時、十倍の光を放つ。唯、人に見せびらかす時、其の艶は黒く成り、其の質は醜く成る。

美女 え、ですから……來るお庭にも敷詰めてありました、あの寶玉一つも、此の上お許し下さいますなら、屹と慈善に施して参ります。

公子 こゝに、用意の寶藏がある。皆、貴女のものです。施すは可い。が、人知れずでなければ出来ない、貴女の名を顯し、姿を見せては施すことはならないんです。

美女 それでは何にもなりません。何の效もありません。

公子 (色や、嶮し) 随分、勝手を云ふ。が、貴女の美しさに免じて許す。歌ふ鳥が囀るんだ、雲雀は星を凌ぐ。星は蹴落さない。聲が可愛らしいからなんです。(女房に) おい、注げ。

女房酌す。

美女 (怯れたる内端な態度) もうく、決して、虚飾、榮耀を見せようとは思ひません。あの、唯活きて居る事だけを知らせたう存じます。

公子 (冷かに) 止したが可からう。

美女 否、唯今も申します通り、故郷へ歸つて、其處に留まります氣は露ほどもないので。一寸お許しを受けて生命のあります事だけを。

公子、無言にして頭掉る。美女、縊るが如くす。

あの、お許しは下さいませんか。些との外出もありませんか。

公子 (爽に) 獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くもの悲しむものは無論の事、僅少の憂あり、不平あるものさへ一日も一個たりとも國に置かない。が、貴女には既に心を許して、祕藏の酒を飲ませた。海の果、陸の終、思つて行かれない處はない。故郷如きは唯一飛、瞬きをする間に行かれる。(慙む如く染々と顔を視る) が、氣の毒です。

貴女に、其の驕と、虚飾の心さへなかつたら、一生聞かなくとも濟む、また聞かせたくない事だつた。貴女、これ。

(美女顔を上げ。其の肩に手を掛く) こゝに來た、貴女は最う人間ではない。

美女 え、。(驚く。)

公子 蛇身に成つた、美しい蛇に成つたんだ。

美女、瞳を睜る。

其の貴女の身に輝く、寶玉も、指環も、紅、紫の鱗の光と、人間の目に輝くのみです。

美女 あれ。(椅子を落つ。侍女の膝にて、袖を見、背を見、手を見つゝ、わなゝき震ふ。雪の指、思はず髪を取つて衝と立ちつゝ) 否、否、否、何處も蛇には成りません。一、一枚も鱗はない。

公子 一枚も鱗はない、無論何處も蛇には成らない。貴女は美しい女です。けれども、人間の眼だ。人の見る目だ。故郷に姿を顯す時、貴女の父、貴女の友、貴女の村、浦、貴女の全國の、貴女を見る目は、誰も残らず大蛇と見る。ものを云ふ聲はたゞ、炎の舌が閃く。吐く息は煙を渦巻く。悲歎の涙は、硫黄を流して草を爛らす。長い袖は、腥い風を起して樹を枯らす。悶ゆる膚は鱗を鳴してのたうち蜿る。不圖、肉身のもの目に、其の丈より長い黒髪の、三筋、五筋、筋を透して、大蛇の背に黒く引くのを見る、それがなごりと思ふが可い。

美女 (髪みだるゝまでかぶりを掉る) 嘘です、嘘です。人を呪つて、人を詛つて、貴方こそ、其の毒蛇です。親のために沈んだ身が蛇體に成らう筈がない。遣つて下さい。故郷へ歸して下さい。

さい。親の、人の、友だちの目を借りて、尾のない鱗のない私の身が驗したい。遣つて下さい。故郷へ歸して下さい。

公子 大自在の國だ。勝手に行くが可い、そして試すが可からう。

美女 何處に、故郷の浦は……何處に。

女房 あれ彼處に。(廻廊の燈籠を指す。)

美女 おゝ、(身震す) 船の沈んだ浦が見える。(飄然と飛ぶ。……亂るゝ紅、炎の如く、トンと床を下りるや、颯と廻廊を突切る。途端に、五個の燈籠齊しく消ゆ。廻廊暗し。美女、其の暗中に消ゆ。舞臺の上段のみ、やゝ明る残る。)

公子 おい、其の姿見の蔽を取れ。陸を見よう。

女房 困つた御婦人です。しかしお可哀相なものでございます。(立つ。舞臺暗く成る。——やがて明る成る時、花やかに侍女皆あり。)

公子。椅子に凭る。——其足許に、美女倒れ伏す——疾く既に歸り來れる趣。髪すべて亂れ、袂裂け帶崩る。

公子 (玉盞を含みつゝ、悠然として) 故郷は何うでした。……何うした、私が云つた通だらう。貴女の父の少い妾は、貴女の其の恐しい蛇の姿を見て氣絶した。貴女の父は、下男とともに、

鐵砲を以つて其の蛇を狙つたではありませんか。渠等は第一、私を見てさへ蛇體だと思ふ。人間の目は然う云ふものだ。そんな處に用はあるまい。泣いて居ては不可ん。

美女悲泣す。

不可ん、おい、泣くのは不可ん。(眉を擧む。)

女房 (背を擦る) 若様は、歎悲むのがお嫌です。御性急で在らつしやいますから、御機嫌に障ると悪い。こゝは、樂しむ處、歌ふ處、舞ふ處、喜び、遊ぶ處ですよ。

美女 え、貴女方は樂いでせう、嬉しいでせう、お舞ひなさい、お唄ひなさい、私、私は泣死に死ぬんです。

公子 死ぬまで泣かれて堪るものか。あんな故郷に何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。こゝには悲哀のあることを許さんぞ。

美女 お許しなくば、何うなりと。え、故郷の事も、私の身體も、皆、貴方の魔法です。

公子 何處まで疑ふ。(忿怒の形相) お前を蛇體と思ふのは、人間の目だと云ふに。俺の……魔……法。許さんぞ。女、悲しむものは殺す

美女 え、え、お殺しなさいまし。活きられる身體ではないのです。

公子 (憤然として立つ) 黒潮等は居らんか。此の女を處置しろ。

言下に、床板を跳ね、其穴より黒潮騎士、大錨をかついで顯る。騎士二三、續いて飛出づ。

美女を引立て、一の騎士が倒に押立てたる錨に縛む。錨の刃越に、黒髪の亂るゝを搔擱んで、押仰向かす。長槍の刃、鋭く其の頤に臨む。

女房 あ、若様。

公子 止めるのか。

女房 お床が血に汚れはいたしませんか。

公子 美しい女だ。花を撈るも同じ事よ、花片と蕊と、ばらばらに分れるばかりだ。あとは手箱に藏つて置かう。——殺せ。(騎士、槍を取直す。)

美女 貴方、こんな悪魚の牙は可厭です。御卑怯な。見て居ないで、御自分でお殺しなさいまし。(公子、頷き、無言にてつかつかと寄り、猶豫はず劍を抜き、颯と目に翳し、衝と引いて斜に構

ふ。面を見合す。)

あ、貴方。私を斬る、私を殺す、其の、顔のお綺麗さ、氣高き、美しさ、目の清しさ、眉の勇ましさ。はじめて見ました、位の高き、品の可き。最う、故郷も何も忘れませんでした。早く殺して。あ、嬉しい。(莞爾する。)

公子 解け。

騎士等、美女を助けて、片隅に退く。公子、劍を提げたるまゝ、

此方へおいで。(美女、手を曳かる。ともに床に上る。公子劍を軽く取る。)終生を盟はう。手を出せ。(手首を取つて刃を腕に引く、一線の紅血、玉盞に滴る。公子返す切尖に自から腕を引く、紫の血、玉盞に滴る。)飲め、吞まう。

盞をかはして、仰いで飲む。廻廊の燈籠一齊に點り輝く。

あれ見い、血を取かはして飲んだと思ふと、お前の故郷の、浦の磯に、岩に、紫と紅の花が咲いた。それとも、星か。

一同打見る。

彼は何だ。

美女 見覚ええました花ですが、私はもう忘れしました。

公子 (書を見つゝ) 博士、博士。

博士 (登場) ……お召。

公子 (指す) あの花は何ですか。(書を渡さむとす。)

博士 存じて居ります。龍膽と撫子でございます。新夫人の、お心が通ひまして、折からの霜に、

一際色が冴えました。若様と奥様の血の俤でございます。

公子 人間に其が分るか。

博士 心ないものには知れますまい。詩人、畫家が、しかし認めますでございます。

公子 お前、私の悪意ある呪詛でないのが知れたらう。

美女 (うなだる) お見棄なう、幾久しく。

一同 萬歳を申上げます。

公子 皆、休息をなさい。(一同退場。)

公子、美女と手を携へて一歩す。美しき花降る。二歩す、フト立停まる。三歩を動かす時、

音楽聞ゆ。

美女 一步に花が降り、二歩には微妙の薫、いま三あしめに、ひとりでに、楽しい音楽の聞えま

す。此處は極樂でございますか。

公子 はゝゝ、そんな處と一所にされて堪るものか。おい、女の行く極樂に男は居らんぞ。(鎧の結目を解きかけて、音楽につれて徐ろに、やゝ、なゝめに立ちつゝ、其の龍の爪を美女の背にかく。雪の振袖、紫の鱗の端に仄に見ゆ) 男の行く極樂に女は居ない。

幕

戀女房

— 吉原火事 —

其一 三輪淨閑寺

- 一 鮎、蜆
- 二 缺茶碗
- 三 武藏野
- 四 柳提灯
- 五 折檻
- 六 拍子木

其二 根岸おまじなひ横町

- 一 娘分
- 二 御家風
- 三 人目の關
- 四 夜櫻
- 五 棒杭
- 六 緋無垢
- 七 紫

八 借半纏

其三 仲の町

- 一 燒跡
- 二 筒井筒
- 三 緋手毬
- 四 炎
- 五 見返柳

其四 再出、おまじなひ横町

- 一 密談
- 二 帳場格子
- 三 勢揃ひ
- 四 強請場
- 其五 隅田川
- 一 赤い後

井筒屋お柳。(浦松の戀女房) 浦松重太郎。(根岸の地主)

榎子刀自。(お柳の姑) 榎子。(重太郎の妹)

鷺坂岩造。(會社の社長) 木又氣三郎。(社員)

小森小一。(社員) 千蝶。(藝妓) 雛枝。(お酌)

どつこい屋の治助。(淨閑寺の寺男) 新調。(同寺のお小僧)

簾の源太。(消防頭) 秋刀魚の丈吉。新七。權次。松之助。

金藏。鐵八。(以上、消防夫)

お鶴(浦松の女中) 半次。(職人)

赤魔姥。(妖精) 童男。童女。(魔の眷屬多數)

嘉助。(浦松の番頭) 松野小松。(踊の師匠)

其一 三輪淨閑寺

一 鮒、蜺

治助 もし御覽じまし……旦那方、此に、はい、塔婆が、すくく、墓がばらく、土饅頭まじりに、哀しげに、最惜げに、寂しうござります。此が、はい、どれも遊女方、女郎衆の墓でござります。

岩造 何だ、こりや。……雜司ヶ谷の藪だたみ、濕けた處に、ぐしやくくと、骨をさらけ出したやうな塔婆、蒼黒い胴中がむくんだと云ふ石碑の立つた……行倒れ、のたれ死、獄門首の罪入どもが、共同墓地と云ふ形だな。

千蝶 まあ、可厭だ、氣味の悪い。

雛枝 汚ならしいわねえ。(唾吐く。)

氣三郎 (岩造に向ひ) 殆ど意外に悲惨なものですな。

小一 (手套を一寸弄る) 悲惨と云ふよりも、寧ろ此奴あ醜態ですな。……醜態、醜態、無論、肉を切つて齧いた奴等です。……死骸を焼いた粉は黴菌に成つて飛び、土葬の分は、蒼蠅と蛆に成るでせうな。

氣三 そら其の蛆だ。(雛枝の足許を杖の尖にて突く。)

雛枝 きやッ。(墓の間を縫つて退く。)

治助 (老實に) 此は、はい、毛蟲のできたでござります。……蛆ではござりませぬ。其に、はい、何も此の衆の、(まじく)卵塔の石碑を胸す)白骨ちやと申して、蛆が湧くと極つた事はねえでござります。

小一 だからよ、火葬の分は、バチルスに成ると云ふんぢやないか。

治助 何か、蜂の巣とおつしやりますか。

千蝶 蜂の巣だとさ、ほ、ほ。

岩造 おめでたく出来た爺だ。何て半間な案内者だ。

治助 はい、はい、實に行届きませぬ儀でござります。けれども、はい、名所古跡でもござりませぬ。……墓所と申してこれだけの事、別段に、御案内の方角も存じませぬで。……其のもし、旦那様の背後に、大く一つ築きましたのが、中でも大勢投込みの無縁塔でござります。

岩造が背後に、石の段々、高き無縁塔あり。塔の前、青き花立の許に、瘦せたる山吹あはれに花咲けり。

氣三 (杖にて石塔の面を突いて見つ、) 正銘まがひなし……新吉原の無縁塔だから、新吉原無縁塔——か、浅草だから、浅草で、三輪の淨閑寺だから、淨閑寺、間違ひのない處さね。は、は、。

時に其の杖にて驚かされたる狀に、蝶一つ、ひらりと弱く飛ぶ。此の蝶、色黄なり。

千蝶 まあ、(ヴェールを、ふはくと、嬌態を造つて、其の鬢を掠めながら、墓の上を雛枝の袖に舞移る、蝶を見送る。) 雛ちゃん、それ、蝶々が、蝶々が。

雛枝 あれ、可愛らしい。(桃色の手巾を振る、花簪と宙に搦む。)

小一 え、汚い。お止し、お止し……そんな蝶々。

千蝶 一寸、何故蝶々が汚いのよ?

小一 無縁塔から飛出したんです、此處は女郎の芥溜ですよ。

氣三 娼妓、賣女の總雪隠、肥桶と云ふものさね。

岩造 いや、聞いても堪らん、變に臭いぞ。へッ。(と唾をして、のさく、無縁塔の前を離る。)

千蝶 眞個なこと、可厭な臭氣がするわねえ。(被りたるヴェールを煽る。)

氣三 (鼻に手を當つ) 此は又佳い匂。千蝶さんのヴェールなんざ、風に放すと、其こそ美しい蝶に成ります。やあ、雛ちゃん、きみが捉へてる其の黄色い奴は、女郎の禪の切端だぜ。

小一 確説、的論、然も洗濯をした事のない、どろどろの幽霊の裾なんだ。

雛枝 まあ、可厭だ。(と拂ふ。蝶ははらりと寺男の足に落つ。)

治助 (掌に撮で載す。) 最惜げな、(と熟と視て) え、ひよろらく、飛ぶ中も、強う弱つと、るげに見えました。これ、はい、羽が焦げて居るでござります。

小一 (突立つたなり、金縁の目金で覗く) 何、羽が焦げてる?

治助 はい、可哀げに、これ、御覽なさりまし。

氣三 嘘を吐け! (と此も覗く。千蝶、雛枝も、踞める寺男に寄りつゝ、視る。岩造は一人離れたるなり、髻を反らして石塔に刻める遊女の法名を嘲り顔に讀む。)

小一 何だ、爺い、……汝そりや蝶の羽の斑點ぢやないか。

氣三 (眉を擡め) 芥溜から出たと云ふのに、汚浸は恐れる。……

治助 (眞面目に) 否、旦那方、眞個でござります。可恐い事がござります。……此の間の、吉原焼は、あのもし、年代記はじまりまして以來の、えら酷い悪火でござりまするに因つて、廊中では、首ツ玉の輪が溶けて、飼猫は鉛の熱湯。臟腑を焼いた野犬は、鐵漿溝で、口中から炎

を吹きます。唧筒の水も赤い雨ぢや。何が、貴方方、戸障子襖はキリ、くくと大火の煽に舞上つて、かなりやの籠が火に引からんで飛びましたわ……火の粉の夕立。此の寺などは、ありたけの鼠が出て、本堂を駈廻りますやら、地が蒸温れたと見えまして、穴を出るには未だ早うござりますに、墓所一面、蛇や蜥蜴がのたくりますやら……

千蝶 あら眞個？

治助 眞個にも、何にも、……其の中に、ばらくばらく、可哀や、種々な蝶々が、羽を焦がして、重つて落ちたでござります。此れなどは、はい、(と掌を一ツ撓めて視て)火傷しながら、活残つたでござりませう。やれく、然う云ふうちに動かぬやうに成りました。——もし遊女、お頼申します。(一ツの墓の、傾いたる臺石に撮んで乗せて)南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

氣三 あッあ、いはれを聞けば難有い。

小一 御明あげられませうかね、へ、ん。(と笑ふ。)

千蝶 嘘でせう、一寸。

氣三 馬鹿を云ふんでき。

千蝶 ねえ。

治助 いんね、はい、決して嘘な事はござりませぬ。今度の大火事も一旦は先づ、消えましたや

うにござりますが、むぐらもちの脊筋へも火氣がまはつて、蟲虻の羽が焦げますやうでは、何處の隅の、蜘蛛巢から、又燃上らうも知れませぬ——現に、もし、此の卵塔場に、昨夜、一昨日の夜、續きまして、火柱が立つたでござります。

籬枝 火柱ツて、何よ。

治助 其の、火事の前兆でござります。はい、臍ともつかず、闇ともつかず、空のどす黒い中へ、

……やがて、ものの二丈ばかり、鬼が持ちます鐵棒を焼いて眞赤にした、……先づ、虹をつんど切にしたやうな炎の棹が、其の無縁塔よりすつと上へ、ぼつと立つでござります。此は、はい、甲羅へた古鼈が、二百三百、肩から肩へ重つて、一頭づつ、口に火種を銜へまして、棒立ちに成るげに申します。

黄昏の色、薄く舞臺に掛る。治助は續けて言ふ。

此の二晩は、續けて、此處な卵塔場に立ちましたが、其には限りませぬ。……あの、大火事から以來は、今夜は橋場、翌の晩は三輪ぢやと、紺屋の干場、堂宮の境内、めらく立ちますと申す儀で。界限一帯、まぶたの休まる夜はござりませぬ。唯今にも、赫と山のやうな火を噴出しはせまいかと、早や、此の寺へも、消防手徒が四五人で、用心をしてでござります。

氣三 御苦勞様だよ。

治助 はい、あの衆も、火事以來、片時と樂はさつしやりませぬ。……御苦勞な事にござります。

はい。

小一 馬鹿、遠方御苦勞、と云ふ御苦勞だよ。聾と談話をするやうだ。何だ、……火ばしらだ。

……火柱なんぞを可恐がるのは、工場の煙突で寂滅する、鮎や蜆のやうな奴等さ。

岩造 (此を聞き) 小森、君はうまい事を云ふな、泥鮎や、蜆貝か。わは、は、俺が工場の居まはりに、煙突の煙に喘ぎ、泡沫を吹く人間の鮎や蜆が、うじやくと居るわ。

氣三 眞個ですな。

治助 何か早や、おつしやる事は一向に分りませぬが、鮎でも蜆でも大事ない、……此のやうに火が危うござりましては、當分水の中にも住ひたいものでござりますてや。

此の時、唐突に、

甘い!

と喚く。

雛枝 あれ。

千蝶 まあ、吃驚するわねえ。

墓の背後、雜樹越、藪疊みをほのかに透いて、かついで通る甘酒屋の赤い行燈見ゆ。……甘

い、甘い、甘い屋でございッ——と賣つて通る。

治助 (もつさり立つ) やれも、赤いものは、行燈を見ても總毛が立ちます。

小一 矢張り火柱に見えるのだらう。

治助 はい、あの行燈を、縦に一百もかさねましたやうなのが、暗夜にめらくと立ちますでの。

千蝶 氣味が悪いのねえ。

氣三 嘘ですよ。——何を言つて居やあがる。

雛枝 でも、蛇が出るツてのは眞個でせう。……

治助 眞個の段か、さて、うじやく居るでの。

雛枝 あら、可厭だ……何うしませう。(立すくみて、カタ／＼駒下駄の足踏みする。)

治助 やあ、あんたのやうに地面を叩くと、土の中からのたくり出るがい。

雛枝 きやあ、(と小一に継る。)

小一 爺い、可い加減な事を言へ。

岩造 いや、事實かも分らん……女郎どもの肥料桶だ。腐つた肉が蛇と同居か。死んでからも

蛇責だ、不便なものだ。

治助 まことに、お氣の毒な人たちでござります。回向をしておあげなさりました。……

岩造 何が、回向だい。此奴等。(下駄を揚げて、小さき石塔の缺けたる臺石に供へたる湯呑を蹴返す、……此の遊女が生前に、好いた人より贈られたらしく、念の残つた可哀記念。但し粗末なる瀬戸ものなり。)へッ。(唾を吐き)昔、何とか云つたつけ。高尾とか、尻尾とか云ふ、そんな婦でも居る時分なら、端錢をくれて遣つて、小間使がはりに肩をた、かせうも知れないが、馬の骨や、牛の皮、南瓜、真桑瓜の食残しを拜んだ日にや、癩病村の溝溜へ頭を突込むも同じ事だ。俺たちが回向をすると、ひよろ／＼亡者に罰が當るわ。

治助 無縁墓を拜んで遣らうと、其でお出ではござりませぬのか。はあ、旦那方こそ後生氣はおありなさりませすとも、お前様方は、(と千蝶と雛枝に言ふ)婦同士ぢや。……回向してお進げなさりまし。澤山違ひませぬ。矢張りの、苦界の衆と見えしました。

千蝶 何ですつて? 汚らはしい。
雛枝 まあ、酷い事。
千蝶 失禮ツちやありやしない。

氣三 撲倒されるな、爺い。
小一 新橋赤坂の藝妓を見て、投込みの安女郎と一所にする奴があるものか。
岩造 こら! 爺い、こら! そんな鮎ぢやから煙突の煙に咽せて斃死るのだ。國家の體面を汚

す……暗中の恥を明地へ電燈で曝し居つた、芳原の、あの状を見い。今も此へ来る前に、自動車走らかいて見物をして来たが、焼崩れた土藏の壁は、此處の石塔同然、廊中は宛然これ、此の淨閑寺の卵塔場ぢや。……此の卵塔場と云うた處で、やがて又た焼けて野原に成るぢやろ……其處へ工場が立つ。……即ち、國家の體面を保つ事が出来る、ト同時にぢや。……鮎や蜆

は滅びて了ふわ。はッはッはッ。
氣三 眞個ですな。凡て醜惡汚穢なものは、一炬にして焼いて了ふに限るですな、はあ。……
小一 其の通り、古いものは焼くに限りませぬ。其處に新しき生活の花が咲くんた。

治助 へい、何か存じませぬが、山が焼けましたあとは、蕨、薇が、よう生えますで。別に新しい花は咲かねえでござります。
氣三 此だ、——可厭になつたふ。
小一 所謂縁なき衆生でせう。度し難いもんですよ。

岩造 いや、棄たものぢやない。……自動車に乗せて歸つて、俺が家の門構へでも見せたら何うか。……生れつきの盲目が、二十の時から、突然と目が開いたら、馬を見て吃驚して又た目が潰れた、と云ふ話があるが。然う云ふ體ぢやろ。
氣三 奇抜ですな。處で、新橋赤坂と云ふのを見せたら、直ぐ又た目が開くぢやないですか。

小一 爺い、何うだ。き様いま僕たちが門へ乗着けたのを見て吃驚したらう。あの自動車に乗せて遣らうと仰有るんだが、うむ、何うするな。

治助 はあい。

千蝶 唯々ぢやないわ、一寸……眞個に乗せる氣なんですか。串戲ぢやないことよ。

雛枝 一所に……可厭だわねえ、私たち、ねえ、姉さん。

氣三 其のかはり、菰包みにして、運轉手の足の下へ蹴込んで行くです。人が聞いたら焼跡見物の土産に、妓夫の丸焼如何でござんす、と云ふ洒落は何うです。

小一 當人は天狗に攫はれた、と思ふだらうね。

氣三 おい、眞個に乗らんか、き様。……一生の思出だらうよ。新橋、赤坂を拜ませるぜ。

治助 赤坂は、もし、圓通寺様でござりますか。新橋から参りますなら、品川の千體荒神様でござりませう。あら神様なり、火伏の御願。時節がらと申し、お難有い事でござります。(繰返す) お難有い事でござります。

岩造 黙れ。……(目に角立て) 其の爺い。吐す事が、凡て眞面目かと思ふと、はぐらかすやう

で怪しからん。馬鹿なりに癪に障る。……此方でも、汝、茶にして遣らう。うむ、木又、小森。小一 は。

氣三 茶にするとおつしやいますと？

岩造 まあ、見て居れ。おい、爺い、爺い。

治助 召されまするか、はアい、はい。

岩造 おい、咽喉が渴いた、爺い、此の人数へ、ずらりと茶を注いで持つて来い。

氣三 (追従らしくハタと手を拍つ) イエス！ 茶を持つて来い。

小一 イエス、イエス。茶だ。ろくな茶はあるまいが、……充滿とな。

千蝶 精々抹茶臭くないのをね。

氣三 名言ですな。

小一 お早く願ふよ。

雛枝 のろいわねえ、自動車に乗らない人は、此だから話せないのよ。

氣三 名言々々、蛇は寸にして人を呑む。

岩造 うむ、自動車と云へば、門へ横づけにした最う一臺に、何だ——女郎の投込墓は氣味が悪い、汚らはしいと云うて、一所に素見に入らんで、——まだ三四人藝妓ども残つてをる。其等に云うて、爺、積込である麥酒も一所に持ち来てくれい。

小一 やあ、休みながら、連中、一杯洒落れてるかも分りませんな。

氣三 さあ、咽喉がぐびぐびして来た。……早くしないか、おい、爺い。

治助 正直、旦那方、此で茶をまゐりますか。……爰に何の花が咲いたやら。少と心なうござりませぬか。御堂の方で……あがつては何うでござります。

岩造 本堂は混雑して居る。

治助 火事で立退いた衆でござりますよ。

氣三 焼出されたな。

小一 婦どもがまごころして居たぢやないか。八百屋お七と云ふ面でも見えりや可いに、と思つて覗いたが、年増ばかり。……何だい、彼奴等は。

治助 はい、仲之町の藝者衆が二組見えてでござります。

氣三 道理で焼出されの癖に、生意氣に髪なんぞ結はして居たつけ。

雛枝 髪結さんは綺麗な人だつたわねえ。

千蝶 でも、何だか。(と鼻で笑ふ。)

治助 いんえ、髪結ではねえでござります。あの方は、仲之町で、はい、昔から一枚看板の、井筒屋と申す引手茶屋、矢張り今度の火事で焼きました。——其の騒ぎで、豫て病氣で在さつした、おかみさんが、お氣の毒な、亡くなりました。——が、其の妹御で、お柳さんといふ、

評判な、美しいのでござります。……尤も唯今では、中根岸へ縁着かつしやつて、大家の御新造でおいでなされますが、姉様の其の初七日の、今日は速夜で。……今戸の寺へ參詣をなさりました、歸りがけ、爰計に立退いてでござります、朋輩の藝妓衆を見舞にござつて、今しがた其の藝妓衆の髪を結うてでござりました。はい、藝妓衆も、其で漸と姉さんかぶりの手拭をとつたくらるでござりますよ。……火事から此方、夜も碌々、寝る間とてもござりませぬ。

岩造 煩い！ 朱引外の藝妓などが、寝ようと轉ぼうと汝等が勝手だ。よく、つべこべと饒舌る爺だ。茶を疾く……持ち來んか。引手茶屋の何とか云つたな、其奴、澁茶の給仕ぐらゐる出來るぢやらう。踏める面なら、其の年増に、此へ手傳ひに出ると云へ。……五圓紙幣ぐらゐる鼻をかんで拾はせてくれて遣る。あゝ、立草臥れた。(あはれ、春も霜けたる石碑をドと倒し、どしり其の上に腰を掛く。氣三郎、急ぎ手巾を出して其尻へ敷かす。)

治助 (手を挙げ、又腰) やゝ、滅相な事をなさりますな。

岩造 地獄の沙汰も金子ぢやと云ふが、汝にも分るぢやらう。石塔は倒れても、俺の尻が乗つたお底に、此奴等は浮ぶんだ。言句があるなら住職に來て吐かせ、と言へ。一問答して、ぎやふんとさせるぞ。はゝはゝ。

小一 豫て御修行の禪機を以て、一喝くらはす處ですな。地獄の沙汰も金次第、こりや、俗耳に

も入易い。爺め一言もないと見えて、亡者のやうに引込んだです。

治助、此の間に見返りく、とぼく入る。

氣三 何うだい、小森君、我々も一つ浮ばせて遣らうぢやないか。

小一 可からつ。

二人、一ツづ、墓石を引覆す。

千蝶 およしなさいよ、一寸、罪だわよ。

小一 さすが、婦同士、同情をなさいますかね。

千蝶 止して頂戴、汚らはしい、女郎に同情するなんて!

氣三 イエス! 動物虐待が悪いと云つて、蠅を殺さずには居られんです。投込みの女郎が可哀

だと云つて、苟も大都の中に、こんな墓原を保存するのは、俱に天を戴くものの恥辱です。:

所謂其の、古き醜きものを破壊して、新しき世界を建設するのは我々の任務ですからな。天、

既に吉原を焼亡し畢ぬ。況や腐れたる肉と朽ちたる骨との、此の芥溜に於てをや。(はずみにか

かりながら、石碑をぐるぐると廻り、腰を掛けむとして、洋服の臀を氣にして、中腰に密と遣

り、いちぢかり股から墓銘を覗く。) 細眉香唇信女。

千蝶 何? 一寸。

氣三 細眉にして、而して香き唇、と云ふ法名ですな。

雛枝 随分だわねえ。

岩造 此奴は何うだ、(其の腰に敷けるを視む) 白面弱腰信女。……おい、分るまい。(と千蝶に)

白い面で、弱腰と云ふ奴ぢや。

千蝶 柳の下へ出るんでせう。

小一 名言々々。

千蝶 小森さん、お合方は?

小一 お合方は恐縮しますね。多分、釋金毛九尾でせうよ。(俯向に差覗いて) は、あ、當らずと

雖も遠からず……雲鬢玉容信女で居やあがる。

雛枝 どんな事よ?

小一 雲なす鬢の黒髪で、玉のやうな顔だとさ。

雛枝 呆れるわ。

千蝶 新聞に出る土左衛門ね、皆な美人だこと。

小一 名言々々。尤も土左衛門と言はれるのさへ、火に怯えた場末の奴等は、此の際頼しく思ふ

でせうよ。

氣三 何にしろ、投込と云ふだけあつて、坊主もお布施の所爲でせうな、何の法名も茶なものです。

二 缺茶碗

岩造 茶と云へば何うしをつた。小森、おい、見て來んか。

小一 は、可うございます。

——行く。出合がしらに、おさきばしりの若いもの、秋刀魚の丈吉、わざとばったり突當つて。——

丈吉 催促かね。(といきなり云ふ。)

小一 え。

丈吉 茶の催促かと言ふんだよ。

小一 (變な顔して) 然うさ。

丈吉 手をお鳴らしなすつて下せえましな。

新七 (續いて出で) 殿様へ、貴下方と云ふものは、座敷にちやんとして居なさるもんだ。

權次 廊下蔭ア見つともねえ。止すが可いや。

箆の源太 (四人目にすつと出で) 慥う、殿様がお急ぎだとよ。茶坊主ども急ぎねえ。(とうしろを呼ぶ。……松之助、金藏、鐵八、ばら〜と續く。以上七人。いづれも、蔭口手鍵を携ふ、揃つた氣競の火事装束。)

源太 さあ、おい、急いでお出花を差上げねえのか。

一同 おい、(と口々に應ずるや、手に手に持ちたる棧俵法師を茶盆に構へ、並べる墓の、缺け茶碗、青竹など拾つて乗せ、手向けの水、雨水を、五人分しやくつて汲む。)

岩造をはじめ、氣三郎、小一これを見つ、肩肘を張つて擬勢を示しながら、きよと〜する。千蝶、雛枝は原よりりおど〜と打震ふ。

源太 おい〜、茶碗や、竹筒の一杯に足りねえ分は、墓石に雨水なんぞ溜つた處を汲出しねえ。苔の眞蒼な玉露でねえと、旦那方の口には合ふめえ。氣を付けねえ。

丈吉 おつと承知だ。

源太 蛞蝓を沈澱まして、棒振蟲を浮かせるんだ。

新七 可うがす。

權次 合點だよ。

源太 此奴ア藪の裏、芥溜流の投込と云ふお手前だ。洒落たもんだぜ。慥う、成りたけ充分と注

ぎ込みねえよ。……時節柄だ、火事の消えるぐれえざぶりが可いぜ。

松之助 拔るもんか。

鐵八 心得てら。

治助 (後おさへに、片隅に鯉子張つて、齒の抜けた高笑す) は、は、は、は、此奴は可いわい。

金藏 さあ、呑め。

權次 召しまし。

新七 おう、旦那。

鐵八 恚う姉え。

松之助 呑みねえよ。

丈吉 殿様、お茶アあがれ。

手に手に、ぶツきら棒に乗せ、突着ける。

岩造 無禮ものめ、(大喝して) 汝等は何だ。

源太 鮎だよ。

岩造 うゝむ!

源太 鯉貝さ。(と云ひながら、つか／＼と寄つて、岩造の腕を無手と取る) 手前たちに蹴飛ばさ。

れた、此の石塔の、此方等ア皆情人だ。半分づ、飲合つた茶碗酒の香がするぜ。(こゝに突きつけ居る丈吉の棧儀法師から、湯香を取つて、持直す) 駄煙突の煙のやうな、もちや／＼髯へ注込んで、逆上を引下げて遣るから然う思へ。

岩造 俺を知らんか、俺を知らんか。

源太 べらぼうめ、木賃で宿帳を認けたら知らず、江戸むきへ來やがつて、迷子札も出さねえで、俺を知らんか。笑かしやあがら! 恚う、皆、其奴等にもさつさと飲ませろ。愚圖々々云つた

ら脳天をお見舞ひ申して、鳶口の穴へ流込んで、生捕りました、河童にして遣れ。

新七 心得てらあね、さあ啖へ。(と片手に鳶口。)

氣三 やあ、無法だ。

小一 (震へながら、怨めしさうに) え、爺、此の連中にいつつけたな。……田舎者だと思つた

ら、き様は何だい。

治助 (片肌脱ぎで、鬚巻を扱きながら) 淺草名物、飛んだり、跳ねたり、替つたりの化けたの

さね。……お前はん許の門番や、學校の小使とは些と毛色が違ひますよ。無縁寺の寺男は、人

間の數には入らないがね、時々狸に化けるてな。も、んがあ。(ひよいと跳ねて、變な手つきで

躍り踊り) や、お前は何をする。(と鐵八を見る。)

鐵八 (此の時、雛枝の口へ、櫛の實を取りて、捻込まんとする處) 私ア廻合せで、お前、こんな

お前、石鹼球見たやうなものを承つて、張合がねえ。小兒だね。茶を吞ませるのも可哀相だから、鬼灯なみに、櫛の實を頬張らせようと思ふんだ。

治助 や、そりや悪い。櫛の實の腐つた奴は大毒よ。吞込ましたら生命とり……殺すほどの事はない、止さつせえ、止さつせえ。

鐵八 おつと、其奴ア危かつたな、矢張り甘茶を嘗めさせろ。——それ、啖へ。

雛枝 あゝ！ 御免なさいまし……

千蝶 あれえ、(遁げむとするを、丈吉、驚擱みに引捕ふ。)

岩造 (堪りかね) 無禮をすると、許さんぞ！

と身悶えして、ぬつと立つ。

三 武藏野

無縁塔の前後左右、石碑の間を景色に、千蝶、雛枝を色どりにて、一同立廻る。……一人が、さし上ぐる石碑を見て、氣三郎尻餅を搗く趣あり。やがて、岩造は源太に、氣三に二人、小一に二人、千蝶、雛枝を一人づゝにて取つて占め、手ン手に、茶碗、湯呑などを更めて突着

くる。……此より前、自動車に居たりと云ふ、藝妓二人、舞臺片隅に出で、此の様子を見て、慌て驚きて、うろくす。其の中をつゝと分けて——井筒屋のお柳、意氣な花月巻、えりつきのお召、淺葱縮緬の片襷を掛けたるまゝ、手にせる梳櫛を帯の間へぐい、と突込みつゝ出づ。

お柳 あれ、お前さん。(取着きに、雛枝に掛れる鐵八を先づ引分く) 一寸、皆、何をするんだね、

亂暴な……あれさ、お止しと云ふのに、ねえ、かしら。

源太を支ふ。それまでに、一人々々を手早く引分く。

源太 やあ、燕か。

一同 井筒屋の——姐はん。——お柳ちゃん。(と口々に云ふ。)

源太 打棄つて置いてくんねえ。(お柳にきつぱり立對ふ。消防夫一同、源太のうしろ。岩造等は

一同、お柳の背。)

お柳 亂暴をしちや不可いよ。

源太 亂暴なのは、其の芋掘どもだあね、お前。藝妓なんか連やがつて、自動車で燒跡の見物を

しやがつたんだ。

丈吉 日本提へ、ぶうくよ、變な臭氣を吐掛けやがつて、此處へ自動車で廻つたんだぜ。

松之助 あんな臭氣を嗅がされちや、第一何だ、日本提の名に濟まなからう。

金藏 合點成るめえぢやねえか。

鐵八 堪えられねえや。

源太 お刺に何だぜ……可哀相に、投込みの遊女衆をつかめえてな、蛆だわ、蠅だわ、人間の芥溜だと然う云つてよな、お柳ちゃん、聞きねえ。此だ、(手にしたる湯呑を見す)泣かせるぜ。……はかねえ苦界の意氣事だ。水を入れて手向けてあつた、此を何うだ。土足に掛けて踏むばかりか、電車でも荷に成らあ、丸太棒の臺尻を、やせた石碑に打据ゑやあがる。……面を見ねえ。牝犬の臭を嗅ぎたさうに、ひこつかした、あの、鼻を見ねえ、目尻を見ねえ、額を見ねえ、髻を見ねえ、いきなり膏ぎつた這額へ鳶口を打込まねえのは、何うだい、此方人等も、分別のついたもんぢやねえか。

夥間を見廻す。

丈吉 違えねえ。此だけ分別が着いた癖に、何んだつて、天麩羅を食ふ小遣もまゝに成らねえんだらう、とね、實は不思議に思つとりまあす。

金藏 (横合から袖を引いて) あれ、よしなよ、見つともねえ。

丈吉 (目を白黒) う、だからよ……だから、其の天麩羅野郎、たゞは置かねえ。

源太 黙つて居ねえ。それだもの、お前、(お柳に)殺すんぢやねえ、活かして遣るんだ。氣つけの茶だぜ。……亂暴だなんて止るのは、お前、何にも知らねえからよ。さあ、退いたり。

お柳 お待ちよ……いゝえ知つてるよ。……知つてるから止めるんだよ。廓の焼あとを、遊山氣取りで、見物されたが口惜いかい、人は落目が大切だわね。時節と場合ぢや仕方がない、たとひ自分の仇敵にだつて、潔よく兜首も切られるぢやありませんか。あきらめが悪くつて往生際にしたばたするのは、三下奴の料簡だし、悪口ついたり、八つあたりは、負腹立つ、と云ふもんだわ。吉原中が灰に成つたを喜ぶ人があるのなら、其の人の御勝手さ。一方に泣くものがあるれば、其を手柄に、三百石、御加増と云つた例もある……世の中は然うしたものだよ。たとへるんぢやないけれど、鈴ヶ森のお仕置で、火あぶりに成つた時、あの、お七が、見物の田舎者を怨んだらうか。何の未練な、怨むものかね。廓の意氣張、色戀は、三階二階のありなしで、汐のさし引はありやしないよ。野原に成つても可いではないか。隅田のほとりに住居してさ、武藏野とか云ふ杯で、露をのんで、お月様の情女に成つて暮さうわね。ねえ、頭。好いた同士が相合傘で、はだして袖の濡れる時、自動車が羨しいかい。……投込み墓の遊女衆を邪険にしたのが癪だと言つては、名所で心中する時に、水晶の數珠を繰りながら、一ツ蓮の世帯の事は思はないで、金持の別荘を口惜しがつたり、羨んだりするも同じ事。……何の！……初手から

野の末、山の奥、……棄札までの望もない、情づく、義理づくなら、投げに出す身體だもの。……錢を自當の旅人が金の土足で踏んだつて、蹴たつて、お構ひはありやしない。頭、野晒の死骸にや、犬と鳥はつきものだよ。……突つくわ、嗅ぐわといつて、其を氣にして追居た日には、此方が案山子に成るぢやないか。尤もね、私なんぞに男の心は分らない。お前さん方、皆の顔に、泥でも塗つたと云ふ事なら、差出て止めはしないけれど、女同士さ、然もねえ、町方の事は知らず、同じ廓の人だから、心持は分つて居る。——まあ此の墓所の佛たちは、大して氣にもしまいから打棄つてお置きなね。——其のかはり、此の人たちが倒した墓なら、あとで私たちが起さうし、手向けの花を撈つたら、又供へれば可いぢやないか。(徐に襷をわがね、袂に入る。)

源太 分つた、(清く頷く)實は此の中、氣が立つてる處だし、無體、癩に障つたから、其の丸太棒、一本も残さねえで頭から塔婆ならべに、鳶口で打込んで、河豚に酔つた禁厭にして遣らうと思つたがね、成程、負腹と言はれりや、些と其處もあら。をかしくねえ。お柳ちゃんの扱だ。……綺麗に手を拍つ……と云つた處で、井小鉢と店すがき、間も調子も合ふめえから、おさらばと爲つ了え!……おう、お前はん方、但し此方人等の繩張内だ。火がかりぢやねえけれど、消えてなくなるのを見ねえ中あ、一足も退かねえからな。あ、薄暗かア成つて来る……

足許の明るいうちに……それ、蛙が鳴くぜ、歸んねえ。足行は巧者だ、轉びなさんなよ。

岩造 可! 其いぢや、汝等、言分はないのだな。

鐵八 何だ、言分がねえ?

源太 鐵やい、止せやい……おう、心配しねえで早々と歸れ。

岩造 其方には無いぢやらう、が、言分は此方にあるが。

新七 言分があるんだえ? や、嬉しい事を云やあがる。(と取つてかゝる。)

岩造 然しながら、時間がないで。

氣三 まあ、社長まあ、魚服、魚服、ね、魚服と云ふたとへがあります。……ね、天上するやう

な蟒蛇でも、ね、梅干に化ければ、一口に舐められます。場所が悪いです。

小一 イエス! 千均の弩は谿鼠のために發せずすな。……(岩造を押遣り押遣り、己も退く。)

千蝶 (ふるへの止まぬ鏝枝の手を曳き、悄悄として、お柳の前に頭を下ぐ) 申譯がありません。

お庇様で、(としみづく云ふ。)

鏝枝、同じく會釋をする。

お柳 まあ、お前さん、更まつて、それぢや私、極が悪い。……ですがね、女同士、お前さんも、察して遣つて下さいまし。……同じ遊女衆の中だつて、此處に恚うして、投込みの可哀な姿に

新七 場合が場合だ、ポーン。(と驚口を一つ素振つて言ふ。)

鐵八 然うだ。姉はんは、……情婦と相合傘ツて時、自動車が羨しいかッて言ひなさるがね。慥う、此の面だけに、私ア情婦がねえと思ひねえ。處で、唯駈けるのはまだしもだが、音を立てられると、漸つと慥う、壓えつけた蟲が、むらくと込上げるね、おい。

金藏 怯えなさんな、だまし打なんて卑怯な、唐突に殺しやしねえ。……が、え、慥う、後生だ。此方でお願えだから、此から其處の門を自動車で遁出す時に、あの、駝鳥が縊殺されるやうな、ピープ、變な聲を出すのだけは止してくんねえ。

金藏 (づかくと小一に寄る。ときよつとした體にて遁込む。其腕をぐい、と取る。)

源太 (先刻から無言にて、一同とともに、お柳の處置ぶりを眺めて、つくづく嬉しさうな顔色なり。此時聲を掛けられて) やあ、驚いたかい、蟲が起りやしなかつたか、氣の毒だつけな。

小一 (焦つたさうに、手を擧げて) 遅いね、おい、大將御機嫌、頗る斜めな處ぢやないか。

千蝶 (再び、涙ぐむ。)

お柳 (又、落散つたる、花簪を見つけて拾ひ、フツと塵を吹いて、雛枝の鬘にさして遣り) 堪忍なさいよ。

千蝶 はい、唯今。

お柳 あ、一寸、姐さん、大層お髪が亂れました。(千蝶のおくれ毛を撫でつけて、自分の髪へ白い手で、横櫛にぐいと挿す。)

千蝶 (聞くうちに、ほろりとなつて) おかみさん、身に染みて、悚然とするほど濟みません。……あの、(一寸あらたまる) 其につきまして、少し、あの、貴女にお話が……(と云ひかくる。)

小一 (小戻して、きよとくししながら) おい、早くとき、おい、きみ、おい、姐さん、(促し立つ。)

成つてるのは、一寸見には、何うした因果か、どんな罪の報でもあるやうに、誰が見ても想はれませうが、欲得に意地を忘れ、算盤づくりに張を棄てて、年明の始末ばかり心掛けた利口なのは一人も居りません。……戀と情に、身體も生命も、遣放しの馬鹿ばかり、馬鹿だが嬉しい人ばかり、私たちには嬉しいけれど、世間の目には馬鹿ばかり。蛆だ蠅だと言はれます。切めてお前さん方苦勞人でも、あ、氣の毒だ、可哀相だ、と思つてお上げなさいなね。

千蝶 (聞くうちに、ほろりとなつて) おかみさん、身に染みて、悚然とするほど濟みません。……あの、(一寸あらたまる) 其につきまして、少し、あの、貴女にお話が……(と云ひかくる。)

小一 わッ！（と怯える。）

新七 それ、一見舞申さずにや濟まねえからね、姉はんと約束した内濟喧嘩だ、ぶりかへしちや男が立たねえ。

丈吉 其の通り。其の通り。此方人等の男を立てて、お前たちを撲らせねえやうに、お願えだ、此だ。手を合せる。

鐵八 秋刀魚やい、何も拜まなくつても可いぢやねえか。

丈吉 何ね、一寸かさに懸つた發奮だよ。慙う、頼むから、ピーを遣らねえで駈出してくんねえよ。

小一 城下の盟です、全權委員、委細心得まして、決して、警笛は鳴らしません。……さあ。（と千蝶、雛枝をとまひ入る。）

金藏 一番、約束を見届けようぜ。

丈吉 合點だ。いや、眼張れ、眼張れ。（と古風な假色。）

金藏 馬鹿、何うしても辻堂の焚火に當つて、一はな懸けに武者修行に一刀斬られようと云ふ御仁體だ。

丈吉 刀でも構はねえ、金が身體へ入りや可い。

新七 あれだ、……買喰がしてんだらう。

丈吉 奴も然やうに申しましたよ。あ、テンブラクヒタイ、テンブラクヒタイ。四人揃つて、口三味線にて入る。

治助 （のつそりと進み、にた／＼と笑ひ傾く）姉はん、うめえ事を言つたね。へ、へ、ト墓原へ立つて艶麗に亡者どもを助けた處は、婀娜な觀音様と云ふもんだ。……廓で己が當もの「どツこい屋」を遣た時分にや、いけすつたらなかつたてな、ぶツと、頬邊を膨らましちや、初中來て、吹矢を吹いたが、いや、雨が降つても傘もさゝずに、袂を被つて暴れたもんだて。……さて、又當てるわ、一銭が五本で一本も空矢なし。中で三本くらゐ一等の星を貫いて、看板の福助と、大鯛の金花糖を、ちよろりと攫ひの、ベツカツ、からころ、木履で、頭を出してあばよでえす。……此方資本を摺るからね。……井筒屋の小姉が、眉毛を恚う上へあげて、くるりツとした目を据ゑて、うけ口で矢筒を撓める、と俺あ其の毎度に、ぎよツとして、少え時、いかさま賽で、いけえ事人を傷めた、其の應報だと思つたてね。其がために發心して、寺男に成つたと云ふわけでもないが、ありやうは此の人ばかりは、から／＼どつこいを斷つて、飴一本づゝ無價で進上。かすりを取られたものだつけ。……つい、此の頃と思ふがね、は、……いかさまな、おたばこ盆が圓鬚に成つた、雁首も鍍金が兀げて、地金の素銅が出るわけだ。（と

兀頭をつるりと撫でる。）

お柳 可懐しいわねえ、小父さん。——あ、あの、時分はのんきだった。……姉さんが居たればこそよ、其の姉さんは……今度の火事で、（言、湿む。）

源太 廓も野原に成つて了った。（と横を向く。）

治助 何にも言ふめえ、向う顔巻ぢや泣かれねえて、（と鼻をこすつて此の勢で）さあ、兄哥。お柳 頭、皆、手を貸した。……（消防夫とともに、花筒を立て、倒れたる石塔を据直す。）

源太 又、竹馬の無心ぢやねえか。爺さん。（と治助に向ひ）私が拵えて遣つたもんだ。吹矢ぐれえ何でもねえ、……田町の上總屋へ使ひに行クツて、お前、竹馬で跳橋だ。

お柳 今でも乗る事よ。

源太 （笑つて）親指の前で乗れますかい。

お柳 堪忍して頂戴、小兒だとさ。

源太 小兒にしちや、些と説法が出来過ぎたつけ。矢張り例の御仕込みかね。

お柳 いろはにほへとちりぬるをわか、未だ、ほんの一年生。

源太 戀の手習、つい見習ひてか、へッ、遣つてやがら、燕め。（と出て行きさうにする。）

お柳 一寸……

源太 奥さん、……私に用かい。（と振り返る。）

お柳 酷いよ！ 頭……其の奥さんも氣に成るがね、お前さん、先刻も私の顔を見ると、いきなり燕だつて、又いまも然うお言ひだね。……亡なつた姉さんなり、交情のい、人たちにも、薄聞いて知つてるぢやないか。お姑が厳しくつて、めつたに外へも出られないもの。……不實な不沙汰ぢやないんだのに、人の事を燕だなんのつて、廓の古巢の故里へ、年に一度そこいらしか姿を見せない……あてツこすりの渾名ぢやないかい。私……情ないねえ、頭、餘りだわ。

源太 （やつきとして）馬鹿な、馬鹿な事を言つちや不可え。よくせきお前さんが不人情だと思つたら、恚う、同じ廓で生れたよしみだ。人に蔭口をきかしたくねえから、此奴義理知らず、と千代紙の札を立てて、竹馬にのせて引張つて連れて来るんだ。死んだ、井筒屋の姉さんはじめ、又、其處にや、義理も、様子もある事は承知だものな。十年、お柳ちゃんが影覗きもしねえで居て、うつかり出合つた大門が、地獄の仲町の入口だつて、當ツこすりなんか云ふもんかな。

お柳 忘れないでくれ、まあ！ 嬉しいわ。ぢや、燕ッてお言ひのは？

源太 む、其だがね。

お柳 それ、御覽……

源太 氣にしなさんな、何も仔細のねえこつたな。

お柳 言はれないんだよ、矢張り。當ツこすりに違ひない。

源太 困るな、何うも。

お柳 御勝手になさいまし。(とツンとする。)

源太 見や、この、通り駄々兒だ。おや、言はあな。……慥う、皆も聞きねえ。此の姉さんがな、然うよ……十四五だつけか……竹馬が羽子板に成つた時分よ。京町の下駄屋の店で……緋の天鷲絨の緒の立つた、裏金のついた雪駄を、ひけらかしたと思ひねえ。さあ、欲くつて堪らねえツさ。やたらと姉さんを強請るんだが、生意氣お言ひでないか何かで、頭からお取上げ更になし……雪駄が穿けなけりや死ぬわで以て、田圃のお前、蓮池へ身を投げたんだぜ。

お柳 ふ、ふ、(と横を向いて忍び笑す。)

一同笑ふ。

源太 否、申戯ぢやねえ。眞剣だと思ひねえ。——雪駄を買つてくれないから死んでばけて出る

事よ、かしく——さな、お前、遺書をちやんと書いて、何う言ふもんだ、……其奴を折鶴に折つて、猫板の上に置いて駈出したんだ。蓮池ぢや、お前、慈姑を掘つてる爺さんが、びしよぬれな桃割を抱いて歸ると、や、驚いたわ、内中押取巻いて、様子を聞くと、遺書を見て頂戴が、

其の折鶴。

お柳 あれ、もう澤山。

治助 頭、其の折鶴が。何故其が燕だの。

源太 まあ、聞きねえ。居合せた客人が、をかしいんだか、可哀さうなんだか、嬉しいんだか譯の分らねえ涙を出してな、雪駄は私が引受けた、とそれ、人殺しの罪を身代にかぶるやうな言種よ。身を投げるくらゐな品物だ。仙臺様の穿きものほどもあるめえが、安くはない、と呑込んで、其の時分、五圓と出した。其の金子で、何うだ、右の雪駄を五足と買ったぜ。……遊びなかまの、娘連へ、皆なお穿きよ、で、ずらりと並べた。——死ぬほど自分が欲しいんだ。誰も嘸かしと思つたまでは、お姫様喝采だが、さあ、嬉しくつて堪るめえ。仲の町から、角町、京町、一軒々々、軒下から店へか、つて、妓夫臺を斜ツかけに、式臺まで、ツイと入つて、スツと出て行く。……雪駄の音がね、五人揃つてチャラ／＼チャラ／＼、軒づたひに、蹴然ひらりと出入る様子が、暖簾の柳に燕さね。……縁起はあらまし恁の通りさ。——東西々々、一寸、仕方をお目に掛けよう。何もつき合だ、續いて、遣ねえ。……それ、チャラ／＼、チャラチャラ、(と着いて離れて、離れて着いて、墓石を縫つて行く。とチャラ／＼チャラ／＼と聲を揃へて、少いもの二人あとに續く。)

源太 (舞臺を入りかけて、ふと留つて、お柳と顔を見合せる。)

お柳 (莞爾して、さしうつむく。)

源太 は、は、は、。

松之助 (其の源太の背中へトンと當つて) 頭。

源太 え。

松之助 惚れてるね。

源太 馬鹿を云ふねえ、洒落本ぢやあるめえし。(と手鉤をしゃんと——退場。)

治助 頭、おい、(と呼懸けて) 御多分にや漏れねえぜ。いや、チャラ〜チャラ〜、(とよた

よた真似る。)

お柳 小父さん、矢張り燕かい。

治助 おつと、どっこい屋。吹矢に當つた蝙蝠さね。(藪に潛る。)

四 柳提灯

暮色更に迫る。藪壘を隔てて場末の町の灯見ゆ。本堂の方、鉦の聲あり。

お柳 (静に一人佇み、襦袢の袖の端を嚙んで、差俯向き居る。フト顔を上げて、高く無縁塔を

仰ぎながら、袖口を両方合す) あ、皆さん、廓は野原に成りました。……悲しいわねえ。……

……い、や、其とも、嬉しくつておいで知ら。……まあ、ねえ、墓ぢや何にも言ひなさらぬ。

……何うせ、私なんかも、末は無縁の投込みに成る身體。其の時は、おいらんたち、皆さんの

心が分るわね。(しめやかに云ふ、寂しい姿。)

千蝶 (内端に引返し、立出づる) あなた、お拜みでございますか、お拜みでございますか。

お柳 (此にて振返る) おや、先刻の。

千蝶 はい、あの……おわびやら、お禮やら、更めて、お目に掛りたくつて参りました。先刻は

何も彼も、實に申譯がありません、何うぞ御免なすつて下さいまし。私は、あの、千と言ひま

すものですが……

お柳 何の、まあ、言譯をなさる事がありますか。……お禮も何もありません。皆ね、

大火事から以來、頭であひが、赫として、氣が立つて居るもんだから、あんな亂暴な事をして、

却つて、私どもこそ極りが悪い。そして、まあ、お連は何うなさいました。お前さんお歸りで

はなかつたんですか。

千蝶 え、私、先刻、貴女のお話を伺ひましてから、あの方たちと可い氣になつて、此の御近

所を、見物の自動車なんか、乗つて歸るのが恥かしく成りました。……お客は大變怒りました。

決して以來、世話をしないとまで言ひましたけれども、構はないと然う云つて、私は後に残つたんです。……もう、私、そればかりぢやありません。あゝ云ふ方たちに呼ばれなくつては、稼業の出来ない土地に居るのも、可厭なやうな氣がします……失禮ですが、あなた、お見掛け申した御様子では、引手茶屋の、おかみさん……で在らつしやいませうねえ。

お柳 はあ、否、まあ、ねえ……

千蝶 推着けがましようござんすけれど、此がお目見得とお思ひなすつて下さいまし。……曲りなにも踊ります、絲道だけは、口もとですが、とぼく歩行きはしますから、後生ですわ。お世話なすつて下さいましな。

お柳 抱妓さんでおあんなさるか。

千蝶 いゝえ。

お柳 失禮を。看板ぬしでおいでだね。

千蝶 極りが悪うござんすわ。……こんな風で自前ですから、あんな旦那を持たなくつては成りません。其のかはり、欲しいものは右から左、着たいものは裁おろし……乗りたいものは飛行機でも、行きたい處は京、大阪……それが可い事はでな事、勝手な事と思つて居ました。おかみさん、貴女のお話を聞いてから、悚然するほど、可厭になつて、……隅田の岸に青天井で、

武藏野とか云ふ杯で、色ある露がのみたうござんす。……死んだ死骸は野晒でも、此の、(と四邊を熟と視めて) 投込みにも成るなら成れ……あんな、旦那に、唾を吐かれて、足蹴にされても構ひません。あなたの口から唯だ一言、譽められたい。お金子も何にも入らないんです。格子を拭いて働きますから、仕込みをおいたとお思ひなすつて、お傍に居させて、其の御氣象にあやからして下さいまし、……眞剣ですわ、おかみさん。

お柳 (聞くうちに、顔にひたと其の袖を當てつ、力なさうに無縁塔の石段に凭り掛る) 嬉しい事を聞くわねえ。悲しい事を聞かせるわね。仲之町の家ツたら灰に成つたぢやありませんか。

千蝶 ですが、あなた、直にお建てなさいませう。

お柳 いゝえ、火事と一所に姉が死んで、井筒屋の跡は絶えました。……私は、堅氣へ縁着いて居りますもの。

千蝶 では、あなたは堅氣の奥様。

お柳 え、飛だ不料簡。……私もね、青天井で露を呑むつもりだつたのだが、踏迷つたかして、路が違つて、奥さんとか御新造とかいふ、厄介な、出来損ひに成つたぢやありませんか。實家方では、まだ養子とも、養女とも言はないうちに、今度の騒ぎで、姉が亡くなりましたからね、

有る借金が、なかつた處で、もう家は建ちません。

千蝶 まあ、火事の騒ぎに、お姉さんが……お怪我でもなさいまして？

お柳 病氣です……其の病氣ですがね。……矢張り此の間の火事の所爲に思はれますよ。焼けた日の三日前、まだ夜中だったと云ふ事です。姉が、は、かりへ参りました。……仲之町へは、櫻が植揃つたばかりの處、陽氣も例年より寒いのに、眞夏のやうにじり／＼ほてつて、壁へ手を觸ると熱いんですつて。……不思議に思つて、窓から何心なしに外を見ると、其處が、先刻此處へ來ました、源太さんと云ふ頭の家との廂合です。其の廂合の處を、覗くと、覗かれて、ふら／＼と出て行く、眞赤なお前さん、何うでせう……頭巾を被つたか、頭まで眞赤な、緋色の被布を着た婆々で、七十餘りと見えるのがね、赤い杖を突張つて、片手の掌へ火を乗せて、ふう／＼吹きながら出て行き狀に、振返つて姉の顔を見ましたとき。

千蝶 (悚然した狀に、四邊を昫す。)

お柳 それから、どツと煩つて、謔言のやうに、火事がある、廓が焼ける、氣をつけて、と言ひ續けたつたと言ふんです。大焼の日は、看護婦が附いて、裏門の柵を越えて、煙の中を戸板に乗せて連出しましたが、吉野町の寮へ寝かした時、早や片息。すぐに其處も焼けたから、二度目の立退きをしましたつけ。途中で息を引取りました。(としめやかに云ふ。)

千蝶 (わな／＼と) あれ、其の方は、緋色の被布を着た年寄を御覽なすつたとおつしやいますわね。

お柳 現に。……廓は夜が晝ですけれど、其でも廂合は暗いのに、眞赤な被布がめら／＼と。……そして、白粉でもつけたやうに、顔が仇白かつたとまで、謔言に言ひましたとき。

千蝶 いやアな、(と聲も陰々として) 私も今しがた……

お柳 え、

千蝶 おかみさん、(とはつと抱着く。)

お柳 あれ、吃驚するわね、何うしたの？

千蝶 何うしませう……先刻……先刻、廓から廻つて、日本堤を來ます時、途中、あの路傍に橋が架つて、其の袂に、榎が一本ありません。

お柳 吉田橋の處だわねえ。

千蝶 其の、あの、樹の下の蔭でしたよ。眞赤なものが、踞んで居て、私たちの自動車が駈抜けようとする前へ、ちよろ／＼と出たと思ふと、あつと云ふ間に、車輪にかゝつて廻りました。

……轢殺した、あれと云ふ間に、影もなしに消えたんです。……火事騒ぎに煙で飛んで、榎の枝にかゝつて居た、おいらんの襦袢の袖でもあるだらう、と皆は然う云つたんですが、私は

何うも、確に人間、しかも年寄。でも、あの、赤毛布を着た田舎のお婆さんかと思ひましたが、今のお話では、もしかすると、其の、(と、おどくして)何ぢやありませんまいか。それだと、私たちの自動車に乗つて来て、此處等には居やしないでせうか。一寸何うしませう、いやあな、ねえ。

お柳 (聞きつゝ、屹と成る) 私も聞いた、あちこち火柱が立つといふし、それでは、もしか。

千蝶 え、！

お柳 まさか。そんな事がありますものかね。

千蝶 でも、もう彼方へ行きませうよ。

お柳 もし又それだと、廓にも、姊にも仇なんです。私が捜しても屹と逢ひます。

千蝶 (熟と聞いて) あ、其の貴女にあやかりたいの……おかみさん。……つとめは、とに角、

お宅へ伺はして下さいな。よう、後生です、可いでせう。

お柳 其が不可いなのよ。……一寸、今度は私が極りが悪い。……陰口をきくやうですが、妹だと

思つて話すんですよ。お姑が厳くつて、貴女がたとおつきあひは出来ません。……姊が達者で

居た時も、實家へ、と云つては年に一度か、それも精々。漸との思ひでござんした。……あな

た察して下さいな。(とほろりとする。)

千蝶 まあ、だつて、まあ……よく貴女の其の御氣象で。

お柳 其が夫への義理なんですもの。……思ふ男と添つて居て、何が不足で世にすねるやうな事

を言ひませう。よくくだから。……私もう、時々一層死なうと思ふ。……お千さんかい、お

前さん、……時節が來たら逢ひませうね。

千蝶 あんな悲しい事ばかり、(と又継る。)

お柳 もうお泣かせでない。だけれども一寸、(とあたりを見つゝ)おいらんたちも御覽なさい……

こんな可愛い人もあるが、廓も町も、お互に、女は果敢ないものだねえ。

新調 (白衣、黒の腰法衣、十一二の美少年。引手茶屋の箱提灯を、あか／＼と提げて出づ。此

の看板に、桔梗の紋あり。……るづつや、とかなで記す)あの、あの、火事で本堂へ來ておい

での藝妓衆が然う言ひましたから、お迎ひに來ましたよ。餘り遅いからつて。あの、そして、

自分ぢや來られません。卵塔場は可恐いッて、臆病でございますね。

お柳 臆病ですわね、おばけの方で可恐がりさうな様子で居て、何うでせう。……笑つてお遣ん

なさいまし。……御苦勞様ですね。(恚く言ひつゝ、看板に目を留むる)まあ、つい見馴れて居

てうっかりしたつけ、其の看板は茶屋の事、お寺にありさうなものではないわね。それだし

……井筒屋、桔梗の紋。……

新調 ああの、これは立退きの藝妓衆の荷物の中へ、何うした事か、相模屋さんのが紛れ込んで居た、と云うてでありました。寺の提灯は、方々貸したり、使つて居たり、……丁ど可いから此をと云つて。……

お柳 不思議だわね、お千さん、聞いて下さい。火元は近し、姉が病気で、何一つ出なかつたのに、——お小僧さん、私に持たして下さいな。(と手に受けて持つ、無量の思ひ)……まあ、二年越、——久しく持つた事がない所爲か、手が重い。(と俯向く。)

千蝶 貴女、私を持ちませう。

お柳 何うぞ、(と千蝶の手に渡して)お小僧さん。御褒美を上げませう。一寸頼まれて下さいよ。(帯に挟める手拭を折つて畳み、新調の新發知頭へ、ふはりと置く。)

新調 をかしいや。(とはにかむ。)

お柳 い、え、をかしくはありません、お千さん、よく肖合つたわねえ。

千蝶 まあ、ねえ、色が白くつて、綺麗だ事よ。

お柳 迎もの事に、恚うして頂戴。片々の手を懐へ、片手をしやんと突袖で、少し斜に成つて、然う、然う。……さあ看板を此方へ。(と取つて持直して、すらりと極る)さあ、行きませう、お千さん、一寸の間、内の藝妓に成つておくんないな。

千蝶 本望ですわ。

お柳 眞似だけでも、褌を取つて。……右の手を袂の底へ、一つ翻して、ツ、と向うへ。

千蝶 恚うですか。

お柳 あ、撥をお持ちぢやなかつたつけ。……(と黄金脚、珊瑚の簪を抜いて渡す)突支棒にして頂戴、ほんの、俄の、當座の總上の紙ですよ。

千蝶 私、故つと頂くわ。(と一寸頂いて、袖を潛らし、袂へついて、袖を突く。)

三人、姿よく、すら／＼歩行く、と、其まはりを、蝶一羽、ひら／＼とつき絡ひ、やがて看板の明にとまる。

お柳 (恍惚とした風情) 花の香が来て包む。……チヨツ(と舌打をやさしくして)一杯のみたく成つたわねえ。暗夜も朧に見えるんだもの。……(其の時、蝶はなれて空に舞ふ。看板を衝と上げて視かへす)何とも言へない里心がついて来た……仲之町の夜櫻には、井筒屋の看板に、柳の影が映るッて、言つたもの……あれ、可厭な。細く動いて、塔婆の影が黒く映る。……

千蝶 (ひたと寄添ふ。)

お柳 (看板を褌へ下げて立直る)廓は墓に成るのかねえ。(と悄然とする。)

寂しく三人、卵塔の間を辿る。此以前に、お柳の姑、浦松の隠居、楨子刀自。白髪の切下げ、脊低の巖乗。藪壘に窺ひ居り、新調が舞臺に入る處を遣過ごし、拔足して、お柳に摺寄り、七十餘歳の皺の上へ、薄化粧したる平扁き猫のやうな顔をぐつと低く、箱提灯の上へ出して、舐めて取るやうにフツと消す。

お柳 あれ。(と提灯をハタと落し……立竪みて) お、ば、あ、さ、ん、(と氣を打つて云ふ。)

重太郎 (小走りに駈けて出で、お柳のうしろへ衝と廻つて) お柳、(と急込みたる聲。)

楨子自 (提灯を仔細ありげに拾つて壘み、杖と一所に脇に抱へて) 柳や、柳や、魂消たかいなう。怯したではないぞ……今の眞似は、あれは何ぞな! 明るては、お主の方が消え失せいで成るまいで、私が情に吹消して遣つたぞ。人を辛いと思はつしやるな、や! (喚くやうな掛聲して) 浦松の家の掟ぢや。悪所賣女の類とは、表向き交際ふ事成らんでの、お主が姉の初七日の今日……お主一人遣る分で、志ぢや、内々での、私が重太郎を誘うて参つた。今戸の寺から歸らいで、廻り道した事、聞いたによつて、後をつけたでは決してないぞ。迎ひがてら来て見たれば、あらう事かいの、や! 重太郎。

重太郎 馬鹿な、何の眞似をして居るんだ。

楨子 や! 聲高に叱るでないぞい。嫁の氣では、私が教へて喚かせるぢやとひがむでの。靜に言やれ。ぢやが、餘りと言へば、餘りと申さば、……浦松家の嫁ともあらうものが、夜鷹の稽古は、何さらす!……御先祖へ言譯ないで、や! こりや、事の仔細によつては、私が自害でませねばならぬ。や、大それた、(躍りかゝるやうにして、お柳の耳をぐいと引く。)

お柳 あいつ、(引据ゑられる。)

重太郎 (無言にて、はツとする。)

楨子 や、これ、重太郎、荒い事をすないの。お主、柳やを打ちませぬかいの。

重太郎 否。

楨子 なれば可いがの、必ず手荒な事はせぬものぢや。(と言ひながら、お柳の口のはたを邪険に抓る。)

お柳 あいつ、あいつ、

楨子 それ、痛いと言ふがの、重太郎、柳やを何故打つぞいの。これいの、重太郎。

重太郎 否、打ちはいけません。

楨子 何ぢや、打たぬ。ぶたぬものが、何故、音を上げる。音ぼねを立てるのぢや。(云ひつゝ、又

顛を抓る。

お柳 あ、……

楨子 (又片頬を抓る。)

お柳 あ、れ。

千蝶 (此の間、手探りにはらくして、うろく搦む。)

楨子 (抓りながら、にこりとして) それ、泣くが、痛いと言ふが、それ。……

お柳 (蒼くなりつゝ、空を掴むやうにして捜す手と、重太郎、暗中に手を犇と取合ふ。)

重太郎 (くひしめて咽び泣く。)

楨子 折檻をしやるないの、泣くがいの、可哀や、や！ こりや柳やの本心では決してあるまい。

……狐か狸が憑いたのぢや。疾う内へ行て水なと喫はしよ。車の上へ縛らずとも可からうかの。

あ、苦患やの、苦患やの。誰の所爲ぢや。柳でないぞ。狐めが。(又捻上る。)

お柳 (縫りついたるま、聲をのんで、しかと重太郎の手にくひついて、震へて堪ふる。)

重太郎 (ともに戦きながら) 来い。(手荒くぐいと引立て行く。)

千蝶 (聲をしるべに) もし、……(と寄る。)

楨子 (中を隔てて) 何ぢや、お主あ。(と杖の尖で、胸を支く。)

千蝶 (ぼつたり倒れる。)

楨子 手荒くすなや、や、重太郎。……喜の字の祝を前に控へて、苦患やの、苦患やの。(とじろ

りと視ながら、手に提灯を載せつゝ、退場。)

千蝶 (ほつと息して、起上り、と四邊を見て、褻を合せて、衝と急いで入る。)

六 拍子木

荒涼陰惨たる卵塔に、赤き光颯と立つ。無縁塔の裏なる二本の大卒塔婆左右に動きて、赤魔姥、立顯る。

赤魔姥 (片手を塚に、片手を杖に、ぐいと腰をのして、お柳の行きたるあとを見送る) む、あれらへも火の粉は飛んだ。(北叟笑して、頷きながら、のろく歩行み出づ) 女ども、灰に成つた廓見たか。嬉しいか、悲しいか。や、(と静に) 嬉しいか、や、悲しいか。(と杖の尖にて一ツづ、墓石をコトコトと敲く) ものいへよ、やれ、無縁の女郎。私はこれ、其の返事聞かうための逗留ぢや。(墓をふらくと縫ふ。)

治助 (拍子木、カチカチカ、チと出で来る。打ち仰いで) 可厭な空ぢやな。……(カチカチと歩行きながら) ふん、は、ふん、きな臭い。あの衆、吸殻など捨てたかい。(と鼻をひこつかせ

ながら、無縁塔の前にかゝる。と向直つて、すつくと立つ。赤魔姥を一目わあ、火柱。…とばつたり這ふ。

其二 根岸おまじなひ横町

一 娘分

お鶴 (臺所より出でたる振にて) 舞臺は奥座敷——其の高縁の端に至り、植木屋の手傳、半次を呼びかく) 一寸、植木屋さん、一寸……

半次 (なまけたる風にて、庭前を掃いて居て) あい、私かね。

お鶴 私かもないもんだね、外に誰も居やしないぢやないか、焦つたいよ。

半次 おめででえな。へむ、紋切形を言つて居ら。

お鶴 おめでたいのさ、そりや、お内では御隠居様の喜の字のお祝でおめでたいんだけど、…

…だつて忙しいやね、呼んだら、早々と返事をおしな。

半次 へい〜…何ぞ用でございますかね。

お鶴 何ぞ用つて、お前さん、御飯をあがつたんですか。

半次 御飯かね。…一杯づゝ頂戴の、其の一件の事ですかい。

お鶴 何の件だか知らないけれど、植木屋さんの若い衆は何うしたらうつて、お前さん、奥様が、お忙しい中で、氣に掛けて在らつしやるぢやないか。落着拂つて、お前さん、最う食べたんで

すかよ。

半次 (ぶツきらぼう) 食べねえよ。

お鶴 ぢや、早くして下さいなね。

半次 食はねえから可いぢやねえか。

お鶴 おや、妙に突掛るね、此の人は。…ぢや奥様に、其の通り申上げるから可い。

半次 勝手にしねえ。

お鶴 勝手にしますよ。(とツンとして行く。)

お柳 (襖の蔭にて) まあ、静におし——然う、(と云ひつゝ、すツと出で) 植木屋さん。

半次 (無言。)

お柳 植木屋さんと云ふのにさ。

半次 うゑき屋さんと言はれると、私あもぐりだ。ほんの間にあはせなただけれど、此でも名が

ありますからね、名を呼んでおくんないな。

お柳 (品をよく、邊りを見廻し) 松的……(と一寸、蓮葉に腰をおろす。)

半次 へい。(と突拍子な大きな聲。)

お柳 あ、吃驚するわね。(とトンと手をつく。)

半次 こたへたか! は、は、は、私あ又空きッ腹へがくりとこたへた、あ、切ない。

お柳 何を拗ねてるんだい、なぜ、お前御飯をお食べでない?

半次 斷食だ。

お柳 何の洒落さ。

半次 洒落ぢやねえやね……ね、姉はん、お前さんは仲の町の娘分で、今ぢや恠うした大所の御新造だ。私あ地方の裏長屋の餓鬼で、相變らずの溝浚ひだけれど、同一跳橋を出入りして、私立へ通つた友達だからね。町方の奴等にこれんばかしもひけは取らしたかねえんだと、まあ、然う思つておくんない。

お柳 嬉しいよ。……

半次 處が嬉しくねえ心意氣だから、無體、癢に障るんだ。

お柳 大層、また障らせたね。何がそんなに癢なんだえ。

半次 饅さ、あの……

お柳 ぬたとは?

半次 お膳に着いてた饅だよ。……此奴ア呑めると思つたがね、聞きねえ。一所に臺所で頂いてた經師屋がね、若い衆何と、此のぬたの種は魚軒なんだ。——ね、昨夜一たてあつた客へ出した、其の魚軒の残りものなんだが、魚軒のまんまぢや色が變つてゐて……見た目も悪い。……味噌で捏ち了へば新規のお料理、わざと拵へた御馳走に見えて、人が結構だと言つて頂く。……其處等が臺所の働きた、と奥で話して居たのを聞いた。……成程な。猿頬貝の剥身を新規に買ふより、残りもので生肌鮭の方がお錢はたつて聞えが可い。世間體の見得を張つて、もとを掛けねえ寸法は豪いものだ。金子を拵へる人の料簡は行届く、——と其の經師屋め、酷く感心して話しやつた。何の料簡だか知らねえけれど、無體癢に障るぢやねえか。

お柳 大な聲をおしでないよ。

半次 まあさ、ものの道理がよ。

お柳 道理が、と云ふ風ですか。

半次 道理で悪けりや情合だ。ねえ、内ぢや金を溜めたいんだと、可いかい、金子を溜めるにや出入りの日備取に、うめえものは食はせられねえから、此の魚軒はのこりものだ……可いか

い、残りもので悪いけれど我慢して食べてくれろ、と打撒けて云つて見ねえな。其處は江戸兒だ。頼まれたからにや可厭とは言はねえ。變な臭氣の些とぐれえ、わさびで殺して鵜呑みにして遣ら。其わさびだつて生姜だらうがね。……生肌鮪の鰻とごまかして、魚軒殘品の暗討と來ちや合點ならねえ。……姉はん、何だつて、そんなさもない、しみつたれた料簡に成んなすつた。仲の町の生抜きが、露店の指環を嵌めるやうな、資本の出ねえ見得をすると思はれると、經師屋の元だつて、顔が立たねえ。ねえ、然うぢやありませんかい、奥さん。

お柳 厭味をお言ひでないよ、解つてる事だから。

半次 いんや、分らねえ、分らないよ。井筒屋のお柳ちゃん。

お柳 あ、それを言はれると……（と差俯向き）堪忍しておくれ、此の内の家風だとさ……お婆さんのいひつけだから。

二 御家風

榎子（重太郎の妹、大ハイカラにて出づ）お姉様、お婆様が、何かおつしやつたのでございませうか。

お柳 はい、いゝえ。……（と濁して）ぢや、植木屋さん、手落ちのないやうに頼んだよ。御隠

居様は痲性でおいでなさるからね。（知らない顔で、と目許で云ふ。）

半次（心得）へい、もし、御覽なさいます通り、精々氣を付けて居りますんで、へい。（と引込

む。）

榎子 お姉様、——何がお氣に入らないか知りませんが、出入りの、あんな下等なものに、お婆様の悪口を云つて酷くはない事？

お柳 え、（驚く）何時私が、お婆さんの。

榎子 第一、其が不可い事よ。……お婆様と言ふものよ。……お婆さんでは安ッばいわ。些とは言葉づかひにお氣をつけ遊ばせ。

お柳 はい。飛んだ事を。貴女、何時私が悪口を申しましたえ。

榎子 現に今、然う言ひはしなくつて？ そりやお姉様はお育ちがお育ちですから、恚うやつた家庭の事は何にも御存じではないでせう。……ですからお婆様が御教育なさるんだわ。教へるんぢやない事。……直ぐ一口でお覺えなさらないし、直きにおなほしなさらないから、年寄だから、氣短かで、そりや癩癩を起すでせうよ。貴女、それが氣に入らないで、腹が立つたら面と向つてなり、ちやんとした親類の前で御非難を遊ばせ。あんな無教育な下等動物に蔭口をきいて、卑怯だと思はない？

お柳 私、何うしたら可いでせう。思ひも掛けない、貴女、眞個に私が、そんな事を言ひましたか。

榎子 申しました。……お婆様は癩性だつて言つたぢやない？ がみく、癩を起すつて事だもの、貴女、それでも蔭口を利かないと——然う言張る？……

お柳 まあ、(と優しく打微笑み) 飛んでもない、貴女。……癩性と言ひましたのは、植木屋に、掃除なんか氣をお付け……御隠居様は綺麗すきで在らつしやるからと、然う言つたんでござい

ます。

榎子 はあ、綺麗すきつて事なの、癩性とは。……嘘でせう。

お柳 否、眞個でございます。

榎子 一寸、それでは、どんな字をかくこと？

お柳 お恥かしう存じます。

榎子 癩性——(高慢に掌へ、指にて何か記しながら) 分らない、何しろ、地方語ね、俗語だわね。

お柳 はい、何ですか、皆、然う申します。

榎子 皆ぢやないわ、芳原の、焼原で言ふんでせうよ。然う、綺麗すきつて事なの、然う、(と考

ふ)……すると何ね、お姉様は、見掛けに寄らない諷刺家ね。

お柳 (何の氣もつかず) はい。

榎子 はいですか、おや、はいとは然りと云ふこと、私の言つた事を、然やう、と自認した事に成るんですね。然うですか。お姉様は諷刺家で在らつしやいますか。此から其のつもりで氣を着けませう。お、可恐い。

お柳 返事がお氣に障りましてございますか、何ですか、お教へなすつて下さいまし。……

榎子 あら、御存じない、諷刺家を。

お柳 眞に不束でございますから、何うぞ、お講釋を遊ばして、下さいまし。覺えますから。

榎子 お講釋、寄席ではないわよ。ほ、ほ、ほ、そして覺えますからつて、お姉様、(とばかりは猫撫聲にて) 覺えて可い事ではないの。一體、貴女は、それぢや何ね、人の云ふ事を、分りもしないで、可い加減な、から返事をなさるのね。澤山、然う遊ばせな、何うせ然うでございませうよ。

お柳 否、(と強く) 然う云ふわけではないんですの……(と聲やゝうるみ) 行届きませんで済みません、何うぞお教へなすつて下さいまし。(と目を瞑つて、じつと手を支く。)

榎子 一寸、諷刺家つてのは、ね、お姉様、お聞き遊ばせ。貴女は、あてツこすりやさんだと云

ふんだわよ。(唇をびいと出す。)

此の以前より、槇刀自、忍足にて隔ての襖の蔭に來り、立聽しながら、榎子の毒言、なまくら刀にて、お柳の顔を引こするが如くする毎に、ほく／＼頷き、總入齒でニヤリとす。

お柳 え、(と驚いて顔を上げ)其の、其の返事を、はい、と私が申しましたか。あの、其の返事を、(と屹と榎子を見詰めながら、思ひ返し、瞳をそらす)まあ、何うしたら可いでせう、馬鹿ですわね。(と寂しき笑ひに紛らして)なぜ、お榎様……

榎子 又ですか、お榎様は可厭だと云ふのに、

槇刀自 (頷く。)

榎子 榎子様と云ふものよ、……無教育だわね、口の利きやうたらありやしない。

お柳 榎子様、なぜ、私が、あてつこすり屋なんですか、

榎子 あてつこすりぢやありませんか。然うぢやない？ 貴女、お婆さまの事を、俗語で、癩性、綺麗すきだつて言つたでせう。一寸、何處にお婆さんが綺麗すき？ 兄様も知つてるわ。おてうづに行つて手を洗はなかつたり、疊にこぼしたお汁を舐めたり。(……と低聲なり。)

槇刀自 (此の間、耳を押當て爪立ちながら、聞えない様子あるべし。)

榎子 其はお兄様も知つてるわ。私だつて驚く事よ。随分汚くつて、少しばかり辟易するわ。其

を綺麗すきなんて……此でもあてつこすりではないと云ふの。え、？ お姉様。

半次 (庭の隅より、ぬつと面出し、此方を窺ふ。)

槇刀自 (見附けて、恐い顔をして、ぎろりと睨む。)

半次 (慌てて引込む。)

お柳 (あらためて、頭を下ぐ)申しやうが悪くつて、お氣に障りましたら堪忍して下さい。……でも、御隠居様の思召しだと申しませんと、若衆に、壓が利きませんものですから、つい、

あの……

榎子 だつて、貴女は何よ？ とに角、浦松家の令夫人ではありませんか。其の令夫人が、出入りのものに壓が利かないでは困る事よ。矢張りお育ちがお育ちだから、其で人が馬鹿にするのね。庭掃除させるくらゐに、お婆様を、だしにお使ひなさらないやうぢや、……あ、行末が案じられる。お兄様はあんなだし……私は最うお嫁に行くし……浦松の家は何う成るんでせう、ぢごく宿にでもなりはしない事。

お柳 榎子様。(と屹と云ふ。)

榎子 お、可恐い！ (仰山にうしろへ反り) 貴女、睨んでね。

お柳 滅相な、貴女を睨めば——此の兩眼は潰れます。(と聲が震へてまた俯向く。)

榎子 まさか……そりやお婆様を睨めばだわ、私ぢや、然うね、鳥目くらなるものだわよ。
槇刀自 (そつとのぞいて、入りざまに) 榎子や、榎子や。(と呼ぶ。)
榎子 はい。唯今、(とそはく)お姉様、(と例の猫撫)些とお働き遊ばせ、もうお客様が来る時
分よ。……まあ、可厭ね。俳優の身振りで鬱いでるのね。(と云ひ棄てて、槇刀自が立ぎきした
る横手の襖を出て行く。)

三人目の關

重太郎 (着流しにて、正面よりつかく出づ) お柳、(と呼ぶ。)

お柳 (俯伏したるが、つき膝に衝と起きて、重太郎の帯に縋る。)

重太郎 お柳。(聲を忍んで泣く。)

お柳 あれ、泣いては可厭、笑つて頂戴、お前さんの笑顔を見れば、どんな事でも忘れられる。
(男の胸に顔を隠す。)

重太郎 此が笑つて居られるか。榎の畜生、眞綿で首どころぢやない。竹鋸で、此、此の白い襟
を刻んだ。何の仇で、恚うまでする。其のためには、骨も筋も寸断だが、血を分けた兄妹だ、
兄は然うは思はぬぞ！ 今度も今度も、あいつが結婚すると云ふ……嫁に行つて内を出れば、鬼

を追拂つたやうなもの。其でさへ、相手の男を山師と見た……年よりをたらし込み、妹を柳に
して、金を引出す仕事らしい。……其の金子は惜くない。戀も情もないものに、道具に使はれ
るのが可哀さに、可惨められる當人の、此のお柳さへ心配する。……其の心も知らないで、相
手の男に非を打てば、唇に反を打つて、色の邪魔でもするやうに、腕り曲つた根性の蛇の尾で
叩くんだ。罰當り！ 私にまで、生れて以來、覚えのない立聽の罪をつくらせる。(榎子が出た
方へ無念の目ざし)堪へてくれ、お柳、私が詫る。

お柳 止して頂戴、雪が降つて流連しても、男と云ふものは、婦にあやまるものぢやない。思つ
た同士は苦勞が樂み。夫婦になるのはまんがまれ。お前さんとは添ふ前に、何の苦勞もしなか
つた。其の入れ合せ、と思つて居ます。……忍んで逢ふのに、氷の中を跣足で行くのも、晴れ
た夫婦が、炎天に血の汗を絞るのも、身に染みる嬉しさにかはりはない。私の事は氣を揉まな
いで下さいまし。……あの榎子様の縁談は？

重太郎 うむ、榎子様が凄まじい。……あら粉落雁の吹寄せ阿女、狼のふんの畜生め。……駄菓
子で澤山だ。番太郎の金棒曳、多町で蒼蠅が集つて居やがら。

お柳 まあ、そんな事を言はないで、……そして縁談は何う成りました。

重太郎 何う成つたつて、お前も、様子を知つてる通り、大概話は極つたんだよ。けれども、ま

だ表立つた親類と云ふわけではないから、今度のお婆さんの喜の字の祝も、内曲の親類は日を別に、今日来るのは櫛の奴と結婚をしようと云ふ、其の連中ばかりなんだがね。

お柳 内へは今日がはじめてだわね。

重太郎 妹は一寸々々出向く。……それ、あの、何時も自動車で迎ひに寄越して、お婆さんが乗つて出掛ける。……私も一度、無理にお婆さんに連れられて行つた事がある……何處か埋立地に、かじめを焼いて、何かの製造會社を遣つてる男さ。顔を見ても氣にくはない。何處を何う突留めたと云ふ事はないんだが、山師らしくて危いんだから、私の意見では止めるけれど……妹の奴は勿論、年寄が、あたまから自動車に惚込んで居るんだからね、爪尖へも取上げない。第一、俄身上、成上りと云ふではなし、両親は少死なすつて、年数は少なくなつても、奥州から出て稼上げた、お爺さん、いまのお婆さんの代から私までは三代、……根岸の上中下を掛けた、居つき地主の金貸が。……お柳。(疑と見る。)

お柳 あい、(と軽く云ふ。)

重太郎 お前を前に置いて言ふんぢやないが、此の他に一生、決して我儘は言はないと、親類の前で誓言を立ててまで、引手茶屋の娘ぶんを女房にする料間だ。結婚の事に就いては、まるツきり非常識、……てんで分別が無いのだから、妹の婿の事に是非を言ふ柄ではないと、年よりはじめ極つけます。……まあ、其は可い。本人さへ承知なれば、たとひ其の妹を利用して、家をどんなにされようと、そんな事は些とも苦にはしない、然ほどに乗つて見たいものなら、妹のために自動車ぐるる買つて遣らん事はない。けれど、自分で買つたんぢや氣が濟まない。縁着く先方の自動車に乗ると云ふのが妹は出世のつもりだ。又、年寄は年よりで、婿が工場持、大事業家と云ふ處で、尙ほ此の上にも身代の爲にするつもりらしい。え、其の、利用にするつもりが、つい利用にされて、いづれ山師の手に乗せられるのは知れて居るんだ。

お柳 だつて、お年よりが、得心でなさる事なら、どんな御損があつたつて、私たちをお怨みなさりはしますまい。又……私たちは、もとく其のつもりで居るんですもの。長屋住居も、其の日ぐらしも厭はないんぢやありませんか。

重太郎 お前と恚うして夫婦に成るには、そりや初手から覺悟の前だよ。そんな事を、些とも厭ふんぢやないけれども、愈妹が結婚して、あの自動車が親類に成つた日にや……今でさへ此のありさまだ。第一お前と、あの連中の折合が煩かしい。……私は其が苦に成るんだ、妹の身も案じるけれども……

お柳 何の、私の折合なんか、どんなにでもなりませうから、其の御心配にはおよびません。
重太郎 ぢや、辛抱をしてくれるね。

お柳 そんな、そんな苦しうな顔をして言つては可厭。莞爾して、辛抱してくんなよ、と云つて頂戴。

重太郎 む、言ふよ。

お柳 莞爾してさ。

重太郎 恚うか。……辛抱をしてくんな。

お柳 あい、(と云つて、すつと立つ。)

重太郎 何しろ、衣ものでも着換へておくれ。お婆さんが紋着だと言ふんだから。

お柳 紋着……なの。内で一口あがるのに。

重太郎 内で一口と云つちや軽々しいが、喜の字の祝でお儀式だ。……自動車で乗込む客に、まさか半襟のかつた衣服で、挨拶も出来まいぢやないか。妹なんざ、裙模様と云ふ事だ。

お柳 困つたお屋敷さんだわね。

重太郎 さあ、其だから私が心配。……

お柳 あ、あやまつた、辛抱しますよ。(と莞爾して、ついと入る。)

四夜 櫻

重太郎 (屈託さうに後を視めて)……其の辛抱が出来ようか。……なか／＼此のくらるぢや濟むまいからな。(腕を拱き熟と俯向く。)

千蝶 (花道より、薄色の洋傘をさし、手に緑の色したゝる如き、房りしたる青柳の一枝、地摺りに提げて出づ。其の時は藝妓島田、お柳が與へた珊瑚の簪をさし、羽織を着ず、着流し、のめの駒下駄。車夫一人、袱紗づつみの贈りものを持つて従ふ。)

や、舞臺に近づき、浦松の生垣つゞき、木戸を見て、洋傘をたゝんで、車夫に渡し、無言で包を受取り、柳の枝に持添へて、手眞似で、可し、と云ふ。車夫は黙つて歸る。

其のまゝ、垣根に近づき寄り、木戸越しに庭前を可懐さうに差覗く。

重太郎 (身を起して立つ時、縁前より其の姿を認む。千蝶の見つけられて、すさりながら尙ほ人待顔にイむを見て、庭下駄を突掛け、木戸の口まで行く)姉さん。

千蝶 はい。(人なつかしげに、木戸に寄る。)

重太郎 何處ぞ、お尋ねなさるのかい。

千蝶 い、え、あの然うぢやありませんわ。一寸、失禮でございますが、貴下は此方様の誰方で

在らつしやいますの？

重太郎 私かい、私は内の主人だよ。

千蝶 あら、若旦那。御様子で、大方然うでせうと存じました。……では、あの、私は、こんなもので、失禮ではございますけれど、御新造さん、あの、奥様に、一寸お目通りが願はれませんでせうか、貴下？……

重太郎 あ、誰方だか、よくおいでなすつた。……譯のない事だがね、(折悪さうに四邊を眺し) まあ、此方へ。(と言ひこける。)

千蝶 い、え、あの、垣根越、此處で澤山なんですわ。私のやうな賤しいものが伺ひましては、お悪いことを存じて居りますけれども、餘りお可憐くつて我慢ができませんものですから、お内のまはりでもと思つて參つたんです。もう、此處で結構なんです。

重太郎 や、様子を知つておいでだね。それで玄關へも廻らずに、裏を入つて來なすつたか。何とも申譯がない、私かわびる、御免なさいよ。

千蝶 あれ、何のまあ、若旦那、そんな事。勿體ないぢやありませんか。

重太郎 で、姉さんは、何誰だい、廓の朋輩衆でおあんなさるかい。

千蝶 はい、い、え。……あの、つい四五日前に、はじめてお目に懸りました。三の輪の淨閑寺で、大層御恩に成りました。……千と申しますものなんです。

重太郎 あ、其の時の姉さんか。お柳に聞いて委しく知つてる。よくおいでだ。が、……いや、最う面目次第もない、大概お察しの内曲だから、主人の私が思ふやうに容あしらひも出來ないんだ。實に何うも。(本意なく當惑さうに目を遣つて、植込から又面を出す半次を見着けて、來い、と目で云ふ。)

半次 (心得て飛んで來て、ちよんきなで耳を寄せる) へい。

重太郎 一寸。家内の様子を見て來てくんな。

半次 旦那、私も御新造さんの味方ですぜ。怪しからんもんだ、吩咐ら、ま婦め。

重太郎 馬鹿。ばつが可けりや、家内を逢はせようと云ふんだな。内へ逢ひに來た人ぢやないか。

半次 大丈夫かい。……魚軒の残を、饅ですからね。

重太郎 何だつて。

半次 うつかり食へるもんぢやねえ。(と呟いて行く。)

重太郎 姉さん、何だか、てれ隠しに、今めかしいお世辭のやうだが、淨閑寺の墓場ぢや宵闇だし、あの騒ぎで、顔どころか、脊恰好も見なかつたから、其時では勿論ないが、何處かで、以前、お前さんを見掛けて知つてるやうに思ふがね。

千蝶 え、不躰ですから、何にも申さずに居りましたが、私も貴下を、何處かでお見上げ申したやうなんですよ。

重太郎 眞個だ。……ト家内に聞いた、お前さんは赤坂だつね。

千蝶 はい。

重太郎 何だか、話は種々だが、此から、すぐ家へお歸りかい。

千蝶 い、え、赤坂の方は、客の事で些と面倒でございますから、唯今は一寸餘所に隠れて居ります。今日は、此から浅草へ参ります。そして、悪い事をしました。自動車で見ぶつなんかして、眞個に心が濟みませんから、焼跡へお詫に行つて、此方の、奥さんの、仲之町のお住居の、あとも拜んで来ようと思ふんです。

重太郎 お待ちよ。……然う言ふんで思出した。——お前さんを見掛けたのは、其の仲之町ぢやなかつたか。

千蝶 あ、一昨年の春……

重太郎 花時分。

千蝶 櫻が盛りの。

重太郎 宵の口。……京町の角を曲つた處の、おでん屋の暖簾越に、……目の覚めるやうな綺麗なのが、しどけない、媚かしい、袂も褻も風采を、微酔機嫌の投遣りで、茶碗酒を飲んで居た。

千蝶 綺麗だなんて存じませんが、世話に成ります……旦那ツてのに連れられて、飛鳥山の花見のかへり、皆で夜櫻へ浮かれ込んで、連は格子をぞめくうち、つい、酒の上のお轉婆から、あの、おでん屋へ私が一人で。

重太郎 此方も同一花見のかへるさ。彼の人ごみで連は、ばら／＼……一人で格子前をぶらつくうち、霞の掛つたおでん屋の暖簾越に、其の一枝が見えたぢやないか。提灯を提げて寄つて来た……辻占賣の年増の袖を、黒板塀へ密と曳いて、あの藝者の名、と聞いたつけ……土地のだらうと思つたからです。辻占賣は知らぬと云ふ。此方も酔つた勢だね。……おでん屋の爺とお前さんが蔭の縁臺へ並んだ中へ、ふら／＼と割込んで、戀の封の丁ど解けた、「不思議な縁」と紅筆の辻占を突附けて、一ツ願ふ、と茶碗を出す……

千蝶 私、お酌をいたしました。

重太郎 渡る世間の鬼は知らぬが、櫻の蔭に他人はない、と恍惚と成る處を、突然、四五人飛懸つて、私を路傍へ引摺出す……

千蝶 傍杖くふな、と手を搦んで、旦那が私を引立てました。

重太郎 其の時、夜櫻に灯を點けると、何處ともなしに、柳の影が映すと云つた。井筒屋の看板が、婦の姿を映して通つて——寄つて懸つて手籠めにする大勢の破落戸の手から、私を救つて

くれたのが、辻占どぼりの縁に成つて、其が、今の家内なんだよ。

千蝶 まあ！……

重太郎 お前さんとも不思議な縁だね。……後で聞くと、其藝妓の旦那と云ふのが、ごろつきに錢を握らして、私を打たしたんださうだつけ。

千蝶 え、私も、それは聞きました。では、其の時の若旦那、……まあ何うしたら可いでせう。

重太郎 亂暴をさしたのは、お前さんの知らない事さ。しかし彼の時は驚いたぜ。

千蝶 何とも申しやうがないんです。……淨閑寺で、おいらんたちの墓を荒らして、奥さんのお庇で助かつたのも、矢張り其の時の旦那なんです。最うフツツ可厭に成つて、其の人の手から離れようと、身を隠して居る處ですわ。かさね々お可懐い、奥さんに逢ひたいわ、若旦那。

重太郎 私だつて逢はせたい。お柳も嘘を逢ひたいだらう。……むすぶのかみが見えたのに……（とさみしく笑つて）半次は何うした。

半次 旦那、此處に居らあね、（と最う來て居る……）お話に夢中だから、引退つて居ましたつけ。だがね、様子を聞いて安心さ。私も何うか、をがみたいね、南無むすぶの神様。（と手を合せらる。）

重太郎 巫山戯ないで。……あちらの様子は何？……

半次 御新造はお召しかへが濟んだと思ふと、一尺三寸、（と額の前へ廂の手つきで）お嬢さんの廂の撫着にかゝんなすつた。

重太郎 まづいなあ。其奴は弱つた。（當惑する。）

千蝶 （よく、知つて）あ、もし御心配では濟みません、今日に限つたと云ふんではありません。

……又うかゞひますわ。私、若旦那。

重太郎 察しておくれ。……殊に、今日は迫着來よう、更まつた客もある。……旁々何とも。……近いうちに屹と私が、……と云つた處で、内では何うも都合が悪い、いつれ、何處か、外で逢はせる事にしよう、眞に濟まない。

半次 夜中に忍び込んで、お前さん、三人で寝ながら話したら可いぢやないかね。旦那、野暮でねえのが揃つたんだ。其のくらるな寸法はおきかせなさいな。

重太郎 大きにお世話よ。しかし餘り心残りだ。

千蝶 いゝえ、何うぞ。あの、此は眞個にお恥かしいものですが、……そして、此の柳は途中の花屋で見掛けました。……奥さんのお名のお懐しさ。それに……仲之町のおさと方がお焼けに成つた當座ですから、花も赤いものは氣におんなさいませうと、青いのを濡れたまゝお目に掛けたく存じます。松の葉のかはりです。奥さんにおあげなすつて。

重太郎 (受取りつゝ、じつと身にしみ) なよ／＼とした此の枝より、優しいお前さんの心を聞いては、むざ／＼歸す義理ぢやない。あとの面倒は、夫婦が三日、齒をくひしばつて堪へるばかり。爰へ呼ぶ。一寸、逢つて行つておくれ……まあ、入つて。

千蝶 飛んでもない、若旦那。

半次 え、入んねえ、私がついて居るうちや、生命に別條はねえからよ。

重太郎 大袈婆な事を云ふなよ。さあ、お前さん、——お柳。(と呼ぶ。)

千蝶 まあ、……貴下、(と止める。トタンにガツと自動車の音がする、ふと見遣つて吃驚!) 一寸、あれ、今表通りをお門へ留りました、自動車は?

重太郎 やあ、折も悪し、客が来たな。

千蝶 まあ……何うしませう。あれが、私の申しました、其の時の旦那ですよ。

重太郎 え、驚坂岩造が其の男か。……道理こそ!……私は唐突に打たれて知らんが、破落戸を雇つて手籠めにさした、先方は顔を知つてるから、其とは言はないが氣が咎めて、成りたけ私に遠ざかつて居たんだな。

千蝶 見附かりますと面倒です。……又、お二方が御迷惑。では、……私は。

重太郎 (黙つて頷く。)

千蝶 戀しい人に逢ひたいほど、お慕ひまをして居りますと、くれ／＼も奥さんに。

重太郎 可し、可し、難有う。喜ばせよう。——近い内に。

千蝶 後生ですわ、失禮。(と、かた／＼と駈けて行く。)

五 棒 杭

半次 何だか喧嘩にでも成りさうだ。や、難有え。……が腹が空いてちや、いざと云ふ時役に立たねえ。茶漬でカツ込め。(とひよいと行く。)

千蝶は丁度花道の真中あたり、迎ひに来た車夫とはツたり。で、ものも言はず、洋傘を引手繰つて、呆氣にとられる車夫に構はず、姿をかくすやうに舞臺の方へ。腕をはずんでポンと開く、と同時に……半次が、——岩造の意を體し、千蝶を見定めむため、自動車から突如庭へ廻つて侵入したる木又氣三郎とドンと打つかる。……氣三郎、此の時寫眞器械を携帶す。

半次 え、氣を附けろい、棒杭め。

氣三 や、棒杭は殿しいぞ!

半次 すき腹だ、まだ喧嘩は出来ねえ。(と入る。)

此の一たて、と相引いて、千蝶は、車夫を手眞似で押遣りながら、洋傘を横に其ま、揚幕へ。

重太郎 (立直つて目迎へる。)

氣三 (我を忘れて、木戸から千蝶を追はんとする身振をす。)

重太郎 あゝ、通抜けは不可ませんな。

氣三 (心付き) は、これは、失禮。……唯今の、唯今の婦人は、あれは何です。

重太郎 何ですか……こんな横町の、もひとつ裏路を胡亂ついて、通りがかりに、淺草の觀音様

へは何う参りますつて聞いたんですから、多分、田舎ものでございませうよ。

氣三 はあ、成程。(ときよとんとして居る。)

重太郎 一體、貴下は誰方です。

氣三 え……こりや何うも失禮しました。僕は恚う云ふもので、(と名札を出して)——鷺坂社長

と同伴をして参つたものです。

重太郎 鷺坂さんと御一所に。其は、……輕々しい、こんな處へ、何うもお出迎ひもいたしませ

んで。

氣三 否、つい、其の、……貴下は御主人。……榎子さんの御令兄、——お妹御には鷺坂氏の邸

で、度々。御隠居にも御懇意に願ふのですが、貴下には掛違ひまして、はあ。(額の汗を拭く。)

重太郎 鷺坂さんもお見えですか、つい知らないで、飛んだ失禮を。さあ、まあ、貴下、此方へ。

岩造 (襖の内より) 木又君、君は、まあ、御免蒙つて其處に居給へ。(と云ひながら正面へぬい

と立はだかり) 直ぐに寫眞を撮るとせうで。……いや、(と鷹揚にうしろを見向く。……其

處に横刀自あり) 更らずと、こゝで御挨拶ぢや。其がお心安だてで可えですわ。

重太郎 (座敷に歸りて、待迎ふ。此より前、柳の枝は、石の手水鉢にさして置く。刀自に續い

て、盛装して榎子。臺にのせたる二組の花環を据ゑて出づ。)

お柳 (あとにつき、皆座に直る。)

六 緋無垢

岩造 はッはッはッはッ、づか……づか……奥へ濫に遣つて來ました。

重太郎 御挨拶痛入ります……お出迎ひもいたしませんで。

岩造 奥さんには、初對面の御挨拶を、謹んで、な、(とお柳に目づかひ、淨閑寺のいきさつを打

消す料簡) え、念入りに遣つたです。……はッはッはッ。(と高笑ひ) 御主人、君とは既に

別懇ぢや、内曲が可えです。私は細節に係はらない事を以て得意とする。すべて洒々落々とし

て居る。野人禮に倣はずかい、はッはッはッ。

榎子 お兄様、お客様が、お婆様に、(と花環を見せる。)

重太郎 眞に何うも……(とばかり。)

岩造 御老人にはお氣に入るか何うあらうか思つたですが、外の老害とは違ふ。……浦松家に斯の如き財産を造られた功勞者で、且世の所謂隠居でない。私なども提携して、壯に新事業を起し、國家のために殖産工業の大道を、以來自動車で駈廻るんぢや。其の功を讃へ、其の壽を祝するのだ。眞綿や若布では不可んですでな。

榎刀自 (にこ〜ほたく〜して) お心を籠められた、や、何と云ふ、見事なものぢやよ。

榎子 立派だわ、ねえ、お兄様。

重太郎 結構さね。

榎刀自 私ばかりでない、浦松家の名譽ぢや、のや、(とお柳を見向く。)

お柳 (うっかりして居る。)

榎刀自 や、(と喚いて) 柳や。

お柳 はい。

榎刀自 名譽ぢやらうが。

お柳 如何なものでございますか。

重太郎 (氣を揉んで) 内の譽だ、とおつしやるんぢやないか。

お柳 おめでたう存じます。

榎子 呆れるわよう、無教育で。(と座がしらける。)

氣三 (其の間に寫眞器械を据着けて、……此の時飛石を縁に進む) 社長、如何ですか……御都合で御撮影なさいませんかと暗く成ります。尤も、夜分でも差支へありませんが。

岩造 いや、直ぐが可え。時に、晚餐の後ぢやと、酔うて姿勢が取れんと不可ん、はッはッ。何か、豫め馳走に成つて酔ふ氣で居る。……御隠居、私は此の通りぢや。遠慮せん、遠慮はないです。酒々落々として居る、はッはッはッ。分けて、奥さんには、はじめてお目に掛る、澤山のんで貫はん成らんで、旁々酒の前が可えですわ。……處で、誰方も支度なさつて、揃うた處で、御隠居を眞中へ、……榎子さん。

榎子 は、(と、しなをする。)

岩造 貴女が、左へ。奥さん。

お柳 はい。

岩造 貴女が右へ立つて、其の花環を左右から御老人へ捧げて貰ふです、可えかね。

お柳 (もの言はず。)

重太郎 分つたらう、ね。(屹と目くばせする。)

お柳 畏りました、が、不束でございますから。

榎刀自 柳や、不束も何も要らぬがい。

お柳 は……

岩造 可えですな。其のつもりで二個進呈したです。——さ、それでは御隠居。

榎刀自 重太郎、まだ、なう、鷺坂さんがお心を籠められて、や、分けて祝うて下された品がある。……これは、の、取つておきぢや。酒の席で開いて見せて、皆に、あつと云はせう思うたが、寫眞取る言はる、で、此から、着かへて見せるがい。……あは、つい、嬉しさに云うてしまつた、衣類ぢや、や、衣るものぢや。

岩造 つい言うて了うたですか。無邪氣、無邪氣。はッはッはッ。洒々落々として居らる。私と氣が合ひますぞ。……さ、早くお見せ。四邊まばゆき扮装は、爽なりける(と節)はッはッはッ、酔はぬ前から此の通り、不遠慮な處が可え、洒々落々として居る、はッはッはッ。

榎刀自 一寸御免さい。(と座を立つ。)

お柳 おめしかへ?……お手つたひ申しませう。(つゞいて立つ。)

榎刀自 (じろりと見て) 儀式ぢや、貴女のやうな粹な着方は埒あかん。悪くは言はぬぞ。(と面)

お柳 (しをれる。)

重太郎 (打撃ぐ。)

岩造 や、それに何です。……晚餐が済んだら、腹こなし運動がてらぢや。皆で揃うて、自動車で、私が會社へ出向くとするです。……一家族揃うてですわい。はッはッはッ。まだ榎子さんと結婚もせんが、一家族、他人交ぜず……はッはッはッ、洒々落々として居る。いや、奥さん、是非自動車にのせてあぐる。

お柳 私、澤山です。階子乗の方が結構。(すつきり云ふ。)

岩造 (苦い顔で大にてれ) は、はあ、血の道に障るかな、(と嘲笑つて) 御隠居、支度が長いな。贈ぬしの私が後見せうか。(と座を退く。)

重太郎 お柳。

お柳 此の花環を持つ。

重太郎 まあ……あ、云ひなさるもんだから。……

お柳 自動車で出掛けるの。

重太郎 可いぢやないか、乗つたつて？

お柳 私、可厭ですわ。(とぶるくと肩を揺つて、駄々を捏ねる、仇氣のない風采。)

重太郎 何もつきあひではないか。……

お柳 私 知らない。(とツンとして、斜かひにツイと立ち、縁の柱に立ち姿。前髪をつけて、いやいやをする。)

重太郎 (熟と案じ) 然うだ……一寸見せるものがある……(と肩に手を掛けて、拗ねるを抱くやうに振向かせ、下なる手水鉢の柳を見せる) 内の妹は妹でなくても、姉妹は世間にある。……今日は逢はせる間がなかつた。此の間話しの千蝶が、忍んで来て、お前に此を寄越したんだ。お柳、お前の名ぢやないか。何事も柔順に、柔順に、な、逆らうな、風に靡けよ、雪に折れるな。(と氣を籠めて云ふ。)

お柳 (引向けられる、と二人の顔、柳ながら手水鉢の水に映る。じつと視めて) 嬉しい人もあるわねえ。ぢや、おとなしくしますからね。此の水に映つたまゝで、お前さん、莞爾と、笑つて見せて下さいな。

重太郎 又かい。

お柳 だつて、先刻と今と、たつた二度ぢやありませんか。苛められるのは、のべつたわ。

重太郎 む、困つたな、さあ、(切なげに莞爾する。)

お柳 まあ……可愛い。

氣三郎 (人も忘れた二人の状に、身の置場所なく、植込をうろたへまはり、一所に顔を映したあたりで、やり切れなくなつて、据ゑ置く寫眞器の蔽を、すつぽりと被りたるが、我慢ならず、ぬつと長い顔を出す。)

重太郎 (衝とのいて) 羽織を持つて来な。

お柳 あい。(と女房ぶりに軽く駈込む。)

櫻子 (引きちがへに、今度は、白の被衣を被けつゝ、出づ。)

重太郎 (呆氣に取られて) 何だい、それは？

櫻子 あら、お兄様。いつか、お爺様の時は、お婆様が、お父様の時は、私が、おとむらひに被つたぢやない。祝儀と、不祝儀のお儀式に使ふんですつて、お婆様が取つておきよ。……故郷の風俗ですとさ、高尚ねえ。

重太郎 高尚だか何だか知らないが。まだ一枚手に持つて居る、それは何だい。

櫻子 同じ被衣よ……お姉様が被けるんだわ。

重太郎 え、お柳が、(と眉を擧めて) そりや堪忍してお遣り。似合ないから。

榎子 お兄様、貴兄がそれだから我儘する事よ。お婆様が然う言つたわ。お柳は可厭だと言ふだらうが、何か言つたら、淨閑寺の卵塔で、引手茶屋の眞似をしたのは誰だつて、お言ひツて……

重太郎 (うつむく。)

お柳 (いそぐ出ながら) まあ、(榎子の風を見て云つたきり、うしろから羽織をさせる。)

重太郎 (力なげに紐を結ぶ。)

榎子 おや、お姉様が、人の見る前で、お兄様の肩に掴まるわよう。(と舌たるい聲を出す。)

お柳 (はつと手を拂つて) まあ、お人の悪い。お榎さん……

榎子 又ですか、お榎さんて、有平糖ぢやない事よ。

重太郎 お柳、其を着るんだ。榎子の通りに。

榎子 さあ、着て頂戴。(突出す。)

お柳 (受取つて、しなよく、柔順にはらりと被ぐ……)

榎子 さあ、お持なさい。(とさしづする。)

お柳 (花環を持つて立つ。)

榎子 木又さん、飛んだ寫眞屋さんで、お待遠ねえ。

氣三 何うもお見惚れ申すんですよ。富士の背景があたりたいですな。

此の時、女中二人、庭から廻つて、沓脱へ赤い端緒の雪駄を、縁側へ掛けて、朱塗りの杖を立掛け、一人は二三足庭下駄をならべて引さがる。

岩造 皆さん、支度よくば、庭へ、庭へ。(と先に立つて庭へ出る。)

重太郎 お柳、榎子續いて庭に出る。榎刀自、緋の小袖、緋綸子の長襦袢、緋綸子の被布、緋の總、赤足袋、眞赤な頭巾、皺面に白粉を塗つて、座敷の眞中へ顯れる。

岩造 何うですか。(とずらりと見渡す。)

榎子 まあ、天降つた方のやうね。

重太郎 緋緋ですな。お婆さん……

榎刀自 心ばかりは若武者ぢやがの、(つかく)と達者に進み、杖を取つて、立身に縁側へドンと突いて)座敷から杖御免と云ふのぢやよ。(とニヤ〜笑ふ。)

榎子 お姉様、お穿ものを。(と氣をつける。)

お柳 (悄れて、うつむいて居たるが) はい。(と心づき何心なく沓脱の上に雪駄を据ゑ直す。)

榎刀自 (無遠慮に赤足袋を、ぬいと突出す。足を取つて緒をはめようとする。華奢な其の白い手を、意地悪く杖の先で突き拂ふ。)

重太郎 (面を背く。)

お柳 (拂はれて、沓脱に手を交らし、怨めしさうに、横刀自をはじめて仰いで、眞赤な其の服装を一目見るや、じり／＼とすすつて、すつくと立つ。被衣の中に、影を籠めて、うつくしき眉キリ、と成る。)

途端に、ジャン、と急な半鐘。

皆、空を見る。

氣三 一ツ半鐘です、大丈夫。

お柳 (傍目も觸らず……屹と横刀自を見る／＼、顔の色かはつて、臺のまゝ、花環をばったり落す。)

櫻子 何をなさるのよ。(と強く云ふ。)

お柳 (耳にも入れず、眉に掛る被衣のはしを、犇と取つて、引か、げつ、横刀自を凝視めて、すつくりとイみ居る。半鐘やむ。)

横刀自 睨むかいの、私を睨むかいの。や、柳や。(荒く云ふ。)

お柳 (と心付き、落した花環を見て、はつとする。)

横刀自 あ、苦界ぢや。お主はさて／＼根性の拗けた人ぞい。聞かされ、や、(と云つて、頭を

ふつて四邊を睨め) 今見れば、其處な柳の葉の影がな、あだ白い手に映つたぢやろ。……毛蟲が這ふと見えたでの。や、可愛や、氣味が悪からうと思つたが、踞んで下に居る人ぢや。老年の身體はきかず、さかとんぼ打つて手で退けて遣らう法もないで、杖の尖で、や、此の杖の尖で拂うた。其に何ぢやぞい。お主が、其のまつすぐに通つた鼻筋には、肖すところいへ肖すところいへ、くねり曲つた根性で、ソツと當ればグワツと騒いで、腕脚を折つたほどに睨まさる。此方は然うは思はぬぞ。……あ、苦界ぢや、可厭やの、可厭やの。(と頭をふり／＼。)

重太郎 (其のうち、花環を拾つて自分で持ちつ、) お婆様、然うまでおつしやるものではありませぬ。餘りお服装が目覺しいので、うっかり見惚れたのでございませう。此奴あ小兒のやうに赤いものが好きなんですから。——さあ、お柳しつかりしなくツちや不可いぢやないか。(と花を取れとて差寄する。)

岩造 (葉巻をばくり／＼。)

お柳 (少時ためらひながら、あらたまつて) お婆様、皆さん、何うぞ、此のお役ばかりは、お許しなすつて下さいまし。

横刀自 何ぢや。花環の役が、勤まらぬ、や、柳や。……

岩造 何故ですかい。

榎子 何う云ふわけ、お姉様。

重太郎 浮かりした事を云ふんぢやないよ。

お柳 (重太郎に) 此の間もお話して、お前さん……あの、あなたも知つていらつしやるわね。井筒屋の姉が、夜中に、はゞかりの中から、眞赤な衣服を着た顔の白い婆々を視て、其が廂合を出て行く時、掌で火を吹きながら、振向いて莞爾したのを、一目見てから病氣に成つて、焼わね。——姉にも井筒屋にも、故郷にも、それぢや、私の仇敵ぢやありませんか。勿體ないやうですけど、おみなりが、眞赤です……花環とやらを捧げるのは、其の人の繁昌を祝つて、手柄を讃めるんだと云ふんですもの。私……(と聲うるみ) 家も棄てました。姉も故郷も棄てました。けれども、あなた、恩愛こそあれ、義理こそあれ、何の怨みもないものを。同じ姿の、同じ眞赤な、お婆様の背後に立つて、現在、姉の妹が、仲之町で育つたものが、花環を持つのは辛うござんす。……踏まれても、打たれても、あなたの傍に居るんです。どんな事も厭はない。厭やしない、此ばかりは勘辨して、何うぞお察し下さいまし。

七 紫

榎刀自 や! 柳や、まあ、主ア。(づか〜と庭へ下り、じろりと睨んで岩造に目を返し) 驚坂様、常、不斷、此の通りぢや、と思つてくんされ。何と、何うぢやぞい。

岩造 こりや、方外な迷信ぢや。

榎子 まあ、呆れた、まあ、呆れた。……一寸……呆れるわねえ。

榎刀自 重太郎、黙つて居るかいの、黙つて居るかいの。……今言はさつたを聞かぬかいの。聞いて黙つて居るかいの。あ、情ない。一生涯、藏の鎌の外には曲つたもの一ツ身につけぬ老寄が、嫁のお庇で、鬼に成つた、魔に成つたぞ。後生のほど可恐しい、身ぶるへがする、怖毛が立つ。前世の仇と云ふなれば、死ねかしと思ふまでも、死んだあとでは棄念佛も唱へるに、私は今の一言で、無限地獄へおちるがいや。や、もんどり打つておちるがいや、淺ましい。(と、わあ、と泣く。)

重太郎 お婆様、そんな、あなた、そんな事が。(身悶えして) お柳、馬鹿な事を、馬鹿な事を云つちや不可ん。お客もおいでだ。さあ、優しく、此を持って、そしておともして寫眞を願へ、よ。

お柳 (かぶりを振る。)

重太郎 分つたらう、それ。(と切なさうに莞爾して見せる。)

お柳 (顔を背ける。)

岩造 強情ぢやね。

榎子 とに角、花環をお持ちなさい、でないとお婆様を悪魔にした失禮な言が消えないわ。

榎刀自 よう云うた。や、柳や。……榎子が云ふ通り。とにかく、其の花環を、私の前に捧げさつしやれ。や、柳や、持たぬか、さ、持たぬかいや。

お柳 (兩の肩で息をせきつ、) 御免なすつて下さいまし。

榎刀自 出て失せう、出をれ。(と杖をドンと突く。)

重太郎 一寸、お待ち下さい、お婆様。さすがに、此も一年半の奉公人とは違ひます。……

條、いひつけを肯かないわで、直ぐに離縁も出来ますまい。……又御存じの通り、家も焼けて、

實家も絶えて、親類と云つてもないのですから。……少時……少時御料簡を願ひます、いつれ、

お言は背かせません。……失禮だ、お柳、(言強く) 此處に居ては御機嫌に逆らう、彼方へ行け。

女中部屋、納屋の隅にでも引込んで。

お柳 はい。(とツ、と行きかける。)

榎刀自 や、柳や。……

お柳 (立留る。)

榎刀自 私が許さぬ、浦松家の先祖が許さぬ。私の言葉を開かぬとなれば、庭でさへ、一足も疊

の上は踏ませぬがい。何うあれ花環持て、汝! 可厭となれば出て失せ、出て失せんかい。

榎子 お婆様は慈善家ね。吉原を焼いて、人を殺した、赤い魔だつて言はれながら、たゞ許す事

はないわ。一旦花環を持たせて、降参させた上で、あの、其の上で出すが可いわ……私が持た

せる事よ。一所に侮辱されたんだから、此のまんまぢや、お婆様が何を云つても、私が驚坂さ

んに濟まないわ。さあ、お持ちなさいよ、さあ、お持ちなさいよ。(とせり詰め、すりつけ、お

柳のすさるを、縁側におしつける。)

お柳 (片手に其花環の眞中を袴と握るや、と倒る、やうに縁側へ沓脱をかけて小腰を落し) え

え! 鬱陶しいねえ。……(と片手で被衣をかなぐり棄て、榎子をトンと突離す) 口が臭い、

寄んなさんな。私の身體へ觸りたかつたら、井戸の水でも浴びておいで。(と花環を見て) どな

たか御最良とござりまして、眞赤な隠居丈へ下さるが、聞いて呆れるよ。(とはらりと投出す。)

岩造 何をするかい! (睨んで詰寄る。)

お柳 尼なら數珠を切る處を、お柳ちゃん江戸兒だから、(おくれ毛を搔上げながら) 一寸たん

かを切つたのさ。……可愛い男の云ふ事だつて、可厭な事なら可厭なんだよ。……勿體ないや

うだけれど、世間を忍ぶあひゞきにはお月様さへ嫌ふぢやないか。眞赤なきものの婆さんは、

口で言つても悚然とする。……私が一言、可厭だと言へば、油蟲もげぢくも廓中に根絶えが

したのさ。……其のお柳ちゃんが手を支いて、お免しなさい御免なさい、堪忍してと言ふものを、背かれないうなら何うともおしなね。……さあ、して御覽な。此の土地こそ今言つた、油蟲やげぢくくの土足に掛けて踏まれても、柳に、花に、紫の、隅田川の水が絶えないで、白魚の目の黒い内は、江戸の女はお前はんたちの好き勝手にやならないから、まあ、然う思つておこなはいよ。

重太郎 (飛か、り、お柳の頸髪を取つて、座敷へ引倒し、二ツ三ツ打擲する。)

岩造 夫婦喧嘩を、庭へ立つて見物も成らんですが。(一同、氣三郎とともに座敷へ入つて取巻き見る。)

お柳 (打たれたあとを突離されて、くの字に、しなやかに莞爾して) まあ、嬉しい、男は然うして打つものよ。お前さんは、優し過ぎて、旦那には可くつても、いろには些と張合がなかつたよ。……さあ、其の氣で一所に出ませうよ。一所に、……私、此處には居られないんだから。

重太郎 愚圖々々言はずと、早く出る……

お柳 出ろつて、(と驚いた顔して) ああ、私ばかり。そして、お前さんは?

重太郎 俺は主人だ、何を云ふ。

お柳 一寸……(と熟と顔を見て) 家を出るとおつしやるのは、あなたと別れる事なんですか。

重太郎 重太郎 (と横を向く。)

お柳 まあ。(呆れて) そんな……そんな約束ぢやないんですもの、(とはつと泣く) そんなら持ちます、花環を持ちます……堪忍して下さいましな。

横刀自 賣女が、今さら何を吐す。片時も置かれぬ、すぐに出され。……荷もつは後で始末する。

内へ入れるも汚らはしけれど、教諭いて、其の性根直して取らしよ、と意見のために持つて居つた。……宿なしが、家を出たら、のたれ死ぢやる。冥土の路の燈火にしされ。(と云ひく) 戸棚から井筒屋の箱提灯を出して、バツタリ投げる。)

お柳 (顔を上げ、袖に引取り、膝を直す) 重さん、私ほどの女を持つて、何が不足で、家が、蔵が惜いんです?……あ、町の人の氣は然うかねえ。(とみかへりながら、なごり惜さうに、重太郎を見つ、出で、庭下駄をかなぐり穿く時、手水鉢の柳を見る) あ、私の名だ。こゝへ置いて行くのは可厭、(と濡れたを其のまゝ、人形のやうに仇氣なく胸へ抱く……) お、可愛い。

(木戸を出て、行きかけつゝ、忘れたやうに手に提げたる、其の提灯に柳の枝しだけかゝる——上野の鐘。垣根の空に、三日月出づ。)

お柳 (仰いで振り返る。)

重太郎 (縁側に立つて見送る、顔を合せる。)

横刀自 鹽まけや、櫛子。座敷を替へようで。——え、未練な男ぢや！ 浦松家を忘れたか。
(ぐいと手を引き) さ、鷲坂様——あんたも来さい。(と氣三郎と共に入る。)

お柳 (ばったり躓いて、ト足許をじつと見て、庭下駄を脱いで、鼻緒を掴みながら、ぐいと片袂を上げると一所に) 金の泥が附て居ら。(ボンと庭下駄を投出し、つかくと花道へ駈けて入る。)

(お柳が庭下駄を投ぐる時と、其の重太郎の奥に入ると同時なるべし。)

半次 (今度は、垣根外の隅から出で、木戸まで来る。) 遣つたな、姊はん。(ハタと手を拍ち、自分の穿いた雪駄を見て、脱いで、手に持ち) へむ、金の泥がついて居ら。(と投げようとして) こいつは短氣だ、己がのだ。(と帯へ挟む。)

八 借半纏

重太郎 (此の時引返して、煩悶しつゝ出で、手にせる茶碗酒をぐい、と飲んで、縁側へついと立ち、木戸越に半次を見て、決意の色あり) おい。(と手招く。)

半次 (傍へ寄る。)

重太郎 (手早く帯を解き、小袖、羽織を脱ぎ、帯袴に変わる。)

半次 何をすするんだい、若旦那。

重太郎 今日つから半纏着だ。かはりは此を遣らあ。半次、脱ぎな。(とはだしで下りて、半次の半纏を脱がせて着る。)

半次 (呆氣に取られ、やがて) 遣つたな。——(又拍手す。)

櫛子 (出で) あら、ま、お兄様、あら、ま。

半次 置いてつちや損だ。質ぐさだ。(と羽織小袖を帯ぐるみ背に引掛ける。)

重太郎 (櫛子を見たのみ、ものをも言はず、半次と木戸を出づ。)

櫛子 あら、お兄様。(と駈寄るトタンに外からハタと木戸をしめる。)

重太郎 (ぐい、と大きく伸をうつて) 家だの、藏だの、浦松家だの、チョツ煩い。あ、一時に肩が凝つた。半次や。

半次 へい。

重太郎 歩行きながら、敲いてくんねえ。(と花道へ、すたく。)

半次 (うしろから、肩を叩いて歩行きながら) ……毎晩、お柳ちゃんに叩かせたらうね。

重太郎 違つてら。餘り苦勞をさせるから、私の方で敲いて遣つたよ。

半次 こいつあ、やり切れねえ。(と入る。)

昴す)板圍さへまだ揃はず……土藏にたてた障子から、墓所のやうな灯の色が、黒い霞に映る
ばツかり。……昔は知らず、生れてから、今月の今夜まで、夢にだつても覺えのない、廓は暗
闇に成つたねえ。(とうつかりする、手を亡つて、猫ばつたり落つ)あれ、(と覗いて)死んだ
んだよ、……まあ……死んだんだよ、まあ。……死んだんだ。駒、何うした、駒、駒や。可哀
さうに、……可哀さうに。……此の骨ばかり皮ばかりの様子ぢや、身體は疾くに死んで居て、
魂ばかりが、私たちを待焦れて居たんだわねえ。——姉さんも亡く成つたよ、駒や、堪忍し
ておくれ。私が居たら、こんなに灰にはしなかつた。(面を蔽ひ落涙する。)

二筒井筒

源太 (刺子にて、手鉤を三尺帯。鐵棒をつき、弓張を提げて出づ。お柳の隣地、其の住居の焼
けたる跡を、無言にて徘徊し、追懷の念に堪へざる如くなりけるが、鐵棒をドンとつく)ま、
よ勝手にしやがれ。(言ひ棄てて立去りざまに、通過ぎにお柳の姿を見つけ、行かんとして、立
停まり、振返る。)

お柳 (顔を上げる。)

源太 (透かして)や、お柳ちゃん。

お柳 かしら。

源太 お柳ちゃんだな、何うしたい、まあ。(と懐しさうに寄る。)

お柳 何うにも、お前、此の體だわ、察しておくれな。

源太 跣足か、跣足か。威勢が可いな。

お柳 然うお前、人間が威勢の可いことばかりなものかね。……

源太 焼ぼこりと言はあ、構ふもんか。や、泣いてたな。氣の弱い。何だ、お柳ちゃんのやうで
もねえ。

お柳 焼けたのは構はないけれど、姉さんが亡く成つた!……まあ、見ておくれ、此のいたづら
ぢや、隣同士で、お前とも喧嘩をしたツけ。……駒がこんなに成つ了つたよ。

源太 (弓張をさしつけて)やあ、たうとういきついたな……可哀相に、此ン畜生はね、あの、
どえらい火が、ばつと一ツ津波のやうに煽つたんで、氣が顛倒したと見えるんだ。迷子に成つ
て胡亂つくから——前に、お前が居る時分にや、大將軍の犬ぢやねえが、井筒屋のお姫様御籠
愛と云ふ首ツ玉を看板に、大な面あしやがつて、おふくろがお前、なけなしの小遣をはずんで
大事にして置く、夕顔の鉢植をひつくりかへす、小鳥の籠へは悪戯れつくし、癩に障るから、
お前、内證で、時々、コツンと其の、な……

お柳 あら、邪険な、打つたのかい。

源太 む、……其の打たう、と何だ、思つたんだ。思つた事もあるけれど、迷子に成つた此の體よ。可哀相でならねえから、チヨチヨ……なんてね、姿を見せえすりや呼んだッけ。人を見ると怯えて遁げらあ、矢の如く、ぴよんと飛ぶのよ。

お柳 不斷、邪険にするからさ。いつかなんざ、背戸へまた、びを焚いて、手遊の空氣銃で狙つて居た人ぢやないか。そんな料簡だから、御覽なね、消口の一箇處も取れないで、筒口を引張つて遁げたんです。

源太 こりや殿しい、靦面に猫の祟だ。いや、串戯はよして、あんなに可愛がつてた、お前、伊勢又の遣手婆さんが、此猫のために故々寮から出て来たけれど、其れだつて寄つかねえ、……人さへ見りや遁げやあがる。しまひにや晝間明い内は影を隠して、夜に成ると、ぴか／＼と目を光らして顯れちや、公園の池へか、つて、お前、緋鯉、金魚をして遣つたツさ。其だつて、可加減に、片身焦げてる奴は横衝へにもしたらうが、活残つた徒は、泳いで遁げるから堪らねえ。飢死をしたんだ、此奴あ。可哀相に、お柳ちゃんと並べて見りや、駒も他人とは思はねえ。

お柳 あ、最う止しておくれ……言ふだけ未練の種だから。

源太 然う来なくツちや不可ねえ。……然うだ。言ふだけ未練のたねだ。……で、何か、焼あつて見ぶつか。何時来た。

お柳 今しがた……見に来たんぢやない、私、歸つて来たんだわ。

源太 かへつて来た？ 何處へ。

お柳 内へさ。

源太 うち……？ 内はねえぢやねえか。

お柳 憚りさま、何うせ私は宿なしさ。……かしら、臺所へでも使つておくれな。

源太 おつしやるもんだぜ。臺所は勿體ねえ、縁起棚と云つた處で、私も矢張り宿なしか。お柳ちゃんの家は根岸ぢやねえか。

お柳 根岸も内ぢやないんです。(きつぱり云ふ。)

源太 あ、お前の其の様子ぢや、嫁入りさきを追ん出たな。

お柳 い、え、追出されて来たんです……恥しいねえ。(と、さしうつむく。)

源太 何だ、追出された、追出したか、罰の當つた奴等ぢやねえか。恚う、お柳ちゃん……癩に障る事あねえか。有るだらう、む、有る、……屹とあら。有るか、(と摺寄り)有るなら言ひねえ。江戸中の加勢を私一人で引受けるぜ。

お柳 (黙つて、かぶりを振りつ、) 何にも言はない。……口惜い事も、癩な事も、手足を斬ら

れるやうな事も、惚れた男にまけて遣つたよ。今夜ツから井筒屋の、これ、見ておくれ。(と箱提灯をツト提げて) もとの娘……も壓が強い、送りの姉やに成りましたよ。

源太 眞個か、おい。

お柳 何の洒落に、嘘なんか吐くものかね。

源太 まつたくだな!

お柳 あい、……また喧嘩をしようねえ。

源太 む、よく出されて来た、お柳ちゃん、お前、よく歸つて来てくれた。(とはらりと落涙し) こんな嬉しい事はねえ。……眞個のこつたが、私あ泣いた覺はねえぜ。お前も知つてら、實はねえ、消防夫とも言はれるものが、お前、手前の内の焼跡の灰なぞ搔いちゃ見つともねえから、一騒ぎ鎮つて、恚うして人ツ子の居ねえ處を狙つて来たのは——随分不孝をしたつけが死んだ、ちやんが遺言に、源太、位牌だけは見てくんねえ、ごとく痰の中で言やがつた。火事だ、と云ふと飛出して、三日おふくろの顔も見ねえで、其のまんまに成つたから、今夜、お前、密と来て、灰の中を、ちやんの位牌を探したのよ。入齒を落したほどの砂利もねえ。え、源太ツて小兒を忘れねえなら、手前の戒名をかけた位牌ぐらゐる、火の中を、一人で飛出しやあがれば可いものを、と口惜く成つてな。……其にせえ、小腹は立つても泣かなかつた。が、お

前が歸つて来たと云ふんで、嬉しくつて涙が出る。……私あ、鼻端はツかりで、弱蟲だつてな、お柳ちゃん。……最う、何處へも行かないでくんねえよ。

お柳 あい、(と齊しく打泣いて) 私も矢張り弱蟲かねえ。

源太 (涙を拂つて) あ、つい我知らず……何だ馬鹿な面な、太郎稻荷に笑はれら。さあ、もう、餘所へ行かねえと云ふ誓文に。……そら、何だ、……町の奴等が手を握らあ。一寸、遣つて見たくもあるがね。ありや氣障だから、一ツ指切を遣つてくんねえ。

お柳 盆まで喧嘩をしない事。……(と指をからむ。)

源太 些と氣障だな、は、(笑つて) 處で、今夜、何處へ行く。……宿なしたツて平氣でも居られめえ。私ん許は、野郎のお芋の煮ッころばし、押くら饅頭と云ふ形だ。美いちやんも、玉ちやんも、立退いてる處は澤山遠かねえ。其處へでも行くなら案内しようぜ。其とも何處か、心當りがありや出掛けねえ。

お柳 かしら、一寸蠟燭を貸しとくれな。

源太 おい、何うする。(と出す。)

お柳 (箱提灯に灯を入れて、置直す。……) 根岸のおまじなひ横町から、入谷を抜けて、此處へ来るまで、途中人の顔も見ないほど、考へたよ。私が恚うして歸つた上に、御覽、井筒屋の看

板に明を入れた……私あ渾名は燕でも、姉妹分にもお友達にも餘所の塹は借りやしない。死んだ姉への義理もある……井筒屋の土に芽を萌して、散つても柳に成るつもり。……風も吹け、雲も降れ、袖は濡れても、袂は裂けても、此處を一寸でも動きやしないよ。

源太 うむ。

お柳 かしら。

源太 お柳ちゃん。

お柳 さあ、看板と一ツ所に、井筒屋のお柳が身體を張つた。……千兩箱を車に積んで、一六勝負に出ておいでと……かしら、後生だから頼まれて、金を貸すものを引張つて来ておくれ。

源太 可、面白い！ 日本半分あり金を攫つて了へ。吉原八丁八百軒、お前の氣象で建直るぜ。夜中に金貸はとに角だ。……此から野郎どもを連れて来て、お前のまはりへ高張弓張、三階の屋臺を築いて馬鹿囃子でおかぐらよ。此奴を聞いたら廊中が立退さきから今夜中に引返して、星天井の花盛り、小袖幕の板圍ひで、霞の屋根が葺けようぜ。景氣は直つた、面白え。慥う、お柳ちゃん、金馬簾の旗印を地面へ置くと云ふ法はあるめえ。待てよ、九尺柄に引掛けて、筑波の上へ押立てる。(と鐵棒の尖へ結んで立てる。)

お柳 嬉しいねえ、大黒柱が立つたやうだよ。

源太 氣丈夫に凭掛つて待つて居ねえ。おや私あ、此から行つて、勢揃ひに及んでな、あはよくば今夜中にも、金方を背負引いて來ら。

お柳 あ、濟まないが、頼みました。

源太 チヤラ〜、チヤラ〜、わけなしだ。(と仕方をする。)

お柳 おや、憚り様だわね。

源太 やあ、久しぶりでお柳ちゃん的笑顔を見た。が、待ちねえ、笑ひ事ぢやねえ。……お前、意地張で、野宿は可いが、此の通の寂滅爲樂だ。一人ぼつちに成つた時、どんな奴が入込んで、惡巫山戯をしねえとも限らねえ。

お柳 もう此處へ歸つたら、私、可恐いものはないもの。

源太 我慢を云ひなさんな、心は弱い癖に。……それ、(手鉤を抜いて渡す)守刀に持つて居ねえ。源太の手鉤だ、土地ぢや此でも魔除に成らあ。そしてね、おい、夜あかしの度胸だらうが、夜露に冷えちや堪るめえ、此奴を着て居ねえ。(と刺繡半纏をぬぐ。)

お柳 まあ、かしら、其をお脱ぎだと身すぼらしい。

源太 何、お前、前座の羽織だ、一寸〜脱があね。まあさ、可いつて事よ……心は弱い癖に。(と自分が着せかけて)やあ、堪らなく似合つたぜ。(と密と肩を抱く。)

お柳 (熟として) 確乎お抱きよ。

源太 いんや、煩惱が起ると成らねえ。一體私あ、生命がけで

お柳 え？

源太 未練はなしさ、決して口説かねえ。

お柳 ためして御覽なさいなね。

源太 田圃の太郎に笑はれら。

お柳 近所をお前通つたら、太郎様に御不沙汰をいたしました、済みません、と言託かつて下さいな。

源太 皆まで言ふめえ、心得た。(とずつと出て、猫の死骸にばつたり) おつと、南無阿彌陀……

あとで若いものに片づけさせよう。いづれ姉さんの墓の傍だらうが、此奴とお前、睨みつこでも居られめえ。待ちな、可い處がある、隠して置かう。(と提げて、崩れ落ちた其の土藏、斜めに見ゆる戸口に寄る) ——行倒れたる猫の死骸、一夜の宿を御無心申す。(と差込んで、土藏の中を屹と透かし) 誰か、誰か中に居なさるか。

お柳 一寸、上總屋さんで來てるの？

源太 何だ、隅つこが薄赤く、ぼつとしたつけ。……壁の崩で遠灯が射した奴さ。こんな雨露も

凌げねえ中に、誰が。……お前ぢやあるめえし……だから、お前の、其意氣張を手本にしたら、廓が昔に返ると云ふんだ。

お柳 難有う、御最辰分に精々早くさ。

源太 チヤラ〜チヤラ〜、歸りに雪駄を買つて來るぜ、お柳ちゃん、泣かずに居ねえ。(とすたすた、花道の際にて一寸振向く)

三 緋手毬

赤魔姥 (破れたる土藏の中より、猫の死骸を斂手に掴み、戸口に半身を顯し、源太を見送る。顔を合す時、其の猫にて面を蔽ふ。)

源太 (氣がかりらしく猶豫ひながら) 氣をつけて居ねえよ。(其のまゝ急ぐ。)

赤魔 (猫の死骸の蔭より、半面を振向けて、赤く輝く眼にて、じろりとお柳を睨む。)

お柳 (心付かず) あゝ、一面に野原に成つた。……水も焼けたか、蛙も鳴かぬが、淺草田圃が又出來ようか。……太郎様で、狐火が燃えさうな晩だ事……寂しいなあ。……

(上野の鐘鳴る) 何時だ知らん、(空を仰いで) まあ、海老屋の時計は最うないのだつけ。(と寂しく微笑む。)

赤魔 (此の間に、土藏の裏をめぐりて、のそくとお柳の背後に出て、赤き杖を取直して、ハタハタと敲いて、箱提灯の灯をばつさり消す。)

お柳 あれ、何やら、眞赤な蟲が、火を取りに、(と心付き、ちらりと赤魔姥の形を認めて、退つて、身構へ) お婆さん?

赤魔 お。

お柳 一寸、お婆さんですか。(お柳の目には姑、横刀自に見ゆ。)

赤魔 おいの……

お柳 何うして、貴老、何しにおいでなすつたんです。……又、看板を消しにかい。(と屹と云ふ。)

赤魔 言はつしやるな、違うたぞ、違うたわいの……過ぎた夜さは、あの夜はな、主が面目なからうと、な! 情の取越ぢや、灯を消した。消したれどもな、今宵はな、今宵はな、己が面目なうて灯を消した。消したれば此の暗さ、星も曇つた暗さを見され。子ゆるの闇と云ふわいの。よ……日頃の事は悪かつたれば、己が詫るに、婆々が詫るに、あやまるに、根岸の里へ歸れえの、己が迎ひに來たのぢやわいの。

お柳 愛想づかしを言はして下さい。……はい、御深切は忝ないが、お心根が可恐しい。最う御

近所へも参りませんから、まあ、然う思つて下さいまし。

赤魔 はアはア。(と赤い舌で二聲笑ひ) 若い婦が氣短な、一旦の事に、身も忘れ、世も忘れて、や、あのやうな事を言ふがいの。壁に耳ある、鬼も聞け、佛も聞けや。……己が手引を好い汐にして歸らいで、二世掛けた男は先づ……何とする氣で居るのぞい。

お柳 似合ない事を云ふのねえ。お婆さん。私たちの情愛が、貴老なんぞに分りますか。此方で聞きたい事だけれど、二世かけた男は何うする氣だ、とお問ひなさるから申しませうね。重さん家は家を出ます。家出をして、私の許へ來るんです。……早くから親御はなし、貴老が育てた人だけれど、情愛の事ばかりは、私が丁と教へました。遅くつても、疾くつても、必ず此處へ見えますから、離縁された、はい然やうならと、男を棄てて出たやうでも、好いた同士が何の、……何時まで分れて居るもんですか。

赤魔 はあ、はあ、(と赤い口で) お、可憐い奴が、あの、云ふ事はよ。……主が出れば、男も出る、其を己が知つたればこそ、老寄が頼むわいの。重太郎が家出をして、根岸の家は何うなるぞ。

お柳 お榿さんもおいででせう……が、そんな事は何うでも可い、私たち二人一所に暮せば、何だつて構やしません。

赤魔 何と、先づ、世間を知らぬに程のある……それは主の我ま、ぢやぞな。

お柳 我ま、でござんすともさ、其の我ま、がしたいために、焼あとへ歸つて來ました。世間の事は存じません。——お婆さん、此處は貴老がたのおいでなさる處ぢやありませんから、早くお歸んなさいまし。

赤魔 此處は己の來る處でなくば、主の居る處でもないんぞの。いや、年寄の役目として、主が其料簡を直さぬうちは、去にたうても、さて、去なれぬのぢや。……や！主がやうな我ま、させて、世間で許すものかいの、許さぬぞい。

お柳 え、許さなけりや、何うするのよ。焦つたいねえ。

赤魔 許さずば何うする、と主は聞くかいの。……お、よく、よう、聞いた。近いたとへぢや、これ見され、此のやうに、骨も皮も、(と猫の死骸を差しつけて)家も、藏も、焼爛れて亡びるんぞい。

お柳 くだいねえ、お婆さん、死んだものは斷念めます。……家や藏なら建直すから、其で可いぢやありませんか。

赤魔 お、さて言ふわいの。……それも生命があつての事ぢや。これ水に逆らうて流されまいか、炎に向うて焼けまいか、若い婦の人間づれ、生身を以た分際で、口廣い事云ふないの！

お柳 私は言ひます、言ふんですから、貴老聞かないで去つて下さい。

赤魔 いや去ぬまい、去んでは己の役目が濟まぬ。……何事も時ぢやわいの、時節ぢやわいの。

……此、コ、ナ(と地をガツシと打ち)みだらな、汚れた、朽ちた、腐れた、爛れた、……いちじくが潰え、腐柿が挫げて、栗の花の蒸し蒸すやうな、廓が焼けて灰に成たは、な、これをこれは、世界の心ぢや、望みぢやと思はされ。愚癡、愚味の迷ひから、瘦我を張つて、何とする。……主の目には何と見える。……花の中に涼しい蔭や、柳の軒に、月も射すと思はうが、己をはじめ世間の目には、それ何ぢや、コナ提灯、棺桶の前に立つて、早や主の其の散り際の、柳の葉を待つやうぢや。な、今の間に心を直いて、花環を取つて、婆々に捧げや、な、其の捧ぐるを、婆々一人にするとと思ふまい。世間の心、目上の言葉に従ふ印ぢや。すれば、身も立つ、亡びはせぬ。……な、分らぬか。分らぬか。これ、あのやうに淺ましい、投込み墓を忘れたかいの。

お柳 あ、お婆さん待つて下さい、其の貴老、投込み墓が、私大すきなんだから、些とお困んなさいなね。

赤魔 む、悪たれな、憎い口の。死際も樂ではあるまい。片目潰れて、片目投げ出て、皮は爛れ、毛は撈れ、尻尾は切れ、腮は裂け、蚯蚓、蜘蛛を、齒じほに塗つて、のたれ死した猫を見

ぬか。おのれの身の行末ぢや。それ、見され、つぶ／＼と田樂ざしに、くさや、くさや。腸か
出て擲んだがいの。(杖につっかけ、お柳の頬へ差つけ、摺りつけ、附廻す。)

お柳 可い加減におし、根岸ぢやない。何處だと思ふ、お柳ちゃんの繩張うちだ。(手鉤に掛けて
引拂ふ。)

赤魔 は、は、(と赤く笑ひ)それ／＼人殺しの道具を掉つて、年寄りに手向ひさらす! 無間の
奈落、五逆罪、早や、それ田樂ざしの火あぶりが、觀面に、主の目前へ迎ひに出た。はアはア。
(嘲笑ふ。)

お柳 えゝも、口惜い、殺すなら殺しておくれ、うるさいねえ。

赤魔 恚ほど云うても肯分けなうて、殺せと云ふか、云ふか、云ふか、婦。

お柳 知れた事だよ。

赤魔 おゝ、殺さう。

お柳 何だとえ。

赤魔 其の前に、も一度聞かう、聞かう、婦。己は聞いた。……頭とか云ふものに、柳の枝を土
に插いて、……何とか云うた、あれは何ぢや。

お柳 覺悟したのを忘れようか。私あ渾名は燕でも、姉妹分にも、お友達にも、餘所の噂は借り
やしない。死んだ姉への義理もある、……井筒屋の土に芽をさして、散つても柳に成るつもり、
風も吹け、雪も降れ、袖は濡れても、袂は裂けても、此處を一寸でも動きやしない、と云つた
が、それが何うしたのさ。

赤魔 おゝ、それ／＼……うゝ、意地と張と、コナコナ、恚る婦が、まだ此の地にある上は、
一夜の内に、又もとの、廓は極樂淨土と成らう。……やあ、闇に目のある鬼も見よ、佛も見よ。
……此の婦一人打棄て置いては、地軸を揺つて虚空に放つた、猛火、劫火の効がないわ!……
それでは己の役目が済まぬ。佛よ、鬼よ、見許され。コナ、コナ婦、近う寄れ。……障子襖と
おなじさまに、其の黒髪を炎に擲んで、袖も、裳も、中空高く捲上げようぞ。(赤き光一閃す。)

お柳 あれえ、(と遁げながら、土藏を楯に屹と視る)えゝ! 不思議なことを云ふと思つた……
姉を殺した、廓を焼いた……あゝ、魔ものか、畜生。(と手鉤を振つて飛びかゝる。)

赤魔 (立廻りつゝ、悠然と杖にてあしらひたるが、烈しき一念に打立てられ、あしらひかねたる
體見えて、あとじさりにじり／＼すさり、うしろ飛びに、土藏の口へひらりと入る。ト同時に、
壁のくづれ、處々、……あまたの顔。中には、二つ三つばかり、押かさなりて見ゆるもあり。
戸口にも五つ六つ、面を見せて、恰も人參菓の如く、おなじ緋の衣着たる童男、童女、ニコニ
コと笑ながら、手に／＼赤き鞠を取つて、一齊にパツ／＼とお柳に投掛く。)

